



「市来の七夕踊」 一番どんの庭上がりの様子

写真提供：山内美恵子氏



## 発刊によせて

本市は「人が輝き文化の薫る世界に拓かれたまち」を将来都市像に掲げ、市政を推進して参りました。今年には市制施行10周年を迎える年であります。これを機に、本市に残る貴重な史料を収集し、まとめることにしました。

今回発刊する「民話・祭り編」は、永年継承されてきた貴重な郷土芸能をはじめ、地域に伝わる民話などの史料を収集することが出来ました。これも偏に、調査にご協力いただきました関係団体、市民の方々のご支援あってこそと存じます。深く感謝申し上げます。

調査で得た史料はすべて掲載できませんでしたが、市民の皆様から提供いただいた史料については今後、それぞれの分野ごとに郷土史料集として発刊していきたいと存じます。本史料集が、市民をはじめ広く活用され、郷土への愛着と文化財の理解の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、本史料集をまとめるにあたり調査にご尽力いただきました郷土史料調査員の方々に対し、深く感謝申し上げます。

平成27年10月

いちき串木野市長 田 畑 誠 一

## 発刊に当って

我が故郷いちき串木野市は、西に白砂青松が続く吹上浜の海岸線を臨み、東に徐福伝説の霊峰冠嶽を控え、海・山・温泉などの自然と温暖な気候に恵まれた風光明媚なところです。また、市内各地には古い歴史があり、現在も数多くの民話や民俗芸能が継承されております。しかし、時代の変化とともに、市内各地で言い伝えられてきた民話も高齢者から伝え聞く機会が少なくなってきているとともに、民俗芸能も後継者不足等により継承することが難しくなってきております。

そこで教育委員会では、民俗学や古文書などの専門家を郷土史料調査員としてお願いし、数年に渡り市内全域で調査を行ってまいりました。その結果、多くの市民の皆様から貴重な民話や郷土史料を収集することができました。ご協力いただきました市民の皆様方に対し深く感謝申し上げます。

今回発刊する史料集「民話・祭り編」は、そうした貴重な史料等を編集したものであります。

本史料集が子供たちの郷土教育や市民の生涯学習などの資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、本史料集をまとめるにあたり調査及び編集にご尽力いただきました調査員の皆様、そして関係の皆様方に対し、深く感謝申し上げます。

平成 27 年 10 月

いちき串木野市教育委員会  
教 育 長 有 村 孝

# 例 言

- 1 本書はいちき串木野市郷土史料集1である。
- 2 調査については、いちき串木野市教育委員会が主体となり、郷土史料調査員が実施した。
- 3 本書の執筆については、郷土史料調査員が行い、郷土史料編集員会で編集した。
- 4 民話編については、できるだけ原話に基づいて掲載した。
- 5 民話編・民俗編に関しての解説は、郷土史料調査員の見解をもとに行った。
- 6 地名、人名、難読等については編者により適宜ふりがなを付記した。
- 7 方言についてはカタカナ表記で表記した。
- 8 指定文化財に関しては、登録名称で表記した。

# 目次

発刊によせて	いちき串木野市長	田畑誠一	1
発刊に当たって	いちき串木野市教育委員会教育長	有村 孝	2
例言			3

## 民話編

1	ヒーヒーどんと馬	14
	はてな？	
2	カッパの恩がえし	17
	はてな？	
3	ガラッパ（河童）どんの手	18
	はてな？	
4	鉄砲の玉をかぞえる猫	20
	ネコガン（猫神）	
	はてな？	
	ニタ待ちはするな	
	はてな？	
5	川上にのこる大男の話	23
	丸山モッコ丘 薩摩川内市市比野	
	飯牟礼山	
	天狗の足跡 阿久根市波留	
	はてな？	
6	花もれどん	25
	はてな	
7	かみなりどんのクソ（うんこ）	28
	はてな？	
8	別府ニセの韋駄天走り	30
	別府ニセの韋駄天走り	
	タカランバッチョ（竹の皮でつくられたかさ）が宙に舞う術の話	
	デンゼの韋駄天走り	
	鞍馬用心流	
	はてな？	

9	島平の舟人剣法	34
	はじめ、腕に自信がなかった舟人 秘密剣術の師匠休ぜおじどんに入門 敵をさんざんに打ちのめした島平の若者 町に自由に出かけられるようになった島平の人たち はてな？	
10	白いもののきれいな松尾神社の神様	37
	はてな？	
11	黄金を生んでくれたうさぎ	38
	はてな？	
12	富士山の初夢を見て長者になった話	41
	はてな？	
13	大里川いぜきものがたり	43
	はてな？	
14	水神にささげられた川上のおもいどん	45
	長崎堤防と袈裟が瀬（薩摩川内市高江町） はてな？	
15	荒川のもれんび（亡霊の火）	48
	はてな？	
16	田中どんのもれんのひ（亡霊の火）	49
17	ぞうりを後ろ向きに履いて落ちのびた虎若	49
	はてな？	
18	アブンサマ（鎧様）	50
	はてな？	
19	池の主に飲まれたヨシタオゴジョ（寄田のお嬢さん）	51
	はてな？	
20	鷹の子が神となった話	53
	はてな？	
21	白山かけはし稚児の宮	54
	霧島の神仙郷 はてな？	
22	徐福は冠岳に本当に来たの？	55
	はてな？	
23	なまけたお坊さんをこらしめた天狗	56
	はてな？	
24	キッコンと冠岳の天狗	57

	はてな？	
	はてな？	
25	冠岳と金峰山のけんか	61
	はてな？	
26	やんぶし（山伏）松	62
	はてな？	
27	お光ものがたり	63
	亡霊に髪の毛を引きずられる	
	怨霊をなぐさめる	
	A家では今も門は作らない	
	はてな？	
28	剣道の達人 庵者と左衛門	67
	はてな？	
29	太刀割石	68
30	冠岳のウヘツ（大蛇）	69
	胴体の径が男の太股ほどの大きさのウヘツ（大蛇）	
	かま首を持ち上げて睨んだウヘツ（大蛇）	
	ウヘツ（大蛇）の骨	
	しのめが迫のウヘツ（大蛇）	
	すんけん山のウヘツ（大蛇）	
	メシゲを持っていくウヘツ（大蛇）	
31	舟川の山姫	70
	はてな？	
32	洗濯女	71
	はてな？	
33	タヌキの仇討ち	72
	はてな？	
34	安茶ヶ原のキツネ	74
	男の子に化けたキツネ	
	今度は、娘に化けたキツネ	
	良いことをしてやったと最後まで信じやった源助どん	
	はてな？	
35	黒江嘉門介の怨霊	77
	はてな？	



## 祭編

1	いちき串木野市の祭りの様子	82
	(1) 春の祭り	
	(2) 夏の祭り	
	(3) 秋の祭り	
	(4) 冬の祭り	
	(5) そのほかの祭り（芸能）	
2	ガウンガウン祭－深田神社春祭に伴う芸能（田打）	90
	(1) ガウンガウン祭の由来	
	(2) ガウンガウン祭の内容	
3	びょうびょう祭	92
	(1) 由来	
	(2) 内容	
4	太郎太郎祭－羽島崎神社春祭に伴う芸能（田打・船持祝）	95
	(1) 祭の由来	
	(2) 祭の概要	
	(3) 「田打ち」と「船持ち」の祭の内容	
	(4) 5歳児の祝い	
5	祇園祭	98
	(1) 由来	
	(2) 山のこと	
	(3) 男山と女山	
	(4) 漢林王囃	
6	市来の七夕踊	102
	(1) 祭の様子	
	(2) 踊りの構成	
	(3) 話し合いと踊り相談	
	(4) 七夕道作りと七夕飾り	
	(5) 習らし	
	(6) 作り物と行列物	
7	太鼓踊	111
	(1) 羽島南方神社太鼓踊	
	(2) 川上踊	
	(3) 虫追踊	
8	そのほかの祭り（芸能）	117

- (1) 芹ヶ野の虚無僧踊
- (2) 生福の虚無僧踊
- (3) 金山の石当節踊
- (4) 須賀の相撲踊
- (5) 本浦の相撲甚句踊
- (6) 土川の左官踊
- (7) 野元の虎とり
- (8) 棒踊
- (9) その他の祭

解説 ..... 128

- (1) 棒踊
- (2) 太鼓踊
- (3) いちき串木野市の太鼓踊の特徴

## 資料編

ガウングウン祭 ..... 136

田植歌

羽島崎神社春祭りに伴う芸能「太郎太郎祭」 ..... 136

羽島崎神社奉納「舟唄」歌詞

羽島崎神社船唄

祇園祭 ..... 142

漢林王囃子「祇園山琉人立役賦帳」

市来町湊町の歌詞

カンカンノウについて

元の歌の歌詞

上野村の歌詞

市来の七夕踊 ..... 149

七夕踊のうた

羽島南方神社太鼓踊 ..... 151

演目

楽譜

虫追踊 ..... 158

虫追踊唄

石当節 ..... 158

石当節の歌詞	
噺子ことば	
石当節に合わせて歌われる歌	
須賀の相撲節	160
相撲甚句	
本浦の相撲甚句踊	162
相撲甚句踊の歌詞	
相撲甚句の歌詞	
土川左官踊	166
掛け合いのことば	
棒踊の歌い方	170
歌詞の歌い方	
棒踊のよく歌われる歌の歌詞	
明治 18 年頃の棒踊の記録「入来定穀日記」抜粋	172
棒踊一覧表	174
「市来の七夕踊」庭割図	178
平成 26 年度 イベントカレンダー	183
協力者	184
民話編参考文献	184
祭り編参考文献	184
いちき串木野市郷土史料編集の組織	186







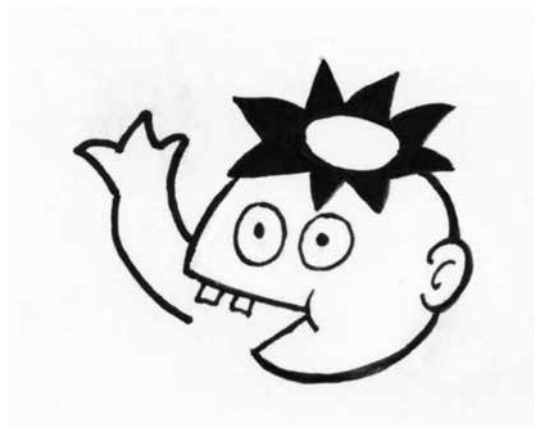
# 民話編

## はじめに

民話というのは、昔話と伝説、神話・世間話などをふくめて表現した言葉です。最近では、これが混同してきたりしてきて、分けることがむづかしくなっていますので、ここでは、まとめて民話として話をすすめていくことにします。

## 1 ヒーヒーどんと馬

「ヒーヒーどん」というのは、河童のことです。ほかに「ガラッパ」とか、「ガールドン」、「ワロ」などとも呼ばれています。毎年、3月頃になると夜明け近くヒーヒーと鳴きながら山を下り川まで下りてきますが、その姿は人には見えないと言われています。山の上から鳴きながら下りてくるので、この辺を通るはずだと思って、隠れて見ている、すぐ近くで声がしても姿は見え、いつのまにか下



の方から声が聞こえ、下って行くのです。ヒーヒーどんは、春から夏にかけては川にいて、秋から冬は山にいたといわれます。その証拠に、夏はヒーヒーどんが川で遊ぶので水は濁っており、秋から冬は丘や山にのぼるので、川の水はきれいに澄むといわれています。丘や山は、春から夏にかけてクモの巣がたくさんありますが、秋から冬はあまりありません。それは、ヒーヒーどんが丘や山を走りまわって遊ぶからだといわれています。

ヒーヒーどんは、馬が大好きです。特に馬の上に乗って悪さをして遊ぶのが好きなようです。そして、馬にはヒーヒーどんの姿が見えると言われています。

ある日、源助どんは、栗毛の馬を引いて川をわたりました。栗毛の馬というのは、たてがみとしっぽが栗の色の赤褐色の馬のことです。馬は「ウセグラ（荷物を積むための道具）」をつけていました。山から、たきものである薪を「ウセテ（負わせて）」くるためです。ある日、川でヒーヒーどんが、おおぜいで遊んでいました。「おい、あの馬に乗ろう。」と一匹のヒーヒーどんが言い出しました。すると、「おれも」「おれも」と皆が馬のそばにやってきました。馬は「乗せてな

るものか」と思って、立ちどまり、鼻息を吹きかけはじめました。ヒーヒーどんたちがいたずらをしている様子は源助どんには見えません。急に馬が妙なことを始めたので、「こら、何をしとつか（何をしているか）、早よいかんか（早く行かないか）」と馬を叱りました。で





も馬はますます怒って耳を立て、今度はうしろ足をはねて、ヒューヒューどんをおっぱらい始めました。

馬はひづめの先に蹄鉄という鉄の道具で馬のひづめがすりへったり、傷つけないようにするためのものをつけていました。

ヒューヒューどんは、鉄を見たときたんに逃げ出しました。ヒューヒューどんたちは金物がきらいだったからです。それでも、いつかあの馬の蹄鉄がなくなったら乗ってやろうとねらっていました。

やがて秋がきて、ヒューヒューどんは丘や山に上がって行きました。そして馬小屋のあたりを、いつも見はっていました。ある日、馬は、山から薪をウセテ帰ってくる途中、石ころ道のところで後足の蹄鉄が両方ともはずれてしまいました。ヒューヒューどんはそれを見のがしませんでした。でもまた、馬があばれるといけないので、「馬小屋に入ってからにしよう、馬小屋の中は狭いからあかれても大したことはないから。」と、皆と話しあいました。さて、その夜のことで。ヒューヒューどんが大ぜいやってきて、馬の上に乗って、馬の前髪やたてがみを人間の女の子がするように、三つ編を何本も編んで下げました。しっぽも三つ編を編んで下げるなど、やりたいほうだいのことをして遊びました。

馬は最初のうちは、あかれていましたが、だんだん疲れて、されるがままになるしかありませんでした。

源助どんは、「なんで今夜は馬があばれるのだろう。」と思って、馬小屋に行ってみました。何も見えません。あくる朝、源助どんは、馬を引きだしてみてもどろきました。前髪もたてがみもしっぽも、三つ編が何本も何本も下がっているではありませんか。「さては、ヒューヒューどんがいたずらにきていたのか。お前はかわいそうだったね。」と言いました。



これは川上に残っている話ですが、それでは、似たような話は他の地域にはないのでしょうか。

薩摩川内市宮里町前島に次のような言い伝えがあります。

それは、昭和3年の秋のことでした。永野段という地名がつけられた畑から父が引いて帰ってきた馬を、前を流れる平良川に入れて水洗いをしてやるのが少年の毎日の仕事でした。その日もいつものように、馬を川に入れるために引いて行ったのですが、いつもと違ってなかなか川に入ろうとしません。やっと前足だけを川に踏みこませて水洗いをして連れて帰りました。父に話すと、河童がいたのだろうということでした。寝る時になって、それは午後10

時頃だったようですが、馬が鼻息を荒くして、たてがみを前後左右に振りながら、いつもとは違った声をあげていました。今にも小屋を飛びださんばかりにあばれるのです。父は綱を両手にとってつなぎました。とりあえず、その夜はそのまま寝ました。ところが、朝起きて馬小屋に行ってみると、おどろいたことに、馬のたてがみはもつれ、ちぢれていたのです。夕方、父が畑仕事から帰ってきて、たてがみのちぢれをほぐしにかかりましたが、なかなかほぐれません。最後はとうとうたてがみを生えぎわからぶつつり切ってやりました。こんな日が一週間ぐらい続いたと思いますが、馬の体はやつれ、とうとう死んでしまいました。

## 【はてな？】

なぜ、河童が馬に悪さをするのでしょうか。

伊佐市で聞いた話ですが、ある人が馬を山につれて行って、木材の引き出しをしました。その日は、日が暮れましたので、山に泊まることにしま

した。そういうときは、馬のまわりに柴を立て、山の神様に「この土地を馬に貸してください。」と、お願いするのですが、その夜はそれを怠けてしませんでした。夜中になってきたら、馬があばれだしてどうしようもありません。あくる朝、馬の様子を見てみたら、前髪もたてがみもしっぽも毛がみだれ、馬は疲れきっていました。これは、山の神様が怒ったからだろうと考えて、次の夜は、山の神様の許しを得てから、山に泊まりました。そうしたら変わった事もなく、馬は静かに眠っていたといえます。これも、「ヤマワロ」という河童のいたずらだと考えられます。河童が山にいるときは「ヤマワロ」といいます。

このような話が、全国で聞かれるのは、馬が神様の使いであると考えられているからで、伝統的な神幸祭や絵馬の様子にも見ることが出来ます。神社の神幸祭というのは、神様がお出ましになる祭りのことで、このとき、馬も一緒に歩いて行きます。絵馬というのは、神様にお願いごとをするとき、馬の絵などを描いた木の板のことです。昔は、神様には本当の馬をさしあげていたそうです。

それでは、なぜ河童が馬にいたずらをしたりするのでしょうか。それは、水の神様である河童が、乗りものとして馬が欲しいと思っているからだと言われています。神様は馬に乗ってあらわれるといいますが、河童も神様と考えられているのです。一方、馬は水と深くかわり、池月などの伝説的な名馬は池の中から出てきたと考えられています。また、馬を川につないだままにしておくと河童が憑くという言い伝えのあるところも多くあります。熊本県の天草では、とくに子孫をふやすための種馬にはよく憑くと言われます。これは優れた馬の子は水の世界から得たとする信仰のしるしでもあるとされています。



## 又 カッパの恩がえし

昔むかし、一匹の河童が川で洗濯をしている牛ノ江の娘に一目惚れし、どうにかして自分のお嫁さんに欲しいと思っていました。そこで日の暮れるのを待って、美しい若者に化け、娘の家をたずねて行きました。若者は、門をたたいてたのみました。

「旅のものでございますが、夜になってしまい泊まるどころもなく苦勞しております。ご迷惑とは思いますが、今晚、一夜お泊めいただきとうございます。」

娘はちょうど門口にいましたが、このあたりでは見たこともない立派な若者に一目で惚れこんでしまいました。次の朝、娘は「どうか私を嫁にしてください。」

と泣きながらたのみました。そこで若者は娘の両親に、

「お宅の娘さんがこのように言われますが、私の嫁にくださいませんか。」

と言いました。両親もまさかこの若者が河童とは夢にも思いませんから、

「どなた様の若様とも知りませんが、このような、いきとどかない娘でよろしければ、どうか嫁にもらってください。よろしく願いいたします。」

とていねいな言葉でさっそく承知しました。

一人娘なので若者が婿入りすることになりました。婿入りというのは、男性が女性の家に入って結婚し、その家で生活することです。それ以後楽しい生活が続きました。そのうち娘は身重となり、やがて月みちて出産の日がやってきました。母親はたらいにうぶ湯を準備して待ちました。すると、子供が次々と12人生まれました。産湯をつかわせると子供たちはピョンピョンと飛び出して、あれよあれよとおどろいているうちに、全部川へ飛びこんでいなくなってしまいました。

ある朝早くいつものように、畑の見まわりに出かけようと思い、ふと父親が囲炉裏の自在鉤を見ますと、新鮮な川魚が十数匹つり下げてありました。囲炉裏というのは、昔はどの家にもあり、部屋の中で火をたいてお湯をわかしたりするところです。自在鉤は、囲炉裏の上にあります、やかんや鍋をつるし、お湯をわかしたり、料理をしたりする道具です。火加減をす

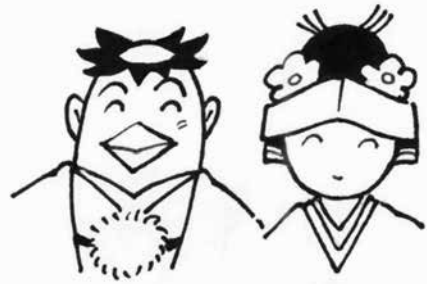
るために上げたり下げたりすることができます。

「おや、誰がとってきたのかな、下男かな。」

と父親は言いました。家中の人にたずねましたが、誰一人知る者はいません。

「ハハアわかった。子供を産んでくれたお礼に、河童どんが持ってきてくれたんだわい。河童どんもそんな気を使わんでよいのに。」

と家の者たちに語るのです。ところが次の日も、またその次の日も毎朝、川魚がいつもの自在鉤に下がっています。そしてそれが何年も続きました。



そのうち自在鉤も古くなってしまいました。父親はもっとじょうぶな自在鉤にしようと、ある日、町に出て鉄で出来た鉤かぎを買ってきて、囲炉裏にかけました。すると、翌朝から川魚の贈り物はぱったりなくなりました。河童かわもは金物が苦手だからでしょう。

元禄4年（1891）8月2日に、その河童かわもを神様として祀まつることとなり、川上小学校近くの川土手かわどてに水神様の石塔せきとうを建てました。現在この水神様のまつり日には、赤飯せきはんとシトギ（米の粉を水でこねて団子にしたもの）を供え、3月節供と12月28日には餅を12個ずつ作って供えています。

## 【はてな？】

人間と河童がなぜ結婚するのでしょうか。

全国には、異類婚姻譚いるいこんいんたんという、人間が人間以外の生き物と結婚をする話が数多くあります。河童は水神なので、娘が水神の妻になるということにもなります。



上の物語の中で不思議に思うことは、子供が生まれた後、河童と一人娘との夫婦の関係はどうなったのかということです。河童が魚を届けるのに対して、父親が「そんなに気を使わんでもよいのに。」と言っています。娘が河童にだまされてひどい目にあったという被害ひがいの気持ちはなかったのでしょうか。それとも、娘が水神様の子供を産んだことに対する誇りほこがあるのでしょうか。現在は、河童は水神様のおちぶれたもので妖怪ようかいの一種だと考えられたりしています。しかし、そういう思想しごうが出てくる以前の、古い河童水神の考え方、すなわち、河童かわもを敬う思いが残っているころの話だと思われま

## 3 ガラッパ（河童）どんの手

江戸時代、生福せいふくの川崎かわさきというミョウズドン（名頭殿ひやくしやうかど：百姓ひやくしやうの門かどという組織そしきの責任者せきにんしや）が山の仕事に行きました。その帰りに川ぞいのやぶこみちの小道こみちを通っていると、2、3歳と思える男の子のようなガラッパがひょっこり出てきました。そして、ミョウズドンの足首をぎゅうとにぎりしめました。ひやっとしておどろきましたが、そこは、気の強いミョウズドン。腰こしにさしていた鉈なた（薪まきなどを切る刃物はもの）を抜き取り、ガラッパの腕うでをえいっと切り落としてしまいました。そして、その腕うでを持ち帰り、箱の中にしまいました。

その夜のことで、皆が、寝しずまったころ、家のまわりを何かが走りまわっている音が

して、ミョウズドンは目がさめました。耳をすましていると、「ヒョウヒョウ」と高く低く、遠くに近くに聞こえます。その声はミョウズドンにせまってくるようでした。耳をかたむけていると、「カエセ、カエセ」と言っているように聞こえます。さすがのミョウズドンもうすきみ悪くなりましたが、勇気を出して一声高く「エッヘン」とせきばらいをしました。すると物音はしなくなりました。

その次の夜、夕べのことを考えると、いつまでたっても眠れません。そのうち、秋の木の葉が風に吹かれて鳴るような音がして、「ザワザワ」とせまってきます。「来たな」と思った時、大ぜいのガラッパたちが、とがった口をあけて、「カエセ、カエセ」と言い、今にも家の中に飛びこんできそうないきおいです。がまん出来なくなったミョウズドンは、夕べより一声高く「エッヘン」とせきばらいをしました。



こういうことが1週間続きました。その後は、ガラッパは来ませんでした。ガラッパの腕は、1週間以内なら継ぎ合わせても、もとどおりになるといわれています。腕がつけなくなつたガラッパはたいへん怒りました。その後、しばらくして、ガラッパたちは、また「カエセ、カエセ」とさけぶようになりました。ミョウズドンは夜も眠れません。すっかり元気がなくなっていました。毎晩、毎晩、苦しんだのです。近所の人たちは、「ガラッパのたたいじゃ(たたりだ)」といて恐れました。そこでミョウズドンは、ガラッパに深くお詫びしました。その腕を神様として祀り、子孫代々、川崎家の守り神としました。JA さつま日置生福支所の東側の田んぼの中にこんもりとしげった大きな木があります。その根元にあるのが「ガラッパの手の神様」です。寛文8年(1669)4月8日に建てられています。その石塔には「十王」の文字がきざまれています。十王というのは、冥土(あの世)に居て、亡くなった人の生前の罪が重いか、軽いかを判断するえんま王など10人の王のことです。特に、えんま王だけをいうこともあります。この判断によって次の世に何に生まれてくるかが決まるということです。

## 【はてな？】

なぜ、河童の手を神様としたのでしょうか。

それは、河童は水神様と考えられているからです。河童というと何か妖怪の一種のように思われますが、もとは、水神様として敬われていました。それに「ガラッパの手」と聞くと、ガラッパは本当にいるのではないかと想像を豊かにしてくれます。



## 4 鉄砲のたまをかぞえる猫

ここでは火車猫の話について考えてみましょう。火車猫というのは、地獄からあらわれ、死体をうばっていくと考えられた猫のことです。火を出す車のため、この名がついています。猫が死体を飛びこえると死んだ人が火車猫にうばわれるという言い伝えや、死体が火車にうばわれそうになったとき、位の高いお坊さんが身につけている

袈裟や数珠を投げたらうばわれなかったという話も、薩摩川内市入来町や宮崎県のあちこちに残っています。入来町では、鹿児島島の屋敷で人が急に亡くなりましたので、死体の入ったお棺とよばれる木の板で作った箱を、入来にある寿昌寺という寺のお墓に埋めることになりました。そこで、棺をかついだ行列が入来峠にさしかかった時、棺が急に軽くなりました。不思議に思って調べてみたら、中はからっぽで偉い人の死体は消えていたという話です。

火車猫についての話は、いちき串木野市にも語り伝えられており、川上と冠岳宇都にあります。川上では「カジャネコ（火車猫）」として、宇都では「ネコガン（猫神）」という題で語られているのです。二つとも九州山脈（九州に帯）のようにつらなっている山の狩りをする人々に伝えられています。狩りをする人だけでなく、それを語り伝え、広めるお坊さんの文化の影響が強いことが特色です。ここでは、まず宇都の「ネコガン」の話を紹介し、「カジャネコ」とくらべながら、いちき串木野市の火車猫の話について考えてみましょう。



## ネコガン（猫神）

ある日のこと、ひとりの狩人がニタマチという待ち伏せをする事にしました。猪は体についた寄生虫のダニを取りのぞくため、ニタという泥水がたまったところに水浴びをしにやって来るのです。そのニタ近くの高い木の上に、やぐらとよばれる小屋を作り、猪を待ち伏せすることを「ニタマチ」といいます。その準備のために、鉄砲のダゴをつくって、たたみの上に転がしていました。ダゴというのは鉄砲の弾のことです。その時、そばで遊んでいた猫が「ニャン」と鳴いてうなづくようにしました。また、ダゴを作って、転がしますと、また「ニャン」と鳴きました。3度目に転がすとまた「ニャン」と鳴いたのです。しかし、狩人は気にもかけないでいました。

狩人は夕方になると狩りに出かけ、ニタのやぐらの上で待つことにしました。すると、何やら白いものが出てきました。これは不思議だと思って鉄砲を撃ちました。たしかに何もの



かに命中しましたが、同時に「カチリ」という音がしました。しかし、下の白いものはまだ動いています。次々に鉄砲を撃つと、やはり前と同じように命中したかと思うと、また「カチリ」と音がしました。狩人は、作ってきたダゴを3発とも撃ってしまいました。最後に、かねてから信仰していた鉄の切りダゴを撃ちました。すると、今度はみごとに命中したのです。切りダゴというのは昔、狩人が常に身に付けていて、危険がせまったとき最後に撃つための弾のことです。それを「信仰弾」とも呼んでいます。

夜があけてやぐらから降りてみると、そこには、鉄瓶のふたが転がって白い血が流れていました。その血のあとをたどって行きますと、ちょうど自分の家のかまどの下まで続いています。そして、そこには猫が死んでいました。

その後猫の霊がたたるので、家に猫神を建てて祀りました。鉄瓶のふたは、猫が鉄砲の弾を受け止めたもので、狩人が鉄砲を撃つたびに「カチリ」となったのはそのせいです。猫は、狩人が3発の弾を作るのを見ていて、知っていました。しかし、4発目の弾が残っていると知りませんでした。その4発目が命中したのです。また、猫は、弾が当たらなかつたら、この狩人を食うつもりだったろうといわれています。今もこの猫神は宇都集落にあります。

## 【はてな？】

いちき串木野市の火車猫は、葬式の時死体をうばうという話ではありません。狩りと関係があるようです。なぜでしょう。



猫はいつも、狩猟者のそばにいて、猟師が弾を何個作るかをかぞえておきます。猟師が狩りをするとき、撃ち終わったらその猟師をおそうという内容になっています。これは、冠岳の近くにある宇都にしても川上にしても、九州山脈の狩りのしきたりや文化の影響を受けていることを示しています。葬式で死体をうばうという猫ではなく、猟師をおそうというおそろしい生き物であるということがわかります。冠岳から市来の奥深い山々は猪や鹿がとれる豊かな狩りの場であったために、そのような言い伝えが残っているのです。

第2に、なぜ、火車猫になるのでしょうか。川上では、猫は、昔から魔という不思議でおそろしい力をそなえた動物であり、一貫目（約3.75kg）をこえるとカジャネコになるといわれています。川上にしても宇都にしても猫は数をかぞえることができるという、頭のよい、不思議な生き物であることがわかります。薩摩川内地方では、「猫の前で人の悪口を言うものではない。言うとも必ずその人に伝わる」といわれて気味悪がられています。猫の思っていることは人に伝わるのでしょうか。

第3に、なぜ、「信仰弾」と呼ばれているのでしょうか。川上では、狩人がふところに持っている弾を「フトコロダマ（懐弾）」と言っていますが、宇都では「切りダマ」と言い、別名

「信仰弾」とも言っています。信仰に根ざした弾というので宇都の話は、狩人を守ってくれるという、神様と関わりのある話です。九州山地では「キリカネダマ」と言っているところが多いです。

第4に、なぜ、鉄瓶のふたを弾止めにする話がいちき串木野市に残っているのでしょうか。

猫が、鉄砲の弾を防ぐ時、鉄瓶のふたを弾止めにするというのは九州山地に昔から伝わっている話で、話のものと形をとどめているのではないのでしょうか。いちき串木野市には獵師が多かったということを物語っていると思われれます。

ただ、川上のカジャネコは、一発撃つごとにひらりと身をかまし「ニタマチョ、スンナチュドガ。(ニタ待ちをするなど言うだろうが)」と叫びました。狩人に対して、猪がダニを落とすために喜んでやってくるニタで待ち伏せて撃つようなひきょうな真似をするなどたしなめ、生き物を殺すことをいましめているのです。猪や鹿を百頭撃つと、人一人殺したのと同じ罪になると言われていました。

さて、ここで、この話の発生地と思われる九州山地の奥地、宮崎県の米良地方（現在、東米良村は宮崎県西都市銀鏡と尾八重。西米良村は児湯郡西米良村）の話を紹介しましょう。

## ニタ待ちはするな

ニタで猪などを撃ちに行く時は、鹿の玉（年老いた鹿の内蔵にあるという玉のこと。鶏の卵ぐらゐの大きさで淡い紅色をしたもので表面はすべすべしているという。お寺や古い家で秘密にして保存されている）や鹿の耳（鹿の耳は非常に敏感で神の声を聞くことが出来るとされる）などのお守りと、隠し弾を持って行きます。しかし、獵師は、そのことを絶対に声に出して言わないし、見せもしません。隠し弾はマタ猫に備えるものだそうです。マタ猫というのは、川上の火車猫にあたるものです。米良地方では、マタ猫は獵師の家の囲炉裏の上にある四角い板（天蓋）から自在鉤を伝わって降りてきて、鍋をさわるといふ化け猫のことで、「ジゼカギをせせる（つつく）」とか「鍋をせせる」と言われて恐れられています。家の主人が座る囲炉裏の横座の隅には、マタ猫に投げつけるためのコブシ大の丸い石つぶて（投げつけるための石ころ）が置いてある家もあります。

米良の獵師たちには「ニタ待ちをしてはならない」という暗黙の申し合わせがあります。ニタには猪以外の動物も水飲みに来ます。そのため、そこでは、楽して獲物を獲ることが出来ますから、簡単に獵が出来ることをしてはならないという戒めなのです。仏教の不殺生の戒めもあります。

これに関して次のような話が米良地方にあります。

ある時一人の獵師がニタ待ちをしていました。しばらくすると獣ではなく化け物があらわれました。最初に出てきたのは、「トッテンタクリ」の杵五郎というタテ杵（餅や米をつく時に、たてに上下させながらつく杵のこと）に似た姿で、一本足の妖怪でした。立っては倒れ、起き上がってはまた倒れるという動作をくりかえしていました。獵師は恐ろしさで声も出ず、



もちろん鉄砲を撃つことも忘れたといいます。

次にうす暗い中に、ランランと光る目玉が出てきました。それがニタ近くに来た時、大猫であると分かりました。しかもその大猫は鉄鍋をかぶっています。猟師は、恐ろしさのあまり、じっとしておられず、大声を出してしまいました。大猫は猟師に気づき近寄ってきたので、必死に大猫をめがけて撃ちました。しかし、大猫は仁王立ちになってかぶっていた大鍋でたくみに弾をかわします。しかも猫は、弾をよけながら猟師が撃った弾を数えているようすです。ついに猟師は弾を撃ちつくしました。すると大猫は勝ちほこったように鍋を置き、飛びかかってこようとしてました。その時、猟師はもう一発、隠し弾があったことに気づき、弾を撃ちました。猫は悲鳴を上げて藪の中へ消えました。猟師が血のあとをたどっていくと、奥山から里に近づき村に入りました。血は、我が家へと続き縁側から床下へ。そこには日頃猟師がかわいがっていた猫が死んでいました。

こういうことがあるので、米良の猟師は、部屋にいる猫を追い払ってから弾を作るものでした。

## 【はてな？】

いちき串木野市には、マタ猫や火車猫が、自在鉤を伝わって降りてくるとい話はありません。飼い猫が火車猫になるとい話があります。猫自体に不気味さを感じているので



しょうか。しかし、マタ猫が鉄砲の弾を数えるとか、鉄鍋で身を防ぐのは川上や冠岳宇都にもあります。隠し弾で撃って血のあとをたどっていくと猟師がかわいがっていた猫が自分の家の床下で死んでいたとい話は川上のものと同じです。そうすると、宇都の話が古いとか、川上のものが新しいとかは、簡単に判断できないことが分かります。違った形の話が九州山地の猟師や修験者の口で、話の原形を変えないで伝わってきたのでしょうか。昔話は、一定のリズムがあって、元の話が忠実に伝わりやすいということ、さらに、いちき串木野市では伝説となって皆が納得するようわかりやすく、合理的な話になっていることが分かります。

## 5 川上へのこの大男の話

いちき串木野市川上中組の珍ノ山から観音ヶ池近くにある岩屋観音に行く途中、大きな木の根もとに巨大な岩がどっしりとすわっています。昔、大男が片足を、矢岳（標高410.2m）の行司塚というところに置いて、もう一方の足を甕島にかけて渡ろうとしました。ところが、

渡ることができずに、尻もちをついてしまいました。その大きな岩が尻もちをついたところだといわれています。岩の上のところが少しくぼんでいます。

その大男のように大きく強くたくましくなるために新しく青年団に入った「ニセ（二才）」とよばれる人たちは、岩屋観音に行くときはこの大きな岩のところで休み、帰るときはその岩で焼酎を飲まされました。焼酎を飲みなれていない新しい「ニセ」たちには、おいしいものではありませんでした。昔の青年団の「入団式」という青年団に入るためのしきたりは、非常にきびしいもので、悪いことでもしようものなら棒でたたかれることもありました。村の大人に会ったらかならず挨拶をするように礼儀作法の教育もされました。

毎年、4月には、「ウニセ（大二才）」といわれる青年団の先輩たちが、入団したばかりの「ニセ」たちをつれて岩屋観音にお参りに行くしきたりがありました。新しく青年団に入った「ニセ」たちは焼酎の入った瓶を担いで登るのです。途中、大男が尻もちをついたという大岩の上で休み、岩屋観音に参りました。帰りも、その岩の上で休むことになっていました。その大岩の上で、飲みなれない焼酎をあびるほど飲まされ、新しく入った「ニセ」たちは、ぐでぐでんに酔っぱらい意識がぼんやりして歩けなくなり、道をはうようにして、やっとのことで川上中組の集落にたどりつくものでした。

このような大男の話が、いちき串木野市にあるのはめずらしいですね。それでは、近くの市や町にはどのような話が残っているのでしょうか。見てみましょう。近くでは、薩摩川内市樋脇町と日置市伊集院町、阿久根市に残っています。



## 丸山モッコ丘 薩摩川内市樋脇町市比野

薩摩川内市の塔之原と市比野のほぼ中ほどのところにおわんを伏せたような半円形の美しい山があり、丸山とよばれています。この山は、「フトドン（太殿）」といわれる大男が一晩で作った山だといわれます。「フトドン」は一晩で近くにある蘭牟田池を掘りました。その土をモッコに山もりにして捨てたところが丸山だということです。

※「畚」というのは、竹を編んで作り、二人で前後を持ってものを運ぶ道具の一つです。

## 飯牟礼山

昔、日置市伊集院町の飯牟礼というところに頭が雲まで届くという大きな鬼がすんでいました。その鬼は体が大きだけでなく非常に力持ちでした。ある日、「飯牟礼山と桜島とどちらが重いかおれが持ち上げてみよう」と思いました。大鬼は、大きな山オコで、片方には飯牟礼山を、もう片方には桜島をかつごうとしました。山オコというのは、ものをかつぐてん

びん棒の事です。ところが、海に浮かぶ桜島は持ち上がりましたが、飯牟礼山はびくともしません。何度やっても同じなので、おこった大鬼は、山オコで飯牟礼山の頭をたたきました。すると山は二つに割れて、矢筈岳と諸正山にわかれてしまいました。このときふんばった足跡が水たまりとなり、上池と下池という水が青々とした美しい池になりました。大鬼はその次に矢筈岳と桜島をくらべようとしました。ところが、桜島が重すぎてうまくいきません。大鬼はおこって桜島の頭をたたきました。すると桜島はドカーンともものすごい音を立てて爆発しました。それ以来、桜島はふんえんを上げ続けているのだということです。

## 天狗の足跡 阿久根市波留

大昔、波留の八幡が丘の森に天狗が住んでいました。天狗は、森の頂上の大岩の上に立ち、そこから、阿久根の海の沖に浮かぶ阿久根大島をめがけて「やーっ」とするどい声を立ててとびました。しかし、届くことができず、天狗は海の中に消えてしまいました。そのふんばった大岩にはその足跡が残っています。

### 【はてな？】

大男の話がなぜ、あちこちで語られているのでしょうか。



大男や「フトドン」、大鬼、天狗の話は、いちき串木野市の近くの市や町、特に薩摩半島側に民話として語られています。大隅半島から日向にかけては大人弥五郎という大男の話があります。弥五郎は民話としてだけでなく弥五郎人形行事として秋の「ホゼ（豊祭）祭」にはなやかに登場してきます。「ホゼ」というのは豊作の祭りと考えてよいでしょう。

川上の大男の話は、阿久根の天狗の話に似ているのでしょうか。阿久根には天狗がふんばった岩に足跡があり、いちき串木野市には、大男が尻もちをついた跡が大岩の上に残っています。

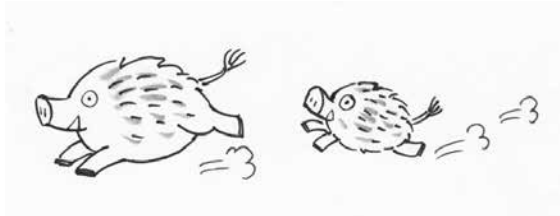
昔の人にとって、大きな山や岩がどうしてできたのか、あるいは、大岩をそこに誰が運んできたのだろうかということは大きな疑問であり、謎でした。そこで、大男が作ったり運んだりしたということにすれば都合がよく、また皆が、うなずいてくれます。科学知識のない大昔、それが昔の人たちの世界や人生に対する見方、考え方であったのです。大男や弥五郎は神に近いものだったと考えてよいのではないのでしょうか。

## 6 花もれどん

いちき串木野市川上才野ヶ原には「花もれどん（花もらい殿）」という古い石の塔が建って

いますが、そこを通る人々は、今でも立ちどまって花をささげ、お祈りをしてから去って行きます。

これは、川上や日置市東市来町養母尾木場地方に伝わる狩りの話にまつわることで、狩りの話から始めることにします。まず、『市来町郷土誌』（市来町教育委員会 1982）に書かれている「狩人の話」を紹介します。



いつのころか分かりませんが、「とつぜんどん」と「又次郎」とよばれる兄弟が、三方塚というところに狩りをするための小屋を建てて、矢岳から行司塚につらなる山々を狩り場にして生活していました。「とつぜんどん」は近頃、さっぱり猪や鹿がとれないので、山の神に21日間の願をかけ、願いの日が終わる満願の日に次のように神様に誓いをたてました。「どうか私に千匹の猪をください。千匹目に私の命をさしあげます」と。

すると翌日から猪がとれはじめ、一年足らずで999匹とれました。そこで「とつぜんどん」は、誓いのおり神様に命をさし上げようと決心しました。

ある日、弟の「又次郎」を呼んで、行司塚に大きな猪が出るから何月何日何時ごろ行って仕留めてくるように言いました。

日時を決めて「とつぜんどん」は、猪の皮を準備して行司塚へ上り、「又次郎」を待ちました。すると弟の姿が見えたので猪の皮をスッポリとかぶり、猪が歩くようにノソノソと藪の方へ動いて行きました。

ところが猪を待っていた「又次郎」は、鉄砲を撃たないでスタスタと帰ってしまうではありませんか。後で「又次郎」に会ったとき、「とつぜんどん」は知らないふりをして、猪は出なかったかとたずねました。「出たことは出たが、あいつはヤンメタロ（病み太郎）で少しも元気がなく撃つ気はしなかった。元気な猪はあげなもんじゃなく（あんなものではなく）、すばしこいもんじゃ（すばやいものだ）」という「とつぜんどん」は「そげんな（そんな）筈はなか（ない）、もっと大きな猪が出るはずだから、何月何日何時ごろがよいだらう」と教えました。「ヤンメタロ」というのは病気の人という意味です。

何も知らない弟の「又次郎」は、教えられた日時にまた行司塚へ出かけました。待ちかまえていた兄の「とつぜんどん」は、「又次郎」の前をせいいっぱい横に走りぬけました。「又次郎」の鉄砲はとつぜん、火をふき、一発で仕留めました。「又次郎」が喜んで走り寄ってみると、そこには兄のあわれな姿がありました。「とつぜんどん」はきれぎれの声で、「命は神様にささげること。死体は三方塚の杉の根元に埋めること。鉄砲を立てかけた杉を伐らないこと。右の耳は行司塚に埋めてくれ。ときには猪狩りの鉄砲の音を聞きたいのだ。左の耳は見晴らしのよい才野ヶ原に埋めて、道を通る人々の供養の花が欲しい」と言って息を引き取りました。供養というのは、亡くなった人のたましいを慰めることです。皆さんが、お墓にお参りをするのは亡くなった人を供養するためです。

その後、杉は伐られることはなく、立てかけてあった鉄砲を抱きこんで大杉となりました。「とつぜんどん」の残した鉄砲は見られなくなっていました。今から200年ぐらい前に大きな



台風が来て大杉は倒れました。土地の人々は、「とつぜんどん」を永く祈念するために、倒れた杉でそばをうつための丸板を作って残しました。この物語は尾木場の逆瀬の人たちによって語りつがれています。

その後、植えられた杉が、はや二百年近くなっています。「とつぜんどん」は行司塚に登るとき、竹を逆さにした杖をついて登ったそうです。そして行司塚の頂上にその竹の杖を突き立てましたが、そのまま根づいて生きつづけ、付近には逆さ竹が生えているといわれます。

才野ケ原の塚には自然石が建てられています。今でも花が供えられ、絶えたことがなく、人々は「花もれどん」と呼んで親しんでいます。

## 【はてな？】

第1に、疑問なのは、なぜ耳を埋めるのかということです。

前に述べましたとおり、川上の才野ケ原の「花もれどん」は、「花上げどん」とも言われ、通る人が上げる花が絶えません。行司塚とここにとつぜんどんの耳を埋めてあるということです。耳を埋めたのは、とつぜんどんが鉄砲の音を聞きたいと願ったからであるということでしたが、一説には、とつぜん兄弟は弓矢で狩りをしたともいわれています。そうすると、鉄砲の音を聞きたいという説はあやしくなります。本当に人間の耳を切り取って、埋めたりするのでしょうか。

一つ考えられることは、この地が村の境目か、山の頂上だったりすることから、もともと神聖な場所で神をまつべきところであったのではないかということです。そのような場所では、生けにえとして馬の耳、あるいは猪や鹿の耳などが神にささげられるということが各地で見られるからです。

第2に、なぜ耳を奉納したという話が残っているかということです。

それは、馬や猪、鹿などは、思いを耳で表現します。耳を振ったりするのは神を迎えるためであるといわれています。それは、第1で述べましたように、昔は、神様にいけにえとして猪や鹿の耳を切り取って供えていました。それが、後の人々が、人間の耳を埋めたという話に作りかえていったことが考えられます。とつぜんどんの亡骸を埋めた三方塚も同じように、もともとは峠の神をまつところだったと思われま。

第3に、なぜ、耳塚といわれるところが残っているのでしょうか。



日本全国の耳塚は、合戦などに際して、敵の首に代えて耳をそぎ、これを持ち帰って証拠にした後、埋めて供養したなどの伝説を持ちます。これも、もともとは、馬などの犠牲獣を供えて神をまつたものが、後世にその意味が忘れられ、合戦に関わる伝説などがつけ加わったと考えられます。

行司塚の逆さ竹の話は、弘法大師（空海）の持っていた杖が根づいて大きな木になったという話が各地に伝わっているのと共通します。これは神と仰ぐべき人が持っていたものは、不思議な力を発揮し、根がついてきたのだということを示しています。この逆さ竹も、この弘法大師伝説と習合したものではないでしょうか。逆さであるところがふつうではない神聖さをおびた竹ということになるのです。

## 7 かみなりどんのフツ（うんこ）

昔むかし、仁吉どんは市来の店屋に「デッチ（丁稚）」としてはたらいていました。まだ、13歳になったばかりでした。「デッチ」というのは、店屋などに年季奉公、すなわち、年数をきめて働く子供のことをいいます。



ある日、店の主人である旦那どんによばれて、「オマヤ（お前は）、コイカラ（これから）、市比野（薩摩川内市樋脇町市比野）の私の弟の店ツイ（店まで）、使いにイタテ（行って）クレンナ（くれませんか）、ユシャ（用事は）、テガンニ（手紙に）ケチャッデ（書いてあるから）、コヨ（これを）、ワテテクレバヨカデ（渡してくれば良いから）、今、昼ジャッデ（昼であるから）、今から行けば、ヨロイモテナ（夕方には）、イツツジャロデ（行き着くだろうから）、今夜は向こうに泊まってクレバヨカデ（泊まってきたらよいから）」と言われました。

仁吉どんは「ハイ」と言って出発しました。市来から川上に出て、平木場から冠岳に行き、野下を通り、阿母峠を越えて行くつもりです。道は今のような広い道ではありません。平木場から冠岳のあいだや野下から先は、まるで兎道（兎など小さな動物が通るような粗末で狭い道）でした。田んぼには稲が青々としていました。その日は、汗がだらだらとしたたり落ちるような暑い日でした。

それでも仁吉どんは元気よくどんどん歩きました。野下まで来ると、今までよい天気だったのに雲が出はじめました。「サダッ（にわか雨）がコンニャ（来なければ）ヨカイドン（良いのだけれど）」と思いながら、阿母峠を登り始めました。峠の近くまで来ると黒い雲が一面に空をおおい、まわりが暗くなってきました。山の中ではあるし、暗くもなったので、まるで夜になったみたいでした。さらに雨も降ってきました。仁吉どんは、あわてて走り出しま

した。すると峠のすぐ下の方に、一軒の家があるのがわかりました。雨やどりをしようと思って、その家に行きました。

その家には、おばあさんが1人住んでいました。仁吉どんは「おばあさん、アメイ（雨に）フイカケラレツ（降りかけられて）、コマイモシタ（困りました）。イットツ（一時）、雨宿イをサセックイヤンセ（させてください）」と言いました。おばさんは「おやおや、コン雨ジャ（この雨では）、困イヤツツロ（困られたでしょう）、ヨカヨカ（よいよい）、家ン中イ（家の中に）、入イヤンセ（入りなさい）」と言って、中に入れてくれました。

「何処ヅイ（何処まで）、行ッキャットナ（行かれるのですか）」とおばあさんが聞くので「市来から市比野ヅイ（まで）、ツケエ（使いに）、行ッカタゴワシト（行きかたなのですよ）」と答えました。「ソラ、マダ、チンカトニ（それは、まだ小さいのに）、感心ジャ（感心だ）、ジャツドン（だけど）、今から市比野ヅヤ（市比野までは）、夜がヘッド（日が暮れるよ）、ココイ（ここに）泊めてアグゴッアツドン（あげたいのですけれども）、ソヤ（それは）、困ったモンジャ（困ったものだ）」とおばあさんが言いました。仁吉どんが「ナイゴテナ（どうしてな）」と聞くと、「この家は、スイギンヤドジャ（追いはぎ宿だ）、オハンは（あなたは）先からフトコロモンノ（懐のものを）大事イ（大事に）、シチョイヤゴタツドン（しておられるようではありませんか）」と言いました。仁吉どんは「うん、店ンデシナモンジャ（はい、店の大事なものだ）」と答えました。あばあさんは「ソゲナ（そんな）お店ン（お店の）、デシナモンチュワ（大事な物であるということは）、テゲイナワカッ（大概分かる）スイギンシガ（追いはぎの人たちが）、見ツクット（見つけると）、大変なコツジャ（大変なことだ）」と言います。「モ、モドッテクイコロジャ（もう帰ってくる頃だ）、ハヨ（早く）、出てイッキャンセ（行きなさい）」と言います。そうこうするうちに、どうやらスイギンが帰ってきたようです。おばあさんはおどろいたふうで「ハヨ、隠れろ、ハヨ、隠れろ」とせかしました。

仁吉どんは、どこに隠れようかと迷いました。家の中はもう暗いので、手さぐりで行くうちに、柱につきあたりました。その柱をよじ登って、ハリの上にあがりました。茅ぶき屋根なので天井の板はありません。ハリは、まん中で十文字に組まれていました。ハリというのは、屋根の重みをささえる、あるいは柱が動かないようにするために、柱と柱に水平にかかる材木のことで、1本のハリの上に居りつづけることはむづかしいので、十文字に組まれたところにすわり、じっと下の様子を見ていました。

「今ジャツタ（今だった）」と太一というスイギンが帰ってきました。続いて「今ジャツタ」「今ジャツタ」と、仙二と三助というスイギンが帰ってきました。かれらは、家の中が暗いのでランプを灯しました。そのランプを仁吉どんが居るハリの十文字の下につるしました。そして「今日は、おれはコシコジャツタ（これだけだった）」と言って、盗んできたお金を畳の



上にならべました。仙二も三助も並べました。スイギンは、盗んできたお金を平等に分けるようになっていたのです。

外は、ますます大雨が降り、雷も鳴り出しました。突然、稲光とともに、大きな雷が鳴りました。仁吉どんはビックリして、ハリの从上から下のランプといっしょに落ちたのです。ガラガラ！ドスン！という大きな音をたてて落ちたのです。さあ、下は大変なことです。「ワー、カンナイ（雷）が落ちた」と言って、皆、家のすみのほうに逃げて、頭をかかえてふるえています。ランプも落ちて割れたので真っ暗になっています。

仁吉どんは、落ちた時に思いました。「ここにはお金を並べてあるはずだ」と。手さぐりで両方の手を広げてみたら、お金がいっぱいあるのです。仁吉どんは、急いでそのお金をふところにねじこみました。そしてスイギンたちに分からないように戸口をそっと開けて逃げました。仁吉どんは落ちたときにビックリして「うんこ」をもらしていました。

やがて家の中では、「オーイ太一どん」「仙二どん」「三助どん」とおたがいに呼びあいました。「イケンモナカッタヤ（どうもなかったな）」「ウン大丈夫ジッタドン（だったけれども）、コケ（ここに）、ヒッチャエタドネ（落ちたよね）」と言いながら、ローソクに火をつけてみるとお金は何にもなくて、「うんこ」が落ちていました。「かみなりは金物に落ちッチュガ（金属に落ちるといふが）、イットケテ（溶けてしまって）、クソイナタッタロカイ（うんこになったのだろうか）」ということでした。

## 【はてな？】

なぜ、デッチのうんこは、かみなりのくそ（うんこ）と思われたのでしょうか。

この話は、旅の途中で、怖い目にあいながらも、とっさの機転で幸運をえるという話です。デッチが天井から落ちたときにうんこをするのが面白いですね。スイギンたちも金が金属であるので、雷の熱で溶けてうんこになったと科学的な知識がありそうで、どこか間が抜けているということが面白いですね。デッチのとっさの機転とスイギンたちの間抜けぶりが対照的なところが滑稽な笑い話として優れています。



## 8 別府二セの韋駄天走り

### 別府二セの韋駄天走り

別府というのは、いちき串木野市下名別府のことです。韋駄天というのは、インドのバラモン教（イ





ンドの古い、仏教以前のバラモン〈僧や祭をするインドで最高の地位の人々〉中心に行われた宗教)の神で、シヴァ神(ヒンドゥー教の三つの神の一つ)の子とされます。仏教に取り入れられて、守護神となり、四天王である増長天の八將軍の一つとされています。特に伽藍(仏教寺院の建物)をまもる神とされます。また、子供の病気や魔物を除く神ともされています。捷疾鬼(大変、身が軽く、すばやく走り、勇敢ですが、人を食うこともあるという鬼)が仏舍利(釈迦の骨)をうばって逃げさったとき、韋駄天が、これを追いかけて取りもどしたということから、早く走る神として知られています。韋駄天のように早く走ることを韋駄天走りと言います。鹿児島では鼯のことをイタテンと言いますが、これと混同して使うこともあります。

別府に伝わっている韋駄天走りの術とはどのようなものでしょうか。

### タカランバッチョ(竹の皮でつくられたかさ)が宙に舞う術の話

さて、いちき串木野市の別府に昔、船大工の棟梁がいました。ある日、Y字型に立てかけた材木の上に乗って仕事をしていると、材木がぐらつき足をすべらせてしまいました。危ない!しかし、棟梁は、ひょいと地面に立ち、砂一つかぶらないで、何くわぬ顔をして平然と立っているではありませんか。それを見ていた別府のニセ(青年)が、この棟梁はただ者ではない、韋駄天走りの術を知っていると思い、入門することをお願いしました。しかし、棟梁は「運よく立ったまでのことよ。おれは、ただの船大工だ、そんな術など知らん」と言ってことわりしました。

しかし、ニセの熱心さに負けた棟梁は、「よし、それでは教えてやろう。相撲取り姿になって、タカランバッチョと3尋(両手を広げたときの両手先の間の距離を1尋という。)の綱を持って来い」と命じました。

さっそく、準備をしてきたニセに、棟梁はタカランバッチョに細引き(麻をひねりあわせた細い丈夫な綱)を通し、ニセのふんどし(ヘコともいう)の後ろにくくりつけてやりました。そして、「今から



お前は、浜に出て波打ちぎわを一生懸命走る修練(精神や技をみがききたえること)をせよ。足がだんだん速くなるにつれ、タカランバッチョが宙に舞うようになる。そうなるまで、何カ月、いや何年かかるか分からないが、それをやりこなせるようになったら、おれを訪ねてこい。お前に武術のすべてを教えてやろう」と言いました。

それからというもの、ニセは寝ることも食うことも忘れて、ただひたすらに、照島海岸の波打ちぎわを走りに走りました。タカランバッチョが、そんなに簡単に、宙に浮かび上がるものではありません。特に、砂浜では砂に足をとられるので、走るのがむづかしいのです。来る日も来る日もタカランバッチョは砂をこすり砂けむりが高く舞い上がりました。

しかし、武術修練の信念(かたく信じて動かない心)にもえたニセは、さらに修練の年月をかさねました。そこは執念(思い込んでうごかない心)、ついにタカランバッチョが宙に舞

う日がやってきました。疾風(早く吹く風)のように走る青年を祝うかのように、タカランバッチョが、最初は飛びはねながら、後には空高く、鳥が飛ぶように舞い上がりました。喜び勇んだニセは、棟梁のところへかけつけました、「出来ました」とはずんだ声で告げました。ニセの目には感激の涙がうっすらと光っていました。

目の前でかけるニセの手なみに、棟梁は舌を巻きました。自分にも出来ないことをニセは修得したのです。

いきおいこんで、武術の教えをお願いしたニセに向かって、棟梁は、「武術は身の安全を守るためにあるのだ。もうお前の韋駄天走りにかなう者はいないぞ。自分より強そうな者が来たら、すかさず逃げろ。誰もお前に追いつく者はいない。その逃げの術に勝る術はないのだ。おれが何年かかって修行しても成すことが出来なかったことを修得したのだ」と言ってニセを説いて帰しました。

今でも韋駄天走りの術は、別府にひそかに伝えられていると言われます。

第二次世界大戦の前、照島小学校は、市来の第二師範学校で行われた川内、日置地区の小學校対抗リ



レーで群をぬいて速かったそうです。ライバルは串木野小学校や川内小学校でした。生徒の数が非常に多い大規模校です。しかし、照島小学校が、運動場のコースを一周も二周も引きはなしてゴールするのが常でした。照島地区の高齢者達は、韋駄天のように早かった人を実際に名前をあげて教えてくれます。そして誰いうとなく、照島地区には韋駄天走りという忍術のようなものがひそかに伝えられているのだといわれるようになりました。

## デンゼの韋駄天走り

似たような話が、日置市東市来町伊作田にも伝わっています。

昔、伊作田に、植村伝左衛門という男がいて、いつもはデンゼと呼ばれていました。日置どん(日置殿 当時、伊作田をおさめていた位の高い武士)の乗馬の口を引く世話をする別当(ここでは、うまやの責任者で馬の口取りをする者)であったといえます。主人が、どんなに馬を早く走らせても、顔色一つ変えないでついてきました。とつぜん、勢いよくかけだしても、主人がひょいと後ろを振り向くと、そこには、必ずデンゼが、何くわぬ顔をして立っていました。

以前、デンゼは3年ぐらい、伊作田の里をはなれていましたが、ある日ひょっこり帰ってきました。父親が、デンゼがだまっていなくなったことをとがめると、デンゼは、食事のせたお膳を持ったまま、スーと姿を消しました。どこへ行ったのだろうと、ふと天井を見上げると、デンゼは天井のハリ(上部の重みを支えるため、あるいは柱を固定するため、柱の上にかけた水平の材木。棟と直角になったもの。平行しているものを桁という)に腰かけていました。

デンゼが韋駄天走りと忍術にすぐれていることを耳にした鹿児島市郡山のニセたちが入門

をお願いに、押しかけるようにしてやってきました。デンゼの家に住みこんだニセたちは、何とかデンゼを打ち負かす機会を待っていました。

ある日デンゼが五右衛門風呂に入っていました。ニセたちは、「今だ」とそのときを逃さないで、すぐに風呂のふたをデンゼにかぶせました。ニセたちは、「勝ったぞう」とさけび、喜んでふたを開けました。すると中には誰もいません。ひょいと横を向くと、デンゼが縁側で何くわぬ顔をして背中をかいていました。

デンゼの武勇談は鹿児島城下にも伝わりました。城下に誰も手に負えない盗賊がいました。「市来のデンゼをつれてこい」ということになり、デンゼが呼ばれました。盗賊は、小さな掘っ立て小屋で、ユルイ（囲炉裏）をはさんで座り、世間話をしました。目の前の「ジゼカッ（自在鉤）」にかかっているヤカンのお湯が、シャンシャンと音を立ててわいていました。またたく間に、目にもとまらぬ早業で、デンゼはヤカン（葉缶）をけ飛ばしました。一瞬ひるんだ盗賊をまんまと捕らえてしまいました。まさしく鞍馬楊心流、座捕の術であったということです。

デンゼの古武術は郡山方面に伝わって定着しました。郡山は今でも、柔道や空手道が盛んです。

## 鞍馬楊心流

さて、鞍馬楊心流の古武術は、薩摩川内市甕島里の塩田家に伝えられています。その源流は、塩田家の三代、塩田甚太夫に始まります。

楊心流の意味は、楊の枝のようにやわらくて、強い流派ということです。外柔内剛（外見はものやわらかで心の中がしっかりしていること）の強さを意味するといひ、現代柔道のもとになったとされます。刀術、棒術、柔術、捕縄術、忍術、兵術など武芸百般にわたります。遠くから船を止める術、走っている馬を止める術、遠くにいる敵を殺める術などあります。

塩田家には、江戸時代から入門者が押しかけました。入門者は甕島からはもちろん、川内、高江、久見崎、出水、天草、長島、鹿児島、大島方面からが多かったようです。市来、串木野、東市来からはもちろんです。一時は、その数、4000名をこえたといひます。

照島の韋駄天走りもデンゼの忍術も鞍馬楊心流の流れをくんでいると、当たり前のように説いて聞かせる高齢者もいます。

## 【はてな？】

なぜ、照島には韋駄天走りの秘密が伝わっているといわれるのでしょうか。

それは、砂浜に近い集落だからだと考えられます。同じ環境にある羽島にも足の速い人



が多かったといわれます。周辺の町の若者たちは、足の速い串木野の若者を恐れ敬っていたのでしょ。

## 9 島平の舟人剣法

### はじめ、腕に自信がなかった舟人

これは、江戸時代の終わりから明治時代の初めのころの話です。島平の源兵衛という人が、自分の船の乗子をつれて、今の市口のあたりへ船のトコになる材木を買いに5人で出かけました。トコというのは、船のとも（舟の後ろの方）につけてあって、帆船（帆をかけて走る船）の時代は、梶（水をかいて船を進める道具）をさしこむためには必要なものでした。そのトコを買って、交代でかついで、島平に帰って行く途中、土佐ノ馬場を過ぎて御倉山にさしかかりました。そこは人通りが少なく、山が道にせまっているところです。その時、5、6人のシカマゴシ（塩釜郷士か）の若者たちが待っていました。道をふせぎ、担った材木をひっぱるなどの悪さをしました。腕には自信がある島平の若者たちとシカマゴシの若者たちとけんかになりました。しかし、シカマゴシの若者たちは、皆、木刀を持っていて、素手の舟人をまるで、腕試しのようにして、面・胴・籠手（指先からひじあたりまで当てる剣道の道具）と打ってくるのでどうしようもありませんでした。相手をつかまえることが出来たら、相撲の手を使って投げ飛ばすのですが、なかなか、そのすきがありません。皆、その場にへたばってしまい、立つことも出来ませんでした。それでも、痛い手をかばい、足を引きずりながらようやく、木材を潟（遠浅の海で潮が満ちれば隠れ、引けばあらわれるところ）の船のところまで運んできました。しかし、もう大工どん（殿）は帰っていて、その日にトコを作ることが出来ませんでした。漁には出られず、体は痛むし、どうしようもありません。

このように昔、親たちが叩かれて残念な目にあった話が島平に伝わっていました。これを聞いた若者たちは、当時、剣術で名高い別府の今村の休ぜおじどん（殿）に剣術を習って、シカマゴシの若者をやっつけなければならぬと思いました。そうしないと、島平の舟人は、市口の木屋（材木を売る所）や塩釜のカットン（鍛冶殿）に買い物にも行けません。さっそく、別府の休ぜおじどんの所へ入門のお願いに行きました。

### 秘密剣術の師匠休ぜおじどんに入門

休ぜおじどんは「剣術はもう終わった時世だ。けんかはせんことじゃ（しないことだ）。勝たんでよか（勝たなくて良いから）、はよ（早く）、逃げよ。逃げたが勝ちじゃ」と言って、なかなか教えてくれようとしません。しかし、若者たちは、生活がかかっていることだし、



残念でもありましたので、何回も足を運びました。一人二人と入れかわりブエンの魚（無塩の魚 新鮮な魚のこと）をみやげに持って行って頼みこみました。これだけ熱心な若者であればきっとものになるだろうと考えた休ゼおじどんは、ようやく弟子になることを許してくれました。



言葉にならないほどのきつい修行でした。そして秘密の剣術です。稽古の話は、誰にも話してはいけません。ですから、修行の内容などは一つも伝わっていません。ただ、お年寄りたちは、厠（トイレ）で、かがむことが出来ないぐらい苦しい修行だったということは話してくれます。多くの若者のうち3人ほど苦しい修行にたえ、剣術の腕前が上がっていきました。つらい稽古がつづき、3年がたちました。

ある日、師匠の休ゼおじどんが「辰右エ門、辰兵衛、盛太郎、お前どま（お前どもは）よくきばった（頑張った）。よく、しんぼうもした。もうシカマのやっどめな（奴どもには）負けん。じゃっども（だけれども）、わがから（自分から）けんかをしかけるな。」続いて「今日で教えることはすんだが、かねてから言っているように、わざは油断なくみがけよ。」と言いました。

どのような内容の剣術だったのか、何流だったのか、今は知る人はいません。あるお年寄りは「朝日夕くずしの術じゃったでわいね（だったからね）。」と自慢げに話してくれました。

この休ゼおじどんは、カワウソ（水中に居り、魚をとって食べるたちに似た動物）より早く飛んで行き、カワウソを生け捕りにしたという話も残っています。また、弟子の辰右エ門は、5尺（1 m 50cm）足らずの小男でしたが、人が見ていない時には、川幅20尺（約6 m）ぐらいのムカエン川（向江の川）を飛びこえていたということが語り伝えられています。休ゼおじどんは「お前どが（お前どもが）打ってくる剣は、物干しざおが倒れてくるようなものだ」と言っていました。ゆっくりしていて、すばしこさがないということです。また、あるお年寄りは、「つばめのわざ」とか「天狗飛びきりの術」とか「天狗矢とい（矢取り）」、「義経の八艘跳び」と聞かされていたといいます。休ゼおじどんは、身のこなしがすばやく、剣さばきがすどく、まさに電光石火の早わざで、打ちこまれる前に、打ちこんでいったといいます。

とにかく負けを知らない人だったそうです。

## 敵をさんざんに打ちのめした島平の若者

喜び勇んで帰った3人の若者は、人目をさけて、ひそかに技をみがいていました。盆が来て、休みの時にトコを替えることになりました。金治郎と名づけられた船主の長男だった辰右エ門が、4人の乗子と市口の木屋に出かけて行きました。その帰り道のことであります。話を聞いていたシカマゴシの若者たちが手に手に木刀を持って道をふさいでいるではないですか。先頭にいた辰右エ門はけんかをさけようと思って、乗子たちにまわり道して帰ろうと合図を

して、引き返すことにしました。シカマゴシの若者たちは、面白<sup>おも</sup>が<sup>しろ</sup>ってけんかをしかけようと思<sup>おも</sup>っていましたので追<sup>お</sup>っか<sup>か</sup>けてきました。重い木材を持<sup>も</sup>っている辰右エ門たちは、すぐ追<sup>お</sup>いつかれました。なるだけ、けんかはするなと師匠<sup>ししやう</sup>から言<sup>い</sup>われていた辰右エ門ではありましたが、ここは日頃<sup>ひごろ</sup>の腕<sup>うで</sup>をためす時<sup>とき</sup>だと思<sup>おも</sup>い、イネサシ（天秤<sup>てんびん</sup>棒<sup>ぼう</sup>のこと）に添<sup>そ</sup>えて隠<sup>かく</sup>し持<sup>も</sup>っていた木刀<sup>きとう</sup>を持<sup>も</sup>って「けんかは、おれが相手<sup>あいて</sup>だ、ここでは、どうにもなら<sup>ら</sup>んで、ま<sup>ま</sup>っと（も<sup>も</sup>っと）広<sup>ひろ</sup>か<sup>か</sup>とこ<sup>こ</sup>い（広<sup>ひろ</sup>いところ<sup>ところ</sup>に）出<sup>で</sup>ろ。」と言<sup>い</sup>いました。4人の乗子<sup>のりこ</sup>たちには木材<sup>もくざい</sup>をか<sup>か</sup>つが<sup>が</sup>せて先<sup>ま</sup>に帰<sup>かえ</sup>りました。多勢<sup>たぜい</sup>に無勢<sup>むぜい</sup>（敵<sup>てき</sup>は大勢<sup>おほぜい</sup>、味方<sup>みかた</sup>は少数<sup>せうしゆ</sup>）のけんかのしかたも師匠<sup>ししやう</sup>から教<sup>おし</sup>えられていたのです。御倉山<sup>おくらやま</sup>の中<sup>なか</sup>ほどに広<sup>ひろ</sup>いくほ地<sup>ち</sup>があります。相手<sup>あいて</sup>は5人<sup>ごにん</sup>です。辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は5尺<sup>ごせき</sup>足<sup>あ</sup>らずの小男<sup>せうなん</sup>です。シカマゴシの若者<sup>わかしや</sup>たちは、最初<sup>さいしゆ</sup>から、相手<sup>あいて</sup>を軽<sup>かろ</sup>く見<sup>み</sup>ていました。辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は、海<sup>うみ</sup>で来た<sup>きた</sup>え<sup>え</sup>た大<sup>おほ</sup>声<sup>こゑ</sup>で「か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>ってこ<sup>こ</sup>い！」とさ<sup>さ</sup>げ<sup>げ</sup>び<sup>び</sup>ま<sup>ま</sup>した。5人<sup>ごにん</sup>は円形<sup>えんけい</sup>を組<sup>く</sup>んで飛<sup>と</sup>び込<sup>こ</sup>んで来<sup>き</sup>ました。「ワイド（お前<sup>おまへ</sup>たち）が剣<sup>けん</sup>とはちがうぞ」と辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>はさ<sup>さ</sup>けん<sup>けん</sup>で、軽<sup>かろ</sup>くあ<sup>あ</sup>しら<sup>ら</sup>い、島平<sup>しまひら</sup>道<sup>みち</sup>へ逃<sup>に</sup>げ<sup>げ</sup>出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。狭<sup>せま</sup>い一本<sup>いっぽん</sup>道<sup>みち</sup>です。勝<sup>かち</sup>ったと思<sup>おも</sup>った5人<sup>ごにん</sup>は、勢<sup>いき</sup>い<sup>い</sup>よく追<sup>お</sup>っか<sup>か</sup>けて来<sup>き</sup>ます。狭<sup>せま</sup>い道<sup>みち</sup>です<sup>ので</sup>、一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>一<sup>いち</sup>人<sup>にん</sup>が一<sup>いち</sup>列<sup>れつ</sup>になる形<sup>かたち</sup>になりました。辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は、先頭<sup>せんとう</sup>に走<sup>はし</sup>っ<sup>て</sup>くる大男<sup>おおおとこ</sup>に、高<sup>たか</sup>く飛<sup>と</sup>び上<sup>あ</sup>がりざ<sup>ざ</sup>ま一<sup>いち</sup>撃<sup>げき</sup>をくら<sup>くら</sup>わ<sup>わ</sup>せ<sup>せ</sup>ま<sup>ま</sup>した。逃<sup>に</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>た</sup>いたはずの小男<sup>せうなん</sup>が一瞬<sup>ひととき</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>な<sup>な</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>ったと思<sup>おも</sup>った瞬間<sup>しゆんかん</sup>、頭<sup>あたま</sup>をひど<sup>ひど</sup>く叩<sup>たた</sup>か<sup>か</sup>れた<sup>た</sup>のです。2番目<sup>にばんめ</sup>に走<sup>はし</sup>っ<sup>て</sup>くる男<sup>おとこ</sup>は驚<sup>おどろ</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した。それ<sup>それ</sup>でも、む<sup>む</sup>か<sup>か</sup>って来<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した<sup>が</sup>腰<sup>こし</sup>を<sup>を</sup>した<sup>た</sup>か叩<sup>たた</sup>か<sup>か</sup>れて<sup>て</sup>へ<sup>へ</sup>ば<sup>ば</sup>っ<sup>て</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>した。3番目<sup>さんばんめ</sup>の男<sup>おとこ</sup>もむ<sup>む</sup>か<sup>か</sup>って来<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した<sup>が</sup>、木刀<sup>きとう</sup>がこ<sup>こ</sup>わ<sup>わ</sup>さ<sup>さ</sup>のあ<sup>あ</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。飛<sup>と</sup>ぶ鳥<sup>とり</sup>のよ<sup>よ</sup>うに足<sup>あし</sup>の速<sup>すみ</sup>い辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は、す<sup>す</sup>か<sup>か</sup>さ<sup>さ</sup>ず走<sup>はし</sup>り<sup>り</sup>より足<sup>あし</sup>をは<sup>は</sup>らい、肩<sup>かた</sup>に打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>込<sup>こ</sup>み<sup>み</sup>ま<sup>ま</sup>した。4番目<sup>よんばんめ</sup>と5番目<sup>ごばんめ</sup>は逃<sup>に</sup>げ<sup>げ</sup>出<sup>で</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。逃<sup>に</sup>が<sup>が</sup>して<sup>て</sup>なるもの<sup>もの</sup>かと辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は、追<sup>お</sup>い<sup>い</sup>か<sup>か</sup>け、向<sup>むか</sup>い<sup>い</sup>の川<sup>がわ</sup>を飛<sup>と</sup>び<sup>び</sup>こ<sup>こ</sup>え、先<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>わり<sup>り</sup>して、前<sup>まへ</sup>に立<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。師匠<sup>ししやう</sup>から受<sup>う</sup>け<sup>け</sup>つ<sup>つ</sup>い<sup>い</sup>だ<sup>だ</sup>飛<sup>と</sup>び<sup>び</sup>き<sup>き</sup>りの術<sup>じゆつ</sup>です。もう<sup>もう</sup>ど<sup>ど</sup>う<sup>う</sup>にも<sup>も</sup>なら<sup>ら</sup>ない二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>は、お<sup>お</sup>じ<sup>じ</sup>け<sup>け</sup>づ<sup>づ</sup>い<sup>い</sup>て、へ<sup>へ</sup>っ<sup>っ</sup>ぴ<sup>ぴ</sup>り<sup>り</sup>腰<sup>こし</sup>です。そこ<sup>そこ</sup>は、舟人<sup>ふねうぢ</sup>。今<sup>いま</sup>ま<sup>ま</sup>で<sup>で</sup>い<sup>い</sup>じ<sup>じ</sup>め<sup>め</sup>られ<sup>れ</sup>通<sup>とお</sup>し<sup>し</sup>で、食<sup>く</sup>う<sup>う</sup>に<sup>も</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>こ</sup>欠<sup>か</sup>いた<sup>た</sup>こ<sup>こ</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。島平<sup>しまひら</sup>の舟人<sup>ふねうぢ</sup>に二<sup>ふた</sup>度<sup>ど</sup>と手<sup>て</sup>だ<sup>だ</sup>し<sup>し</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>せ<sup>せ</sup>ない<sup>い</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>に<sup>も</sup>、徹<sup>てつ</sup>底<sup>てい</sup>して<sup>て</sup>や<sup>や</sup>っ<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>けて<sup>て</sup>お<sup>お</sup>く<sup>く</sup>必<sup>ひつ</sup>要<sup>よう</sup>が<sup>が</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。その<sup>その</sup>た<sup>た</sup>め<sup>め</sup>、舟人<sup>ふねうぢ</sup>は二<sup>ふた</sup>人<sup>にん</sup>を<sup>を</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>す<sup>す</sup>え<sup>え</sup>ま<sup>ま</sup>した。腕<sup>うで</sup>・腰<sup>こし</sup>・足<sup>あし</sup>と打<sup>う</sup>た<sup>た</sup>れて<sup>て</sup>へ<sup>へ</sup>ば<sup>ば</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>い</sup>るシカマゴシに、「いつ<sup>いつ</sup>でも、マ<sup>マ</sup>ツ<sup>ツ</sup>ョ<sup>ョ</sup>ッ<sup>ッ</sup>デ（待<sup>まち</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>から）し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>え<sup>え</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>ケ<sup>け</sup>ー（仕<sup>し</sup>返<sup>かえ</sup>し<sup>し</sup>に<sup>に</sup>来<sup>き</sup>い）」と言<sup>い</sup>い<sup>い</sup>残<sup>のこ</sup>して、その<sup>その</sup>場<sup>ば</sup>を<sup>を</sup>去<sup>さ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。心<sup>こころ</sup>配<sup>ぱい</sup>して<sup>て</sup>待<sup>まち</sup>っ<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た乗子<sup>のりこ</sup>たち<sup>に</sup>「や<sup>や</sup>っ<sup>つ</sup>つ<sup>つ</sup>けて<sup>て</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>よ」と<sup>と</sup>だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>言<sup>い</sup>っ<sup>て</sup>、何<sup>なに</sup>ご<sup>ごと</sup>とも<sup>も</sup>な<sup>な</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>よ<sup>う</sup>に、ト<sup>と</sup>コ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>具<sup>ぐ</sup>合<sup>あ</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>した。

## 町に自由に出かけられるようになった島平の人たち

シカマゴシでは、大<sup>おほ</sup>変<sup>へん</sup>な<sup>な</sup>さ<sup>さ</sup>わ<sup>わ</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>に<sup>に</sup>なり、若<sup>わかしや</sup>者<sup>しや</sup>たち<sup>が</sup>や<sup>や</sup>ら<sup>ら</sup>れた<sup>た</sup>話<sup>わ</sup>でも<sup>も</sup>ち<sup>ち</sup>き<sup>き</sup>り<sup>り</sup>です。舟人<sup>ふねうぢ</sup>に負<sup>ま</sup>けた<sup>た</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>は<sup>は</sup>シカマゴシ<sup>シ</sup>の<sup>の</sup>名<sup>な</sup>折<sup>お</sup>れ<sup>れ</sup>です。敵<sup>かたき</sup>うち<sup>ち</sup>に<sup>に</sup>行<sup>い</sup>く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>だ<sup>だ</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>っ<sup>て</sup>若<sup>わかしや</sup>者<sup>しや</sup>たち<sup>が</sup>聞<sup>き</sup>き<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>せ<sup>せ</sup>ん。し<sup>し</sup>か<sup>か</sup>し、シカマゴシ<sup>シ</sup>の<sup>の</sup>知<sup>ち</sup>恵<sup>ゑ</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>大<sup>おほ</sup>人<sup>にん</sup>が「今<sup>いま</sup>村<sup>むら</sup>休<sup>やす</sup>ぜ<sup>ぜ</sup>の<sup>の</sup>手<sup>て</sup>の<sup>の</sup>者<sup>もの</sup>なら、ワ<sup>ワ</sup>イ<sup>イ</sup>ド<sup>ド</sup>ガ<sup>ガ</sup>何<sup>なに</sup>人<sup>にん</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>ても<sup>も</sup>かな<sup>かな</sup>わ<sup>わ</sup>ない<sup>い</sup>から<sup>ら</sup>止<sup>と</sup>め<sup>め</sup>た<sup>た</sup>ほ<sup>ほ</sup>う<sup>う</sup>が<sup>が</sup>よ<sup>よ</sup>い。」と、こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>こ<sup>こ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>さ<sup>さ</sup>と<sup>と</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。

辰右エ門<sup>てんごえもん</sup>は、こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>次<sup>だい</sup>第<sup>だい</sup>を<sup>を</sup>師匠<sup>ししやう</sup>の<sup>の</sup>休<sup>やす</sup>ぜ<sup>ぜ</sup>ど<sup>ど</sup>ん<sup>ん</sup>に<sup>に</sup>報<sup>ほう</sup>告<sup>こく</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。師匠<sup>ししやう</sup>は「もの<sup>もの</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>良<sup>よ</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た<sup>た</sup>ね、仕<sup>し</sup>返<sup>かえ</sup>し<sup>し</sup>は、晚<sup>ゆふ</sup>に<sup>に</sup>く<sup>く</sup>つ<sup>つ</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>から（来<sup>き</sup>る<sup>る</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>から）、き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>ず、6尺<sup>ろくせき</sup>棒<sup>ぼう</sup>の<sup>の</sup>先<sup>さき</sup>に<sup>に</sup>着<sup>き</sup>物<sup>ぶつ</sup>を<sup>を</sup>下<sup>くだ</sup>げ<sup>げ</sup>て<sup>て</sup>お<sup>お</sup>け。その<sup>その</sup>着<sup>き</sup>物<sup>ぶつ</sup>に<sup>に</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>か<sup>か</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>き<sup>き</sup>た<sup>た</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>ろ</sup>に、木<sup>き</sup>刀<sup>とう</sup>で<sup>で</sup>打<sup>う</sup>ち<sup>ち</sup>の<sup>の</sup>め<sup>め</sup>す<sup>す</sup>の<sup>の</sup>だ。」と<sup>と</sup>教<sup>おし</sup>え<sup>え</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>れ<sup>れ</sup>ま<sup>ま</sup>した。

しかし、その後、仕返しに来る者はなく、島平の人たちは自由に町に行くことが出来るようになりました。

## 【はてな？】

なぜ、別府や島平にはこのような天狗飛びきりの術のような話が残っているのでしょうか。それにしても不思議ですね。



## 10 白<sup>しろ</sup>の<sup>しろ</sup>支<sup>し</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>を<sup>を</sup>ら<sup>ら</sup>い<sup>い</sup>な<sup>な</sup>松<sup>まつ</sup>尾<sup>お</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>

いちき串木野市<sup>あらかわ</sup>荒川<sup>まつ</sup>にあった<sup>まつ</sup>松尾神社<sup>お</sup>は昔<sup>むかし</sup>は、城<sup>じょう</sup>之<sup>の</sup>藪<sup>の</sup><sup>その</sup>の<sup>の</sup>荒川<sup>あらかわ</sup>太郎<sup>たろう</sup>の住<sup>す</sup>んで<sup>いた</sup>いた城<sup>じょう</sup>の上<sup>の上</sup>にあり<sup>ました</sup>ました。ここ<sup>ここ</sup>から<sup>から</sup>は、はるかに青<sup>あお</sup>くて美<sup>うつく</sup>しい東<sup>あづま</sup>シ<sup>シ</sup>海<sup>うみ</sup>もながめ<sup>る</sup>ことが<sup>で</sup>き<sup>ました</sup>ました。この神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>は、白<sup>しろ</sup>いもの<sup>もの</sup>がき<sup>らい</sup>いで<sup>した</sup>した。はる<sup>はる</sup>か沖<sup>おき</sup>を通<sup>と</sup>る白<sup>しろ</sup>い帆<sup>ほ</sup>の船<sup>ふね</sup>も、松<sup>まつ</sup>尾<sup>お</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>しゃ</sup>の神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>がに<sup>ら</sup>み<sup>つけ</sup>けると<sup>と</sup>すぐ沈<sup>しず</sup>んで<sup>しま</sup>い<sup>まし</sup>た。荒<sup>あらかわ</sup>川<sup>がわ</sup>の男<sup>おとこ</sup>たち<sup>たち</sup>は海<sup>うみ</sup>で泳<sup>およ</sup>ぐ時<sup>とき</sup>はフ<sup>ふ</sup>ンド<sup>ど</sup>シ<sup>し</sup>さ<sup>さ</sup>え<sup>え</sup>白<sup>しろ</sup>地<sup>ぢ</sup>の<sup>の</sup>もの<sup>もの</sup>は使<sup>つか</sup>わ<sup>ない</sup>よう<sup>に</sup>に<sup>して</sup>い<sup>まし</sup>た。神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>に<sup>に</sup>ら<sup>まれ</sup>るとお<sup>お</sup>ぼ<sup>れ</sup>て死<sup>し</sup>んで<sup>しま</sup>う<sup>から</sup>です。松<sup>まつ</sup>尾<sup>お</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>しゃ</sup>は<sup>は</sup>その<sup>の</sup>後<sup>ご</sup>、海<sup>うみ</sup>の<sup>の</sup>見<sup>み</sup>え<sup>ない</sup>中<sup>なか</sup>向<sup>むか</sup>集<sup>じ</sup>落<sup>らく</sup>の<sup>の</sup>荒<sup>あらかわ</sup>川<sup>がわ</sup>の<sup>の</sup>そば<sup>そば</sup>に<sup>に</sup>移<sup>うつ</sup>さ<sup>れ</sup>ま<sup>し</sup>た。現<sup>いま</sup>在<sup>ざい</sup>は、南<sup>みな</sup>方<sup>かた</sup>（<sup>す</sup>諏<sup>す</sup>訪<sup>わ</sup>）神<sup>かみ</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に<sup>に</sup>い<sup>っ</sup>し<sup>ょ</sup>に<sup>に</sup>祀<sup>まつ</sup>ら<sup>れ</sup>て<sup>い</sup>ま<sup>す</sup>。松<sup>まつ</sup>尾<sup>お</sup>神<sup>じん</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>は、「お<sup>お</sup>や、い<sup>い</sup>こ<sup>こ</sup>ご<sup>ご</sup>た<sup>た</sup>な<sup>な</sup>か、か<sup>か</sup>わ<sup>わ</sup>ん<sup>ん</sup>は<sup>は</sup>た<sup>た</sup>が<sup>が</sup>よ<sup>よ</sup>か。（私<sup>わたし</sup>は、〈南<sup>みな</sup>方<sup>かた</sup>神<sup>かみ</sup>社<sup>しゃ</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ころ<sup>こ</sup>ろ<sup>ろ</sup>に〉行<sup>い</sup>き<sup>たく</sup>な<sup>い</sup>い。川<sup>がわ</sup>の<sup>の</sup>そば<sup>そば</sup>が<sup>が</sup>良<sup>よ</sup>い）」と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>っ<sup>て</sup>、<sup>たい</sup>そう<sup>そう</sup>お<sup>お</sup>こ<sup>こ</sup>ら<sup>れ</sup>た<sup>た</sup>そう<sup>そう</sup>です。神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>と<sup>と</sup>して<sup>して</sup>の<sup>の</sup>地<sup>ち</sup>位<sup>い</sup>が<sup>が</sup>高<sup>たか</sup>か<sup>っ</sup>た<sup>た</sup>から<sup>から</sup>で<sup>し</sup>ょう。



## 【はてな？】

松尾神社の神様はなぜ白いものをきらうのでしょうか。

白は松尾神社の神の色ですから人間がそれを用いたりすると、きびしい罰<sup>ばつ</sup>をあたえるのです。荒川の人々は、松尾神社の神様が白をきらうのは荒川太郎が、赤色の旗<sup>はた</sup>を用<sup>へ</sup>いる平<sup>へい</sup>家<sup>け</sup>だ<sup>っ</sup>た<sup>た</sup>から<sup>から</sup>だ<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>と<sup>と</sup>言<sup>い</sup>い<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>い<sup>ま</sup>す。

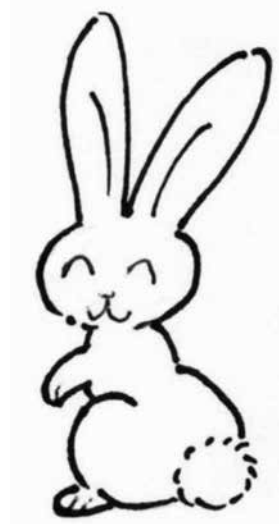
荒川の人々は、白<sup>しろ</sup>い鶏<sup>とり</sup>は食<sup>た</sup>べ<sup>ま</sup>せ<sup>ん</sup>。それは、神<sup>かみ</sup>様<sup>さま</sup>の<sup>の</sup>使<sup>つか</sup>い<sup>だ</sup>か<sup>ら</sup>です。白<sup>しろ</sup>い鶏<sup>とり</sup>を食<sup>た</sup>べ<sup>ない</sup>のは、霧<sup>きり</sup>島<sup>しま</sup>山<sup>さん</sup>麓<sup>ろく</sup>の<sup>の</sup>牧<sup>まき</sup>園<sup>の</sup>町<sup>ちやう</sup>や横<sup>よこ</sup>川<sup>がわ</sup>町<sup>ちやう</sup>の「カ<sup>か</sup>ヤ<sup>や</sup>カ<sup>か</sup>ベ<sup>べ</sup>教<sup>きやう</sup>」の<sup>の</sup>信<sup>しん</sup>徒<sup>と</sup>や都<sup>みやこの</sup>城<sup>じやう</sup>市<sup>し</sup>の「カ<sup>か</sup>ヤ<sup>や</sup>カ<sup>か</sup>ベ<sup>べ</sup>類<sup>るい</sup>似<sup>じ</sup>の<sup>の</sup>宗<sup>しゆ</sup>教<sup>きやう</sup>」地<sup>ち</sup>帯<sup>たい</sup>



の人々と同じです。荒川には、かくれ念仏である「ダンナドン信仰」がありますが、霧島信仰と習合した「カヤカベ教」や「カヤカベ類似の宗教」と似たところがあります。白は神のものだということを信仰心の強い荒川の人々は心得ているのです。

## 11 黄金を食んでくれたうさぎ

この話は、荒川で、小正月（1月14日）にどの家でもかざられていたころの「メのモチ」についての、その由来を伝えるものです。これは、もちを約3cm四方ぐらいに角形に切ったものを榎木の枝に刺して台所や床の間、神棚や仏壇の前、納戸（家の中のものを置いたり、寝たりする部屋）、玄関、墓などに供えられました。白いもち米を用いた「メのモチ」がかざられていた様子は、まるで、雪の中に桜の花が咲いたように美しいものでした。黄色い栗餅の「メのモチ」は、あたかも黄金をちりばめたように美しくかがやいていました。「メ」というのは繭の意味で、絹の糸を生み出してくれる蚕を飼う地方ではじめられたつくりものです。これが、蚕だけでなく、黄金色をした稲の実のほか麦や粟、野菜などがよくできますようにと祈るためにかざられるようになりました。それでは、その由来について語ってみましょう。



昔々、荒川のあるところに兄と弟が住んでいました。兄は毎日、山芋を掘りに山に行き、それを串木野の町に持って行って売り、暮らしをたてていました。弟も、よく働いて、近所でも知られる分限者どんでした。分限者というのは、お金持ちで非常に豊かな生活をしている家や人のことです。

兄は、年もおしせまった12月30日の晩に、山芋を掘ってきて、あくる日に町に売りに行きました。いつもは町ではよく売れました。しかし、その日はあまり買ってくれる人がいないので、ほとんど売れ残ってしまいました。町からの帰りには、山越えをしないで海の近くの道を通って帰ってきました。兄は、その売れ残った山芋を「海の神様よ、あなたにさしあげます。どうぞ、食べてください」と言って、海に投げ入れました。家に帰ってから、そのことを奥さんに話したら、「それは仕方がないことですね。海の神様も喜ぶますよ。」と言って、許してくれました。

ところが、その日の夜中に家の戸をトントンとたたく音がしました。不思議に思った兄が、戸を開けてみると、それはそれは若くてかがやくように美しい、この世の人とは思えないような女の人が、笑みをうかべて立っていました。女の方は、「今日はあなたが山芋をくださいましたので、非常にありがたかったです。そのお礼がしたいので、ここに箱を置いていきます。この中には生きものが入っていますので、ていねいにあつってくださいね」と言い残して、そこを静かに立ち去り、闇の中にスーと消えていきました。兄は、まるで夢を見ているよう

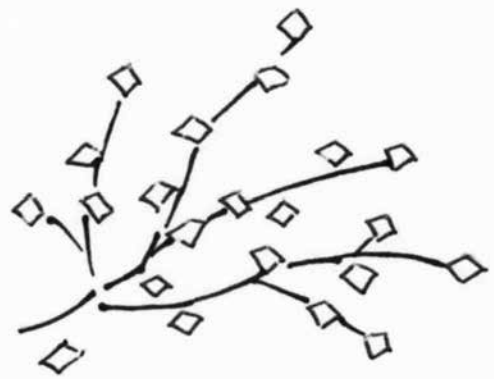


な気持ちでした。その美しい女の人は海の神様だったのです。

兄が、その箱を開けてみると、中に兎が入っていました。その兎に、1升のご飯を食べさせたら、1升の黄金を生んでくれました。そのため、兄はたちまち大金持ちになりました。そのうわさはすぐ荒川中に広まりました。それを聞きつけた弟は、さっそく、兄のところにやってきました。そして、「この兎を一日だけ貸してくれ。」とたのみました。困った兄は、弟のたのみでもあるのでしぶしぶ承知して貸してやりました。

欲のふかい弟は、兄が食べさせた1升の倍である、2升のご飯を食べさせました。2升の黄金を生むのではないかという欲ばりな計算があったからです。しかし、兎は黄金を生むどころか、多くのくさい糞をしたのです。その糞で家中がいっぱいになりました。それにおこった弟は、かわいそうにその兎を殺してしまいました。

あくる日、兄は貸した兎を返してもらいに弟の家に行きました。しかし、兎は殺されていたのです。たいそう悲しんだ兄は兎のなきがらを持ち帰りました。そして、あくる日に、兄は、家のおもての庭に埋め、お祈りを何回もしました。ところが数日して、木の芽が出てきて、やがて大きな榎木に成長しました。その木には毎年、黄金が鈴なりになるようになりました。その黄金がメのもちです。それから、「メのもち」は、どの家でも榎木にさしてかざるようになったそうです。



次に、荒川の話とくらべるために、昔話の研究者として知られる有馬英子氏が喜界島で聞いて書きとどめた話を紹介してみましょう。

昔、2人の兄弟がいました。弟は母親と暮らしていましたが、大変貧乏でした。大みそかになっても米がありません。兄夫婦のところに行って、「必ず返すから米を1升貸してくれ」とたのみましたが、「お前に貸す米などない」と追い返されてしまいました。仕方がないので、山から花をとってきて売りに行きました。しかし、誰も買ってくれません。がっかりして売れ残った花を「ネインヤ（海の底にあって竜の神様が住むという宮殿。竜宮のこと）の神様にさしあげましょう」と言って海の中に投げ入れました。すると、1人の男の人が出て来て「これはありがたいことです。ネインヤではちょうど正月の花をさがしているところでした。お礼をしたいからいっしょにきてください。」と言います。

弟は、そこで男について行って3日の間、大変ごちそうになりました。帰るときになってネインヤの神様が「お前の好きなものをみやげにやろう。」と言われました。弟は男に教えられていたので、「犬がいちばん好きです。」と答えました。すると神様は1匹の犬をくれて、「これには毎日四つ組（4種類のごちそうが入ったもの）の膳（食事をのせる台）を出して大事にきなさい。そうすれば、お金持ちになるでしょう。」と言いました。

弟は犬をつれて帰りました。ところが、たった3日と思ったのに、もう3年の月日がたっ

ていたそうです。母親は食べものがなくて近所のお世話になっていました。弟はすぐ四つ組の膳をこしらえて犬に食べさせました。犬は食べたと思ったら、山に走って行き、大きな猪をくわえてきました。猪は1匹であっても大変お金になるものです。それを毎日何匹もくわえてくるので、弟はまたたく間に大金持ちになりました。



さて、兄がこのことを聞きつけて、「その犬を自分に貸してくれ。」と言ってきました。弟が「これは宝の犬だから、貸すことはでけん。」とことわるのをむりやりにつれていってしまいました。ところが、犬は食べ終わったとたん、飛びあがって兄のひたいにかみつきました。「これはいかん、食わせかたが悪かとじゃろ。」と弟のところに行って食べさせかたを聞きました。そして四つ組の膳を出したのですが、犬は食べ終わると、今度は足のひざにかみつきました。兄はおこって犬をうち殺してしまいました。

弟はこれを聞いて涙を流し、犬のなきがらを庭の手洗鉢の下に埋めました。ところが、翌朝見るとそこから1本の竹が生えていました。そして見ているうちに、ぐんぐん伸びて天上界の米が入っている蔵をつきやぶりました。ひとふし伸びたら1千石、ふたふし伸びたら2千石、みふし伸びたら3千石と米俵(米が入った袋)がどんどん落ちてきて屋根より高くなったそうです。

これを知った兄はまた、犬のなきがらを借りてきて、同じように埋めました。しかし今度は天上界のスブック(糞が入った袋)というものをつきやぶって、きたなくてくさいものがおそろしいほど流れてきて、兄の家はおしつぶされてしまったということです。

## 【はてな?】

2つの民話をくらべてみましょう。

第1に、なぜ喜界島ではメのもちの話ではないのでしょうか。

荒川の伝説は竜宮に行った話と榎木に黄金が鈴なりになった話がむすびついています。メのもちをつくってかざるしきたりが奄美にはありませんが、荒川など鹿児島県本土にはたくさんあるのです。ですから、荒川では、メのもちをつくるようになった原因の話として位置づけられているのです。また、竜宮の話も主な話にはなっていませんが、「海の神様」という表現から竜宮のすがたがうかがわれます。しかし、海の底にある竜宮の考え方はやや薄れてきていることがわかります。いずれにしても竜宮は宝物を授けてくれるというのは共通します。

第2に、なぜ、喜界島では兎の話ではなく犬なのでしょう。



喜界島の伝説に登場してくる「犬」は人類が家畜の最初のものとして飼いならしてきたものです。兎は、もともと、手軽な狩りの対象で、これも大事な食料として値打ちの高いものでした。荒川では兎が家畜とされていますが、人類の歴史では、兎が家畜になったのは、中世以降といわれています。犬が登場する喜界島の伝説のほうが古いのでしょうか。

第3に、なぜ、喜界島では黄金の話ではないのでしょうか。

喜界島では犬が猪をくわえてきてお金持ちになっていく話となっています。荒川では兎が黄金を生みます。黄金は貨幣経済となった後の話なので新しい話です。その意味でも喜界島の話が古いと考えられます。

第4に、なぜ、喜界島では竹が登場するのでしょうか。

喜界島では犬が兄に傷をおわせ反抗する話となっています。兎が糞をするのは似ていますが、糞の話のスケールが喜界島のほうが大きく竹が登場しているのが特色となっています。天から奥さんがやってくるという天人女房（天からやってきて地上の男とむすばれた妻のこと）の話などの影響を受けているのでしょうか。

以上のことから喜界島の竜宮伝説がもととなって、その文化が北の米作地帯に伝わり、そして荒川の伝説へと変化していったと考えられます。

## 12 富士山の初夢を見て長者になった話

昔々、荒川のあるところに、仲のよい百姓の夫婦がいました。その夫婦には、かわいい男の子が生まれ、すくすくと育てて8歳になりました。

正月になるころ、父親が、子供に「正月の初夢でよい夢を見るとえらくなるよ。」と教えてくれました。

子供は、元旦の夜に早く寝て初夢を見ました。そこで、自分の見た初夢は富士山だったことを父親に話しました。それを聞いた父親は、「そうか、それはよい夢だ。しかし、このことは誰にも話すのではないよ。」と言いました。

子供は、勉強をするために荒川にあった寺小屋に通っていました。寺小屋というのは、江戸時代のころ、村の子供たちに、読み書きを教えていた小さな学校のことです。

その日は、遅刻したので、先生から「なぜ、遅刻したのですか」と聞かれました。子供は「初夢の話をお父さんにしていましたのでおくれました。」と答えました。先生は「何の夢を見たのですか」とたずねました。しかし、子供は「どんなことがあっても話せません。」と言い、後はだまってしまいました。子供は、「先生から聞かれることに、すなおに答えないといけない。」ということはわかっていたのですが、父親との約束を守りたかったのです。

先生は、「お前が、話さないと、鬼ヶ島に流すよ。先生から聞かれたら何でもすなおに話さ



ないといけないよ。」と言われました。

子供が先生の言いつけをまもらないので、とうとう鬼ヶ島に流されることになりました。

洗濯をするのに使っていたたらいに乗せられ、船の魯（船をこぐための道具）をこいで鬼ヶ島に向かいました。7日たって、鬼ヶ島に着きました。島に降りて、歩いていたら青鬼がやってきました。青鬼は「よか、ブエンがきた。」と喜んでさげびました。「ブエン」というのは、ここでは塩をつけてない新鮮な生き物のことです。それから、青鬼は「なぜ、こんな島に来たのか。」と聞きました。子供は、「話してはいけないと父親に言われた初夢のことを、先生に聞かれて答えなかったので、鬼ヶ島に来ることになりました。」と答えました。

青鬼は、少し時間をおいてから、このおいしそうな子供を食べようと思い、「島に良いものがあるから見せてあげよう。」と子供に言いました。「それは、何ですか。」と子供がたずねたら、「宝物を生み出す打ちでのこづちだ。」と青鬼は答えました。

しかし、子供は、それを欲しがるといふ顔は、わざとしないでした。そして「荒川にはもっとよいものがありますよ。」と言いました。悔しがった青鬼は「鬼ヶ島には、まだよいものがあるぞ」と自慢そうに言いました。「それは何ですか」と子供が聞くと、青鬼は「それは、千里棒と二千里棒だ。千里棒を使うと、たちまち千里ある目的地に着いてしまう。また、二千里棒を使うとその倍の早さで行く先に着けるのだよ。」とぶきみな笑いを浮かべながら答えました。一里を約4kmとしたら、千里棒は4,000km移動できる棒ということになります。二千里は、約8,000kmにもなるのです。

その後、青鬼は「おれにも初夢のことを話してみろ」と強くせまりました。しかし、子供は「それは、話すことはできません。」と、いく度となく聞かれても答えませんでした。それで青鬼は、「それなら鬼の大將をつれてくるぞ。」とおどしました。その前に、子供は、千里棒と二千里棒がある場所を聞き出していました。

鬼の大將は、それは、それはおそろしい顔をしていました。今にもおいしそうな子供を食べようとして、舌つつみを打っていました。子供は、いそいで二千里棒をうばいとり、その棒をにぎり、棒高跳びのようにして飛んで逃げ出しました。おこった鬼の大將は、残された千里棒を使って追いかけてきました。しかし、二千里棒を使って、倍の早さで逃げる子供にはとてもかないません。

折から、荒川沖の海には深い霧もかかり、とうとう子供を見失ってしまいました。そうして、無事に、荒川に逃げ帰ってくることができました。子供は、打ち出の小づちもうばって来ましたので、荒川に帰ってからは、お金持ちの長者の娘と夫婦となり、子供もたくさん生まれて幸せな暮らしをしたということです。



## 【はてな？】

なぜ初夢の話は人にしてはいけないのでしょうか。

「初夢で良い夢を見たら、人に話すな」というのは今でも言われています。幸せが逃げて人のものになるからです。運が逃げるともいわれています。昔の人は夢で占いをするほど、何の夢を見たかを非常に大事なこととっていたのです。初夢は、神や仏のお告げであると考えられていたからです。めでたい代表の夢は、一富士、二鷹、三茄子といわれています。地方によっては、宝船の絵を枕の下にしいて、良い初夢を見ようとするとところもあります。それにしても荒川の沖に鬼ヶ島があるというのは面白い話です。



## 13 大里川のいぜき支のがたり

いぜきというのは、川の水を水田などの用水路に引くために川水をせきとめているところをいいます。今では、ダムと言ったりします。



さて、いちき串木野市大里の田んぼは、はじめのころ、整った用水路の設備がありませんでした。そのため、雨が降った水、それを天水といいますが、それを使って耕作していました。日取りが続けば水が足りなくなるため、せっかくの田んぼの稲も枯れて死んでしまいます。また豪雨にあえば、大里川はたちまち氾濫して水びたしになり、見わたすかぎり湖となりましたので、いったん大雨となり氾濫の心配があると、村人たちは鍬を肩に自分の田んぼへ急ぎ、少しでも水害からまもろうとつとめました。

そのころ堀集落に出森という人がいました。彼は大雨になるとすぐ崎ヶ岡の高台にのぼって、田んぼの全体を見おろしながら、その水かさやいきおいを見きわめて、危険がせまっていることを村の人々に知らせるようになっていました。決して自分の田んぼの流出など眼中におかなかったといえます。

このような干害や水害を前もって防ぐには、なんといってもいぜきをつくることと用水路を整える以外にないと知った出森は、村人にその必要性を説きました。しかし村人たちは、耕地を開くことに多くのお金と労力をついやし、また経済的に困っていたときでもあるので、誰一人耳をかたむける人はいませんでした。

そこで出森は庄屋（村の責任者）をうごかし、寝食を忘れていろいろ計画を立て、薩摩藩の殿様の助けと教えを得て、島内にいぜきをつくる工事にとりかかりました。このころのいぜき工事は山から柴や木を伐りだし適当な太さにたばねて、川の底に敷きならべ、木の杭

(地中にうちこむ長い棒) を打ちこみ竹ガラミを組んで、だんだんにつみ上げたものでした。

工事は順調に進んでいきましたが、完成するころになってはげしい雨に見まわれ竹ガラミが流出することが2・3回ありました。そこで村人たちは、これこそ水神様のたたりによるものであろうから、人柱をたてなければこの工事の完成はむつかしかろうと、うわさするようになりました。

殿様のいいつけによって鹿児島からきていた監督は、日吉山王神社の神のおつげを受け、人柱一人を選ぶことになりました。監督から「袴に横ふせをしている者を人柱に立てよ。」とおつげがあったと聞き、人々が袴をしらべましたところ、監督の袴にそれがありました。監督は覚悟をきめ、みずから人柱となって、この工事の犠牲となりました。このほかにも地元の2人が工事のことでけんかをして、水中にたたきこまれ2人とも死んだと言われています。こうして3人の尊い犠牲を出しましたが、ついに工事は完成し、村人たちは多くのめぐみを受けることになりました。

昭和16年に発行された『市来町郷土史』に「出森某は現在、堀集落の出森助右衛門氏五代の祖であり、出森(井手守)の姓もそのとき、藩主からいただいたものであろう」と書いてあります。

なお、井手山は大谷山一帯をいい、いぜきの工事になくてはならない柴木の切り出し山がありました。この井手山は金鐘寺から大里村にあたえられたもので寺山とも呼ばれています。宇都のいぜきの横に「御山神」の石碑があり、その関わりを伝えています。

島内の用水路の傍らには、大里田んぼ開田の碑があり、いぜきや用水路の完成を喜び、豊作を祈る文字が刻まれています。昔の井堰は、現在の宇都のいぜきよりも下流にあったそうです。

## 【はてな?】

第1に、なぜ、水神にささげる人柱に男性がえられたのでしょうか。

ふつうは、嫁入り前の娘が水神の妻になるといわれ、娘が入水(水の中に入って死ぬこと)するのがもともとの話です。しかし男性が犠牲になる話も全国にあります。

第2に、なぜ、みずから人柱になると希望したのでしょうか。

ここでは、みずから責任をとって人柱になったという説を取り入れています。これは山伏(山できびしい修行し人々を助ける人)たちが村人をすくうために、すすんで人柱になるという考え方に通じる話です。



## 14 水神にささげられた川上のお支いどん

宝永元年（1704）イゼン川原の川ぞいに田んぼが出来ましたので、切り開きどん（殿）という水神をまつための石の塔が建てられました。

田んぼに水を引くためにいぜきを作ることになって、その工事が始められました。しかし川の流れがはげしくて少しの雨にもすぐおし流されて、いつ完成することやらめどさえたちません。村人はいろいろ話しあった末、「そうじゃ、一つ、神様にお願いしてみようじゃないか。」と話がまとまり、願を立てました。

神のお告げは「嫁入り前の娘を1人、人柱にたてて工事を進めればよい。」とのことでした。村人たちはさっそく殿様にそのことを申し上げ、人柱を立てることにしました。誰を人柱に立てたらよいものか迷っているとき、薩摩藩から監督にきていた霧割莊太郎という武士が「いぜきを立派に築き上げるには、袴の前まち（はかまの内またの部分に足した布）につきはぎのある者の娘を人柱にすればよかろう。」と申し出ました。さっそく皆が自分のものを調べたり、人のものを見たりしたところ、霧割役人の袴の裏に大きなつきはぎが当たっていました。人々はおどろいて顔を見あわせていると「私が言い出したのだから仕方がない。私の娘を人柱に立てよう。」と行って家に帰って行きました。

家で監督が家族を呼んで、今までの出来事をかいつまんで話しました。娘のおもいどん（お守殿）はちょうど18歳の娘ざかりでした。たくさんの人々を後々まで救えること、人柱となった後は神様としてまつられることなどを言い聞かせました。すると、娘のおもいどんは「私も武士の娘、これも人柱になるため父上、母上に今日まで育てられてきた運命と思います。喜んで人柱にたちましよう。」と言いました。

おもいどんは、水で身をきよめ、白い着物に身をかため、村人たちの見まもる中に人柱として入水（水に入って命を絶つこと）しました。するとあれほど難工事だったいぜきも人夫たちのはげしい意気ごみと昼夜をわけない努力によって、見事に完成し、今日まで多くの人々がその恩恵を受けています。

人柱となったおもいどんは、うっそうとしげった森の中にいぜきの水の音を聞きながら神様としてまつられ、眠っています。それが川上にある御森神社です。

それでは、近くの市町村にはそのような話はないのか調べてみましょう。

### 長崎堤防と袈裟が瀬（薩摩川内市高江町）

川内川の下流、河口から2kmさかのぼったところに、全長700mほどの堤防があります。おおくの面積の高江の田んぼを水害からまもっています。昭和47年にセメントによる補強工



事が行われましたが、この堤防には何か所かの突きだしたところがあり洪水の調節作用をしています。以前は、すべてが石垣であり、自然に開閉するポンプが一か所すえつけられ、一部分だけがやや以前のものに似た形で残されています。この突出部分は7か所、現代の科学でも合理的につくられた堤防であるといわれています。堤防の中ほどに岩礁（水の中にかくれている岩）があり、そこを「ケサが瀬」といっていますが、今はほとんど、けずりとられてわからなくなっています。

江戸時代の中ごろまでは、川内川は、高江の山のふもとや、やや高いところにある永田集落のあたりまで入りこみ、満潮のときは見わたすかぎりの大きな川となり、洪水のときはおおきな湖沼となりました。干潮のときは単なるデルタ地帯（三角形になった地域）で、葦が生いしげり、よしきりが鳴く不毛（作物がなにもできないところ）地帯でありました。

延宝年間（1673～81）、薩摩藩は、この地を水田地帯にしようとして干拓事業（湖沼や海浜などに堤防をつくり、水をぬいて耕地にすること）を始めました。

延宝7年（1679）島津氏の直轄工事（直接支配しておこなう工事）が始まりました。監督とよばれる役人は、小野千右衛門でありました。千右衛門は、仙右衛門と書かれることが多いですが、宮崎市糸原町倉岡にある墓には「千」の字がきざまれています。

千右衛門の監督のもとに工事がはじめられました。雨があまり降らない乾期を利用してどんどん杭が打たれ、それにそって石を積んでいく作業が行われました。はじめは、うまくいっていましたが、6、7月の大雨で、川内川は水かさが増し、あれほど丈夫に築いたはずの堤防を全て押し流してしまいました。3年目、4年目も、ちょうど賽の河原（子供が死んでから苦しみを受けるというあの世の川原）の石のようにもろくくずれ去るありさまです。藩のお金にも限りがあります。千右衛門は腹を割切って死のうと思うことがいくたびもありました。

そんなある晩、千右衛門は夢を見ました。「横はぎの着物を着た娘を水神にささげよ。その娘の流れのままになわをはり、なわの動きにしたがって堤防を作れ」という夢でした。横はぎの着物とは、立てじまの着物に横じまの布をあててぬった着物のことです。

あくる朝、千右衛門は半鐘（小さいつり鐘の音であるが、災害があったときに打ち鳴らすことが多い）で目をさました。今朝も、大雨でした。知らせはすぐに来ました。一人娘のケサの死亡の知らせでした。川にはまり、岩にひっかかっているのがみつかったということです。千右衛門は、走ってその場に行きました。見るとあのかわいい、村でも評判のきれいな娘が死んでいたのです。そこで、ハッとしました。横はぎの着物を着ていたのです。神のお告げのあった横はぎの着物を。もしかすると娘も神のお告げを聞いたのかも知れません。

千右衛門は夢に見たとおりに、長崎の方から越路のほうに長い長いなわを流してみました。そのなわは、濁流（にごった水の流れ）の中を生き物のように、また蛇のうねりのように流れて行くのです。そして、





ケサの死んでいた岩のところちょっと止まって、また、うねりながら伸びて行ったのです。そのなわが流れたうねりの形にそって、松の杭を打っていきました。こんどこそはと、工事人夫たちも精を出して石を積んでいきました。1つ目、2つ目、3つ目となわのうねりにそって石垣をつくり、7つ目で向こう岸の越路に石垣はとどきました。長さ260間（一間を1.891mとすると485.94m）、思えば長い工事期間でありました。途中に、2つの水門、越路に最後の水門が出来上がったのが貞享4年（1687）、足かけ8年の工期でありました。あれから300余年、いかなる大洪水にも耐え、こわれたり、水がもれることは、ただの1度もありません。

娘のひっかかかっていた岩を袈裟が瀬といいいます。ケサをまつたという大きな岩が、越路の川岸の上にひっそりとたたずんでいます。そこには、次のような文字がきざまれています。

心 貞享三年 丙寅 四月 下旬

此念壺塘成就

## 【はてな？】

これをわかりやすく解しますと、「心 貞享3年（1686）丙寅の年の下旬 この信念によりひとつの堤防が完成しました。」という意味になります。



「心」というのは、亡くなった人が成仏できるようにお願いする意味です。

墓というより鎮魂の碑とでもいうべきものです。誰の心をしずめるのでしょうか。それは人柱となったケサの霊です。そのほか、工事で犠牲となった人夫たちの霊もなぐさめるものと考えられます。この碑はケサをまつたというより、ケサをなぐさめ、後々の人々にたたらないようにとの思いで建てられたのではないのでしょうか。それと「粘り強い執念により堤防が完成した」ということを記念したというのが、主な理由だと思われます。

このような話は、『古事記』に出ています。ヤマトタケルノミコトが、神奈川県走水から千葉に渡ろうとしたとき、急に海が荒れだしました。これは、神のいかりであろうと、ヤマトタケルノミコトの妃オトタチバナヒメノミコトが自ら海に身を投げ、荒波をしずめたという話です。

では、なぜ、なわを流したのでしょうか。薩摩川内市高江町の築堤工事では、なわを流したら「蛇の流れのように流れていった」とあります。それは、水神が、蛇、あるいは大蛇、龍であるということの意味するからです。

なぜ、横はぎのある着物を着ていたらいけないのでしょうか。

それは横はぎの着物を着ているということは、縦に流れる水を、せき止めることになります。水の流れが止まったら洪水になりますね。

なぜ、このような人柱伝説が日本の各地に多く残っているのでしょうか。考えられることは、

村が発展していく際に、昔、誰かが村のために犠牲になったという話が語られている。すると、その犠牲になった人に感謝し、命がけで頑張っていこうという精神が芽生えてくることを期待するために人柱伝説が必要であったという考え方があります。実際にあったのか、なかったのか詳しくはわかっていません。

## 15 荒川のもれんび (亡霊の火)

荒川の中向公民館の北、約 200 m のところに「シロندان」という谷があります。正確には城ヶ谷と書きます。ここは、昔、荒川太郎と、陣が岡に陣をしいた串木野三郎が戦ったときの古い戦場です。現在、そこには竹が生いしげっています。ここは、兵隊の少ない荒川太郎が表



わらで人形をこしらえ、こちらには、こんなに戦士の数が多いぞ、と見せかけたところです。荒川太郎の軍は、残念ながら串木野三郎に負けてしまいました。荒川の兵隊たちは勇敢に戦ったのですが、多くは殺されてしまいました。よほど、くやしい思いで死んでいったのでしょうか。その後、夜になるとかならず、もれんび (亡霊の火) が飛びかい、うらめしそうなくやし泣きの声が聞こえてきたそうです。もれんびというのは火の玉のことです。昔の墓では、夏になると、雨がしとしとと降る夜など、青白い火がよく飛んでいたそうです。それはそれはおそろしいもので、誰でも、その火を見たら命がけで逃げ帰っていたようです。

しかし、くやしい思いをして、荒川太郎のために戦って死んだ人のために、近くの荒川の人々は餅をついて供えました。そして、「さぞ、くやしかったことでしょう。荒川のために戦ってくださって、本当に有難うございました。どうぞこの餅を食べてください。」と言って、ナムアマダブツを唱え、なぐさめました。昔は、餅はお供えに使うほど、大事な食べ物でした。

その後、もれん火も飛ばなくなり、悲しい泣き声も聞こえなくなりました。

### 【はてな？】

なぜ、戦いで亡くなった人が、後々まで火の玉となったり、しくしくと泣くのでしょうか。

それは、悔しい思いで死に、そのうえにお参りしてくれる人がいなくて、迷いの世界から抜け出せないと考えられていたからです。

なぜ、死んだ人に餅を供えたりするのでしょうか。

それは、荒れ狂った霊に大切な餅を供え、なぐさめることによって浄めるためです。餅は



靈魂を強める貴重な食べ物で、また、靈魂を浄める力も強いと信じられていました。

## 16 田中どんのまねんのひ (亡霊の火)

大里<sup>きこ</sup>追<sup>だ</sup>田<sup>はし</sup>橋の手前にある田んぼの中に「田中どん」といわれる田中家の墓があります。薩摩藩<sup>いっこうしゅうだん</sup>の一向宗<sup>あつ</sup>弾<sup>だま</sup>圧<sup>あつ</sup>により、36石<sup>いっくわ</sup>取りの郷土<sup>ごうど</sup>であった田中家は、一向宗の信者であるという罪で、当主<sup>あや</sup>など11人が殺められ、家も焼かれて、一族は百姓の身となりました。田中家はその後、享保12年(1727)丁未<sup>ていみ</sup>閏正月17日に、石<sup>いし</sup>仏<sup>ぶつ</sup>像<sup>ざう</sup>をきざんだ墓<sup>ぼ</sup>を建てました。



大里の古老<sup>ころう</sup>たちは、田中どんの墓から火の玉が出て、付近の田の上を川<sup>かわ</sup>づたいに低く飛んでいるのを見たと言います。これは、殺された人々が子供をさがして飛んでいる「もれんひ」だろうと、うわさしています。

また、堀<sup>ほり</sup>集<sup>じふ</sup>落<sup>らく</sup>の川崎家の横にある氏神<sup>うじがみ</sup>の前に、幹<sup>み</sup>まわりが3~4mぐらいの<sup>ひとつ</sup>葉<sup>ば</sup>(犬<sup>いぬ</sup>楨)があります。この木の北側に昭和25年に枯れた松の大木の切り株があります。この松が枯れる前は、この松のまわりを不思議な火の玉が飛んでいました。

昭和5年ごろ、七夕<sup>たなばた</sup>踊<sup>おど</sup>の夜<sup>よ</sup>稽<sup>げい</sup>古<sup>こ</sup>の帰<sup>かえ</sup>り道<sup>みち</sup>、松の木にたくさんの火の玉がとまっているのを見たという人がいます。その人の話によると、しばらくすると火の玉はパツパツと消え、いくつかの火の玉にまとまり、いつのまにか消えてしまいました。あまりにも恐かったので太鼓をたたきながら、家に帰ったそうです。

人々の話では、この辺りでは、鍋ヶ城の方から飛んで行って、その松に集まるといわれていたようです。

## 17 どうりを後ろ向きに履いて落ちのびた虎若

昔、荒川<sup>あらかわ</sup>太郎<sup>たろう</sup>種<sup>ね</sup>房<sup>ぶさ</sup>が、串木<sup>くしき</sup>野<sup>の</sup>三<sup>さぶ</sup>郎<sup>ろう</sup>との戦いに敗れたとき、戦死した荒川太郎と長男<sup>やろく</sup>矢<sup>や</sup>六<sup>ろく</sup>、二男<sup>たか</sup>高<sup>いち</sup>市<sup>まる</sup>丸の亡きがらは、県道43号線(串木野の町から羽島に通じている道)の脇にある供養<sup>くやう</sup>塚<sup>づか</sup>にほうむって、手厚<sup>てあつ</sup>くなぐさめられていました。しかし、三男<sup>とら</sup>虎<sup>わか</sup>若<sup>わか</sup>は、まだ幼<sup>おきな</sup>かったので乳母<sup>めの</sup>につれられて入来<sup>いりき</sup>(現在の薩摩川内市入来町)に落ちのびていくことになりました。逃げる途中、虎若が乳母に向かって「うばよ、どうりを後ろ向きに履いて逃げようよ。」と言いました。



乳母は、「なぜでございますか。」と不思議そうに問いかけました。すると、虎若は、「ぞうりをまともに前向きにはくと、追ってくる敵に逃げ道が分かってしまうではないか。」と答えました。乳母は、「まあ、本当でございますね。虎若様、あなたはなんてかしこい方なのでしょう。」とほめながら、ぞうりを後ろ向きにはいて、命がけで逃げました。追いせまってきた敵は、ぞうりのあとが後ろ向きになっているのを見て虎若の逃げる方向とは違う、反対の方向に追って行きました。そして、とうとう見失ってしまいました。見つけれはるはずがありません。また良いことに、山道は霧も深く、雲も低くたれこめていました。おかげで、2人は無事に入来の味方の家に落ちのびることができました。その後、2人は平和に暮らしたそうです。

今でも、入来町浦之名には荒川どん（殿）の屋敷が残っており、そこには、虎若と乳母の霊が荒神様として、まつられているそうです。荒神様ですから、近くの人は恐れ敬っているそうですが、いつくしみの気持ちをもちながら、手を合わせてていねいにおがんでいます。また、虎若が持っていたといわれる、赤いさやの脇差と当時、乳母がたもとに入れてきた石の斧も浦之名の荒川家に大切にしまわれています。脇差も石の斧も、敵に追いつめられたときに、必死に戦って、敗れたときは自害（自分で死ぬこと）するためのものだと言われています。

## 【はてな？】

なぜ、履きものを反対に履くのでしょうか、それは、話にあるとおり、敵をあざむくためです。しかし、虎若には、幼いながらも再び荒川に帰りたいという気持ちがあったのではない

でしょうか。いちき串木野市の上名では、家族のある人が、第二次世界大戦で出征するときは、帰ってきてほしいという願いを込めて、家の人、履きものを反対の向きにして出すというしきたりがありました。これは、この地方ではよく聞く話です。



## 18 アブンサマ（鐙様）

鐙（あぶみ）というのは、馬の鞍（くら）（人や荷物をのせるために馬や牛の背中にのせる道具に）の両方の脇（わき）に下げ、馬に乗る人の足を踏みかけるものです。これが、どうしたわけか、不思議な力を出すのです。

いちき串木野市荒川のある屋敷に「トイナモン（年の者）」がまつりをしてなぐさめている「アブンサマ」があります。「トイナモン」というのは、単に年をとっている人という意味だけで

なく、まつりができて、村人の病気をなおしてあげる力をもった人のことです。人々から大変、尊敬されていました。

荒川から薩摩川内市青山町に通じる県道の寺村集落に丘があり、そこに急カーブになったところがあります。かつては、木が青々と茂った森が道路にせまっていた、うす暗いところでした。その丘の上にアブンサマがまつられていました。昔、この地で合戦がありましたが、そのとき高貴な武将がつけていた鎧であったそうです。おそらくこの武将は、敵と戦って負け、くやしい思いのまま死んだのでしょう。

ある時、アブンサマがまつられなくなると、大雨のたびに崖崩れがおこり通行止めになることが多くなりました。近くにある荒川小学校の生徒たちは、そのたびに、まわり道をしなければなりません。これは、くやしがつて死んだ武将の怨霊（うらみをもって、人に病気や不幸をもたらず死んだ人の霊）があばれだしたのではないかと村人たちは心配しました。この武将は、荒川太郎の家来だったのでしょうか。その後、立派な県道ができて崖は崩れなくなりました。

羽島でも、アブンサマを守り神にしている家があります。鎧には、亡くなった人の霊が寄りつくのでしょう。

## 【はてな？】

なぜ、鎧は人にたたって悪さをするのでしょうか。

それは、戦いに明けくれた武士は、鎧に足をかけながら勇敢に戦わなければなりません。

足が鎧からはずれたら、動きがにぶくなり戦いに負けてしまいます。鎧は武士の命であり、たましいであると思われていました。無念にも敵に打ち負かされて死んだ武士の霊はあたり、あの世から人に悪さをするのです。ただし、羽島のように、大切に供養していれば家の守り神になったということもあります。



## 19 池の主に飲まれたヨシタオゴジヨ (寄田のお嬢さん)

荒川のある家には、屋敷に「ヨシタオゴジヨ」という小さな観音様が祀られています。

「ヨシタオゴジヨ」というのは、薩摩川内市みやま池にまつわる伝説に出てくる大蛇に吸いこまれた庄屋の一人娘のことです。庄屋というのは村の長のことで、今の小さな村の村長さんにあたります。みやま池は、荒川から15 kmぐらい北にあります。ひよろ長くて美しい池

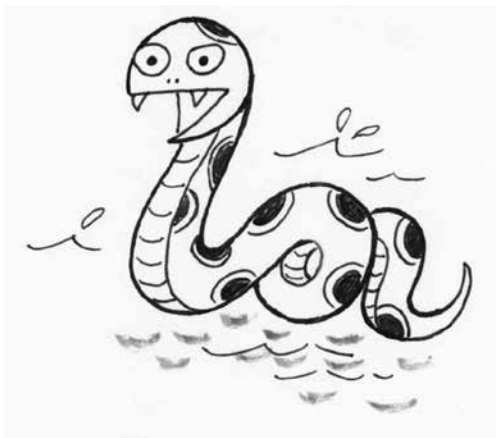
です。川内原子力発電所の南側にあります。なぜ、荒川のある家でまつようになったのかわかっていません。荒川には、有名な盲僧（目の不自由なお坊さん）が、昔からいましたので、その盲僧がまつるのをすすめたという話も伝わっています。

みやま池のそばを通るとき、「若い娘は赤い着物を着るな」といわれています。これには次のようなわけがあるからです。

昔、寄田の庄屋「ヨシタドン（寄田殿）」が、このみやま池で遊ぼうと大きな舟をつくりました。できあがった舟を池に浮かべてみたら、どうしたわけか、舟が岸の岩に吸いついたように動こうとしません。何人がかりで押しても、何十人がかりで離そうとしても動きません。

その夜、「ヨシタドン」は夢を見て「お前の一人娘に赤い着物を着せ、赤いたすきをかけさせて舟に乗せてみる。そうしたら、舟が動くようになるぞ」と言われました。後日、庄屋がそのとおりにすると、不思議なことに舟はすすいと池の真ん中へと進んでいくではないですか。ところが、突然、この舟はすすうと娘もろともに池の底に吸い込まれてしまいました。

目に入れても痛くないほど、かわいがっていた一人娘を失った「ヨシタドン」は、なげき悲しみ、そして怒り狂いました。さっそく、村人に命じて池の水を汲み干すことにしました。



村中の人々が集まって水を汲み出していますと、空が一天にわかにかき曇り、たちまち激しい雨が水面をたたきつけました。まもなくして大波のうずまく池の中からおそろしい姿かたちをした大蛇が半身をあらわしました。それはそれは、この世のものとは思えないおそろしい怪獣でした。村人はわなわなと、ふるえあがっていました。その大蛇こそみやま池の「ヌシ（主）」だったのです。

悲しいことに、いつまでたっても庄屋の一人娘が姿を見せることはありませんでした。その後、この池のほとりを、若い娘が赤い着物を着て通ると池の底に吸い込まれるといわれています。池の底には大蛇がいるせいか、大干ばつときにも水がなくなることはありません。

大蛇に吸い込まれた若い娘の霊は、そのうらみの気持ちが荒々しい霊となってみやま池のあたりをただよっていると考えられていました。

その霊を、みやま池から遠く離れた荒川の家でまつっています。ある日、寄田の人が荒川の「ヨシタオゴジョ」をまつている家を訪れ、「『ヨシタオゴジョ』の霊をなくさめてくださって有難うございます」と礼を言ったそうです。その人が誰だったのかは分かりません。



## 【はてな？】

なぜ、池のほとりを若い娘が赤い色の物をつけて歩くと池の底に吸い込まれるのでしょうか。

それは、赤や花模様の着物や手ぬぐいは、神様のものと考えられていたからです。神様と同じものを着たりすると罰があたり、病になったり、死んだりしたという話はあちこちで聞かれます。



## 20 鷹の子が神となった話

薩摩川内市入来町浦之名市野々には、スサノオノミコトをまつた鷹巢神社があります。

昔、市野々にどこからともなく鷹が飛んできて、巢を作り、やがて3羽のひな鳥が生まれました。大きくなったら、山の中に飛んでいってマムシを食べてくれました。それからは、マムシにかまれる人はいなくなりました。人々は、これはスサノオノミコトが鷹の姿になってマムシを退治してくださったのだと喜びました。それから人々は土地を開いて田畑を作り、安心して暮らすことができるようになりました。さっそく、鷹巢神社を建てようということになりました。ところが、ある日、白い着物を着て、白い馬に乗った人がやってきました。鷹はそれを見て、恐ろしさのあまり、いちき串木野の羽島に飛んでいきました。羽島崎神社は、この鷹の子をまつた神社だとも言われています。それから羽島にもマムシがいなくなったといわれます。



## 【はてな？】

なぜ、遠い入来の浦之名から、スサノオノミコトが鷹に身を替えて飛んできた話が、羽島に残っているのでしょうか。

それは、入来と羽島の昔の交流関係を物語っているといわれます。入来渋谷氏は、羽島と塩の取り引きをしていたと言われ、生活に必要な



な塩を売りに来てくれると感謝していました。それで、塩トトといわれる里親関係を結びました。入来だけでなく、薩摩川内市や薩摩郡の人たちは、子供が生まれると「塩トト」になってもらいました。塩を売りにくる体の丈夫な人に、お父さんがわりになってもらえれば、その子供が健康に育つと期待されたのです。

## 21 白山かけはし 稚児の宮

白山は、石川県にある山で、富士山、立山とならんで日本三名山の一つです。修験の山として有名で、白山信仰は全国に伝わり、白山神社が日本各地にも建てられました。冠岳にもまつてあります。中岳神社から西に約 300 m 行き、そこから北に約 300 m 行ったところに大きな白山岩があり、その岩の下に白山神社があります。

「かけはし」というのは、険しいがけなどに板をわたした橋を言いますが、白山神社から橋をかけられるような近いところに稚児の宮（※目に見えない架空の宮）があるという意味です。稚児の宮というのは、鹿児島では幼い男の子を稚児といますが、その稚児をまつた神社という意味です。

冠岳の白山神社の近くに稚児の宮があったといわれています。誰にでも見えるわけではありませんが、この稚児の宮にお参りすることができれば、大変なご馳走にあえるといわれています。しかし、心のきれいな人でないとお参りすることはできないともいわれています。また、ここにある笕（竹や木の中心部をくりぬいて、管にして、泉から水を引いてきた樋のこと）からは、おいしい酒が出てくるそうです。ここで、ご馳走を腹いっぱい食べて、酒をたくさん飲んでもよいが、その人は二度と稚児の宮を見つけることはできないと伝えられています。

生福に住むある人が冬の寒い日に、山に薪取りに行ったところ、おどろくことに非常に寒い冬の日にもかかわらず橋（みかんの一種）の実が枝もたわわにさがり、鈴なりになっている木を見つけました。たくさん手に入れようと、家に帰り、馬を引いて再び出かけて探してみましたが、その木は、どこにも見当たりませんでした。山を下りる時は、木の枝を折って道しるべにして帰ったのですが、探すことはできませんでした。このように欲の心を出せば、2度とお参りできないともいわれています。ですから、そういう時は、みかんは5つか6つ取って帰り、誰にも話さないでカマゲ（米などを入れるわらで編んだ袋）に入れておけば、明るる朝は、カマゲいっぱいになるといわれます。

この話については、神仙思想とは何かについて考





えなければなりません。神仙思想というのは、中国の不思議な力を持った仙人にまつわる考え方のことで、これが冠岳に伝わっていたことが分かります。それでは、ほかにはそのような話はないのでしょうか。

## 霧島の神仙郷

霧島の奥深い山の中には、神仙郷があるといわれています。そこでは、中国風の異様な姿をした老翁にあたり、妖艶な美しい女性にあたりする人がいます。また、奥深い谷や山の中から、突然、歌や舞の音楽が聞こえ、優雅に舞っている仙女の姿を見たという人もいます。あるいは、にわたりの鳴く声がしたり、橘の実が熟した木のある一軒の家にとどりついたりします。しかし、明るる日に探しに行っても見つけることはできないといえます。

### 【はてな？】

なぜ、このような中国の仙人の里のような話が冠岳に伝わっているのでしょうか。

これは、冠岳は修験道の山として有名で、そこには、たくさんの修験者たちが修行をして、そこで得たまじないの力で人々の病気を治療したりしていました。その修験者たちは、仏教だけでなく神仙思想も学んでいたのです。

中国山東省の南のはしにある君山はもともと、有名な仙郷（仙人が住む里）でした。その山には、おいしい酒があり、それを飲むと不老不死のききめが得られるといわれています。

次に、なぜ白山神社が冠岳に残っているのでしょうか。白山は、石川県石川郡、岐阜県大野郡および郡上郡の境にある山です。白山では修験者たちが多く修行をしており、彼らが中世ごろ全国に白山信仰を広めました。鹿児島にも霧島山や高隈山に白山や白山神社があります。しかし、島津氏の力が強くなってからは、熊野信仰の影響が白山信仰の影響をうわまわってきました。全国的にも、戦国時代以降、特に上杉謙信の力がおとろえたころから、白山の影響も下火になってきました。白山神社と稚児の宮が結びついている例も多くみられます。冠岳に白山信仰のあとが残っているのは、大切なことで、かつて白山から修験者がやってきたことを示しているのでしょうか。



## 22 徐福は冠岳に本当に来たの？

天保時代（1830～44）のころ、薩摩藩で編集された『三国名勝図会』には、次のようなことが書かれています。



一つの説では、西岳の形は風折烏帽子に似ているので、冠岳といっているそうです。また、別の説では、中国の孝元帝の時代、秦の徐福が来て、玉冠（宝石のついた冠）を冠岳に置いたので冠岳と言われているようです。徐福は、冠岳から紫尾山に行き、そこを去って紀州の国、熊野山に行ったと言われ、烏帽子というのは、からすのはねのように黒く塗った帽子で、青年になった男子がつける袋型のかぶりもののことです。風折烏帽子は、位のある人がかぶるものです。

徐福が秦の始皇帝の方士（神仙の術にすぐれた人。道士ともいいます）としてやって来たという場所は、日本には二十か所以上あるといわれます。徐福は、数千人の童男、童女、金銀珠玉を船に積み込んで、不老不死の薬を求めてやって来たと言われています。徐福が日本に来たと言われる秦の時代、日本は弥生時代でした。日本では伝説の人とされていますが、近年中国では実在の人物とみられるようになりました。冠岳には薬草がたくさん生えています。そのようなことから、不老不死の薬は、冠岳にあったのだと信じている人がいるのです。

## 【はてな？】

なぜ、冠岳に徐福がやってきたという話が伝わっているのでしょうか。

これは、冠岳は修験の山として有名なので、和歌山県の熊野から多くの修験者が、このような話を持ってきたと考えられています。しかし、中国大陸から直接、入ってきた可能性もあります。



## 23 なまけだお坊さんをこらしめた天狗

『三国名勝図会』に、次のようなことが書かれています。

この冠岳には、天狗がすんでいます。その証拠に不思議なことがいっぱいあります。山の上で火が燃えたり、鐘やほら貝の音が聞こえたり、そして、山に建っている寺や岩がくずれるような大きなひびきが生ずることもあります。これを「天狗の山崩れ」とか「天狗おどし」と言います。また、山



の寺に住んでいるお坊さんが修行をおこたったり、きたないことをしたりした時は、天狗は必ず、お坊さんを罰ばつしました。時々、裸はだかにしたり、あるいは、殺してしまうこともありました。

冠岳かむくろの西岳にしだけには、天狗岩てんぐいわと呼ばれる、五段重ごだんがきねの巨大な岩があります。昔から天狗がすむところとして恐れられています。

## 【はてな？】

なぜ、冠岳には怖い天狗の話が伝わっているのでしょうか。

「天狗は山伏のごとし（天狗は山伏のようなものであります）」と鎌倉時代かまくらしだいの末のころは言われていました。冠岳は修験しゆげんの山で、修験者が天狗といわれていたと考えられます。修行をおこたる修験者は厳しく罰せられていたことを示しています。



## 24 キッチョンと冠岳の天狗



キッチョンは大変なとんち者で、冠岳ではただ一人、天狗どんと話の出来る、人物でした。

ある日のこと、天狗どんが、キッチョンに「わや（お前は）、世の中で何が一番きらいか」とたずねました。キッチョンは「ボタモチ」と答えました。こんどは、キッチョンが「天狗さんな（天狗様は）、何が苦手な」と聞きました。そうしたところ、「おれか、おや（おれは）、〈ピ〉だ」といいました。〈ピ〉というのは、カラタチやタチバナなどの低木に見られる先のとがったトゲです。

天狗どんは、蓑笠みのかさ（茅かやや菅すげなどの葉あで編あんだ笠）を身につけて、姿を隠かくすことが出来る術を知っています。キッチョンは、かねがね、ただ一度でよいから、天狗どんの蓑笠を借りて、自分の姿を隠してみたいと思っていました。そこで、天狗どんに、一生懸命いっしょうけんめいねだって、2～3日中に返すという約束で、説きふせ、その蓑笠を貸してもらいました。

さっそく、キッチョンは、娘のお産の手伝いに行っている妻のケサマツの所おとすを訪れることにしました。蓑笠に身をつつんだキッチョンは、小川の横で赤ん坊のおむつを洗っているケサマツの後ろから「オイ、ケサマツ」と声をかけてみました。「ビックイシタガ（びっくりしたが）、タマガッタガ（驚いたが）」と言って、後ろを振り返ってみたケサマツの目にはキッチョ

ンの姿は見えません。

その驚き様に喜んだキッコンは、その足で、3里（1里を4kmとすると12kmになります）の道を浜の方へ歩いて行き、かねて、顔見知りの家を次から次へとおとずれ、声をかけてみました。どこでも、キッコンの姿がまったく見えないので皆が驚いていました。

ますます、面白くてたまらなくなったキッコンは、その翌日も浜に出かけ、手当たりしだいに、人の背中をたたいたり、おしりをつついたりして、びっくりさせてまわりました。家にもどって一人で「ダイヤモンド（疲れを取るための晩酌）」の焼酎を飲みながら、キッコンは考えました。「いよいよ、あさっては、世にもめずらしい、この蓑笠を、天狗どんに<sup>もど</sup>戻さなければならない。何とか戻さんでもよい方法はないものだろうか。ああ、そうか、これにかぎる」と、キッコンは悪だくみをおもいつきました。

あくる朝、キッコンは、早々山野を駆けめぐり、カラタチやナラやボタン、山いちごの枝など、〈ピ〉のついた草木を山ほど刈り集め、それを自分の家の屋根から周囲まで、残すところなく並べ立てました。天狗どんが家の中に入ってこられないようにするためです。

戻す日がきても、キッコンは、いっこうに蓑笠を返そうとしません。天狗どんが、「戻せ」と言っ、家に行ってみれば、まわりには〈ピ〉の草木が張り巡らせてあります。怒った天狗どんは、ボタモチを作って、家の中に投げ込みましたが、ききめはありません。

人を驚かすことが楽しみになったキッコンの浜下りは、ますます激しくなりました。家の田の草も取らないし、畑の手入れもしようとしません。ついに「キッコンには、浜に、よかとがでけたようなふうじゃ（いい人〈好きな女性〉が出来たようなふうだ）」とのうわさが立ちました。それが、とうとう妻のケサマツの耳に入りました。なんとかせにゃならん（何とか、しなければならぬ）と思って、家に戻ったケサマツの目にうつったのは、見られない蓑と笠。腹立ちまぎれに、ケサマツはそれを焼いて、灰にしました。

蓑笠が焼かれてしまっは、キッコンのいたずらも、もうそれまで。せめて、と思ったキッコンは、まっばだか（真っ裸）になって、その灰を全身にぬってみたら、すっかり身を隠すことができました。それでは、ということで、浜町に行って「オイ、オイ」と呼びかけてみました。振り向いた人々の目にうつったのは、なんとキッコンの大事な部分。それを追いかけてまわされては、キッコンもそれまで。キッコンが、立ち小便をしたとき、そこだけは灰が、はげ落ちていたのです。

『国分郷土誌』下巻には「天狗のかくれ蓑」という題で同じような話が載せられています。

「天狗から隠れ蓑を借りた若者が、町に出て、食べ放題、飲み放題。酔っ払って、いろりのそばで寝込んでいる間にかくれ蓑が焼けてしまいました。その灰を体にぬったら、やはりききめがあり、姿を隠すことができました。

ある日、酒屋に入り、酔っ払ってしまい、酒をひっくり返してしまいました。灰があちこち落ち、手が見え、口が見え、鼻が見えてきました。とうとう酒屋の主人に、その姿が見えるようになっ



てきました。「酒が、いつのまにかなくなると思っていたら、お前のしわざか、この泥棒め。」  
とって、たたき出されてしまいました。」

## 【はてな？】

天狗のかくれ蓑の話は、どこから伝わってきたのでしょうか。

隠れ蓑の話は、彦一、彦市話の代表的なずるがしこい笑い話として熊本県や徳島県、大阪府などでも報告されています。民俗学的には天狗の蓑笠姿は、あの世からやってくる来訪神と考えられています。

話に出てくるキッコムどんとは何者でしょうか。

キッコムとは即ち、「吉四六」の事で、笑い話に良く使われる主人公の名です。大分県大野郡野津町や臼杵市、佐伯市などを中心に語られています。

熊本県の球磨郡や八代郡の一带では「彦一」が笑い話の主人公となっていて「天狗のかくれ蓑」などの話が伝えられています。紹介してみましょう。

八代の竜峯山というところには天狗どんが住んでいました。ある日、天狗どんが近くの宮地というところの楠の木の下で、「えいえい」といって、剣術の稽古をしていました。しかし、隠れ蓑を着ているので、天狗どんの姿は見え、楠の木の下から声ばかりが聞こえるのでした。そこに通りかかったのが彦一でした。彦一は楠の木の下から、「えいえい」と声ばかり聞こえてくるのを聞いて、「はあ、竜峯山の天狗どんだろう。何ばしよらすか知らんばってん（何をしてられるのか知らないけれど）、姿は隠れ蓑で隠して、ええ気色（気分のこと）」と思いました。隠れ蓑というのは便利なものと、つくづく思うのでした。するとそれが欲しくなりました。「何とかして天狗どんの、あの隠れ蓑を手に入れられんものかな。しかし天狗どんにとって何よりも大切な隠れ蓑を取りあげることはなかなかむつかしからう」と思いました。

ふと彦一は、自分が今メゴ（かごのこと）をかついでいることを思いつきました。何くわぬ顔をして「えいえい」と声ばかり聞こえてくる楠の木の下に行き、メゴを顔にあてて、大きな声でいかにも楽しそうに「見ゆる。見ゆる。これで見ると何でん（何でも）見ゆる。こらおもしれえ（これはおもしろい）、おもしろか」と言いました。すると今まで、「えいえい」といっていた声が、はたととまりました。彦一は自分の言っていることを天狗どんが聞いているなど、確信しました。そこで続けて、口から出まかせに、「こら何でん見ゆっとばい。江戸の相撲も見ゆるとばい、ほら東が勝った。西が負けた、東が勝った、西が負けた。」



天狗どんは隠れ蓑を着たまま、彦一のところに近づいて、うらやましそうに言いました。「おい彦一どん、おれにも見せんかい（見せないかい）。」すると彦一は、心の中でやりとして、「そう言うおまえさんは誰だい。」と、そ知らぬふりで聞きました。「おりゃ竜峯山の天狗たい。」「天狗どんなら、天狗どんのごっ姿ば見せなはり。隠れ蓑ば着とるもんじゃ、遠眼鏡は見せられん。」そこで天狗どんは隠れ蓑を脱ぎすてました。するとひょっこりと彦一の前に天狗どんの姿があらわれました。彦一は少しもさわがず、「この遠眼鏡ば見するけん、その隠れ蓑ば、おれに渡しときなはり（渡しておきなさい）。」と言いました。天狗どんは遠眼鏡見たさに、ついうっかり隠れ蓑を彦一に手渡しました。彦一は手に持っていたメゴを天狗どんにやるより早く、その隠れ蓑を着てしまいました。そのため彦一の姿はたちまちそこから消えました。天狗どんはしまったと思いましたが、もう後のまつりです。あわてて竜峯山に逃げ帰りました。

まんまと天狗どんから隠れ蓑をぶんどった彦一は、それを着て家に帰りました。道で出あった誰も彼も、彦一に気づくものはありません。彦一は自分の姿が完全に消えているのに満足し、道で行き会う人々の頭をなでたり、鼻をつまんだりして、いたずらをしました。人々はひやーと大声をあげ、不思議そうにあたりを見まわしました。

彦一は自分の家に帰ると、嫁女（奥さんのこと）のタンスの引き出しを開け、中の着物をほたくり出して（放り出して）しまって、隠れ蓑を脱いで、それをそこにしまいました。

酒好きの彦一は、それから酒飲みに出かけました。考えれば考えるほど愉快でたまらず、彦一はにこにこして酒を飲みました。酒屋の主人が、「今日のように楽しそうな彦一を見たのはめずらしい」と、言ったほどです。ところが彦一が出かけた後に、嫁女が外から帰ってきました。そして、家の中に自分が大切にしている着物がほたくり出してあるのを見ると、びっくりしました。初めは泥棒かと思いました。しかし、何一つなくなっていないので、不思議に思ってタンスの引きだしを開けてみると、うす汚い蓑が大事そうにしまってあるのです。嫁女は腹を立てて、「こぎゃん（こんな）きたなかつば（きたないのを）ここになおしたりして、ほんにおかしな人のごたるばい。」と彦一の悪口を言って、その蓑を釜の下にくべて（もやして）しまいました。



いい気持ちで帰ってきた彦一は、大事な隠れ蓑を見たくなり、にこにこしてタンスの引き出しを開けました。しかし、そこにはもとのように、嫁女の着物がきれいにたたまれて重ねられ、いくら探してもあの大事な隠れ蓑はありません。

彦一はびっくりしました。嫁女に向かって、「タンスの底にしまっといた蓑はどぎゃんしたか（どのようにしたか）。」と聞きました。すると嫁女はぶりぶりして、「あんまり汚なかけん、釜下にくべてしまいましたばい。」と答えました。彦一はがっかりしました。そして、その蓑を焼いたという釜の下の灰を未練たらしくすくい上げました。そしてその灰を体につけました。すると体が見えなくなりました。彦一は喜んで、その灰を体中にぬりつけて、すっ

かり姿を隠しました。それからまた、酒屋に出かけました。

そして、こんどは姿が見えないのをよいことに、酒をどしどし無断で飲みました。そのうちに彦一は酔いがまわって眠くなりました。彦一はごろりと横になりました。姿が見えないので誰も気づきません。ただどこからともなくいびきが聞こえるので、番頭たちが不思議に思っていました。

彦一は眠ってしまっているうちに、うっかり小便をひっかぶりました。そのため小便の出たところがぬれて、灰がはげ落ち、そこだけが見えてきました。番頭たちは妙なものがあるぞ、と言ってさわぎ始めました。

誰の目にも彦一の姿は見え、小便の出たところだけが見えるのでした。それで彦一が逃げてゆくと、そここのところだけが宙に浮いて飛んでゆくように、人々には見えました。人々はさかんに後ろから追っかけたということです。

## 【はてな？】

いちき串木野市に伝わる<sup>みの かさ</sup>蓑笠や隠れ蓑の話は、主人公のキッコムからは大分県、話の内容からすると熊本県の影響が考えられます。しかし、いちき串木野市の話では、天狗がピヤトゲを苦手としたり、キッコムが浜下りをしたりして、地元のしきたりや地名と結びつき複雑になり面白みを増しています。単なる笑い話が、いちき串木野市に伝えられて後、伝説として合理化し、聞く人が納得出来る、またとても面白い話に変化しているのです。



## 25 冠岳と金峰山のけんか

昔、西岳と、南さつま市の<sup>きんぼう ちょう</sup>金峰町にある金峰山がけんかをしました。西岳は、金峰山をめがけて、すすきの矢を<sup>はな</sup>放ち、金峰山は、大きな<sup>ゆみ</sup>弓に材木の矢をかまえて西岳めがけて放ちました。西岳の射たすすきの矢は金峰山の目を射ぬき、金峰山は、<sup>かた ほう</sup>片方の目が不自由になりました。金峰山の射た材木の矢は西岳の<sup>かた</sup>肩にあたりました。そのため、西岳は今でも<sup>かたむ</sup>傾いていると言われています。

さて、いちき串木野市の<sup>せり が の</sup>芹ヶ野に金があることを教えてくれたのは、金峰山の神様だと言われています。金峰山の神様が牛の姿に化けて、串木野まで来て、ここには金が埋まっているぞと教えたそうです。



## 【はてな？】

なぜ、冠岳と金峰山はけんかをしたりけんかがおさまった後は、芹ヶ野に金があることを教えたりしたのでしょうか。



けんかは、それぞれの山にいる修験集団同士の勢力争いのことだと考えられています。けんかがおさまった後に金峰山の神様が、芹ヶ野に金があることを教えてくれたのは、いちき串木野市の麓集落に住んでいた奥田修験が、金峰山からやってきたことと関係していると考えられています。

## 26 やんぶし (山伏) 松

やんぶし (山伏) というのは修験者のことで、奥深い山できびしい修行をして、里に下りてきて、人々の病気などをなおしたり、占いをしたりする人のことです。

生福の西岳登山道路と別れるところを過ぎて冠岳に向かい、道路の第一カーブの左の崖の上にやんぶしのお墓があります。



昔、生福の里に山賊が住んでいました。この山賊たちは、遠見ヶ岡から見はりをしていて、街道を通る旅人を殺しては、お金や大事な物を取り上げていました。遠見ヶ岡というのは、今の生冠中学校の東の方にある小高い岡で、生福大六野集落の南側にあります。この岡の少し東北の方に、県道 39 号、市比野樋脇線の道路をはさんだ所に、小高い岡があります。その頂上に傘松の老木が生い茂ってました。この松を村人たちはやんぶし松と呼んでいました。

山賊たちは、仲間をこのやんぶし松の近くに隠しておいて、お互いに連絡しあいました。彼らは、お金を持っていそうな旅人が来ると、「肥え松」、あまりお金のない貧乏そうな旅人が通ると「やせ松」と言って、合図をおくり、この辺りで旅人を襲っていました。

ある日のこと、市比野から串木野へ用事すませた帰り道に、1人の虚無僧が通りかかりました。虚無僧というのは深い編み笠をかぶり、絹の布の小袖に、帯をしめ、首に袈裟 (お坊さんの衣) をかけて刀をさし、尺八 (竹で作られた笛) を吹き、お金をもらって国々をまわっていたお坊さんのことです。遠見ヶ岡から、やんぶし松の方へ、「肥え松」という連絡がありました。そのため、かわいそうに虚無僧は殺され、お金をうばわれてしまいました。この虚無僧には、年老いた母がありました。風の便りに息子の悲しい知らせを耳にした母は、せめて、その死んだところにお墓を建ててやりたいと、年老いた身で、重い墓石を背負って、遠くか



らはるばるやってきました。

しかし、やんぶし松の付近で、とうとう力つき、亡くなってしまいました。村人たちは、その老母の話<sup>ろうぼ</sup>を聞き、我がことのように悲しみ、老母が運んできたお墓を建ててやりました。このお墓は、県道脇に今もひっそり、立っています。

その墓石には「實性法印菩提也<sup>じっしょうほういんぼだいなり</sup>」ときざまれています。「實性法印という山伏<sup>やんぶし</sup>があこの世の極楽に行くように供養します」という意味です。殺されたのは虚無僧ではなく、山伏だったのでしょ。やんぶし松は、今はやせた松ですが、前に生えていた松は、木のまわりが八尺（約2 m 40cm）ぐらいの大きな松だったそうです。江戸時代中期のころの話だろうといわれています。

## 【はてな？】

なぜ、村人は、殺された所をやんぶし松と呼んでいるのでしょうか。

それは、その旅人が、虚無僧姿はしているけれども山伏（修験者）であったからだと思います。お墓に書いてある文字からも山伏ということが分かります。

山伏が旅をするということは、命の危険をともなうものでした。

昔は、旅は異界（異なった世界）におもむく、命がけのものだったのです。命をかけての修行だったと考えてよいでしょう。昔から「かわいい子には旅をさせよ」と言われていますが、困難を乗り越えさせることで子供は立派になってくれるという願いの意味です。



## 27 お光<sup>みつ</sup>のがたり

大里のA家では、現在でも、お日待<sup>ひまち</sup>を行っています。その理由については次のような伝承<sup>でんしょう</sup>が残されています。お日待というのは、神や仏あるいは霊をなぐさめるために一夜を過ごし、夜明けを待つという行事のことです。



### 亡霊に髪の毛を引きずられる

藩政時代、天草（現在の熊本県天草島）から、A家に「ロクッドン（六部殿 六十六部のことで、全国の寺や神社をまわり、法華経<sup>ほっけきょう</sup>などのお経<sup>きょう</sup>を写したものをおさめてまわる人）」が

やってきました。彼は、鞍（馬の上に人を乗せる道具）作りの職人として優れていたのです。A家では、早速雇い入れることにしました。馬小屋を仕事場にしながら数日のあいだ泊まるつもりです。A家の主人は、その職人を厚くもてなし、20歳に手の届こうとする美しい黒髪の下女（めしつかいとして働く女）、お光が骨身をおしまないで、彼の身の回りを見ていました。



その日の鞍作りの仕事がすむと、その職人は毎夜、人々が寝静まった頃、倉に集まった主人やその家族、お光たちに仏の心や浄土真宗という宗教をつくって広めた親鸞聖人というえらいお坊さんの話をし、人の歩いて行かなければならない道を説いていました。実は、この六部は、鞍作りに変装した隠れ念仏の信者であったのです。隠れ念仏というのは、薩摩の国で禁止していた一向宗（浄土真宗）のことです。南無阿弥陀仏となえて、亡くなってからあの世の極楽浄土という良いところへ行く願いを薩摩藩は禁じたのです。鞍作りは、肥後の国（今の熊本県）から薩摩に秘かに入りこみ一向宗を広めることにつとめていたのです。薩摩藩は、お百姓さんが、一向宗などを介して団結し、百姓一揆を起こすことを恐れていました。

A家の人たちは、一家そろって彼の仏の話聞くうち、薩摩藩がきびしく一向宗を禁止していることも忘れていました。仏の話喜び、ひそかに倉の中で「南無阿弥陀仏」を唱えていました。

鞍作りの仕事も終わり、いよいよ彼が旅立つ日がやってきました。その日、家の人々は、門まで見送りに出ました。すると、一瞬、主人が、家の中に引き返しました。なんと、刀を持ち出してくるではありませんか。もしも、このことが薩摩藩の役人に聞こえたら、A家はつぶされてしまうという恐れを感じたのです。薩摩藩は、隠れ念仏をきびしく取りしまるとはいっても、農民や漁民、町民に対しては、寛大な面もありました。ただ、支配階級である武士に対しては、隠れ念仏信者は牢屋に入れるか、お家取りつぶしになることが多かったのです。

鞍作りは、ただならぬ主人の気配を感じ、懸命に逃げまわりました。そして、丸い桶の中に身をかくしました。主人は、家のものに手伝わせて行方を追ひ、くまなく探しました。お光は垣根の下でおびえていました。鞍作りは、丸い桶のふたをそっと開け、「助けてくれ」と両手を合わせながら、お光に切なくお願いしました。しかし、主人に問いつめられたお光は、身を引きさかれる思いで、桶の方を指さしました。すると、とっさに走り寄って、ふたを取った主人は、桶のふちに爪をかけ、しがみついている鞍作りを一刀のもとに切り殺しました。死体を桶の外に引きずり出しましたが、爪だけは生へのこだわりを示すように、桶のふちにくっついたままはなれません。

それから数日がたちました。主人が外出して留守の夜中、門の外から、「お光」「お光」と呼ぶ声がします。お光は、てっきり主人が帰ってきたのだと思って門を開けました。ところが暗闇の中から亡霊がニューと出て来て、お光の後ろ髪を引きずり、瀬脇海岸の一ツ瀬まで

連れ出しました。

一ツ瀬というのは、大潮の干潮の時、海の上から1mぐらいの高さに見える三角形の岩のことです。小潮の時は干潮時でも波がただよい、姿を見せません。翌朝、A家からその瀬まで赤い血と白い血が点々と続き、瀬の岩の上にはお光の髪の毛と爪がきちんとそろえてありました。途中、「イガワンサカ（井川の坂 井戸がある坂のこと）」には、お光の爪が残っていたと言われていました。よほど恐い思いをしながら引きずられて行ったのでしょう。それは、底冷えのする霜月（旧暦11月）27日のことでした。



### 怨霊をなぐさめる

お光の死後、A家には災いが続きました。主人は、鞍作りとお光の怨霊（うらみをもって死んでいった霊）が成仏出来ない（あの世に行っても仏になれない）のではないかと、A家一族を集めて相談し、供養といって霊をなぐさめる行事をすることになりました。

その法要（祈って霊をなぐさめる仏教の行事）は、真夜中の2時、話をしないように木の葉を口にくわえ、一人一人通らない松林を過ぎ、一ツ瀬の上に、1年分の食料を持ってお参りに行きます。その時、振り返れば怨霊があらわれると言われていました。無言で拝んだA家の主人は、後ろを振り返らないで、急ぐようにして引き返します。

お光は、日置の帆ノ港（現在の日置市日置帆港）のB家の生まれでした。お光が、のろい殺されてから、不思議なことにB家でも不幸が続きました。そのため、B家からも、霜月27日の法要に参加するようになりました。それ以後、B家でも不幸はなくなったということです。

現在でも、お日待といって、旧暦11月27日に、A家一族の人たちが集まって供養しています。長い間、供養を続けたところ、A家では不幸がなくなり、家が栄えていきました。その夜は眠らないで、料理を食べたり、お酒を飲んだりして一晩中語り明かすのです。一晩中、眠らないということは、大変な苦しい修行です。こうすることで、亡くなった人の霊を慰めるのですが、一族の団結にもつながります。

法要があるお日待の日は、赤飯を作りますが、赤飯のことを「アカゴハン（赤御飯）」あるいは「アカンメシ（赤の飯）」といいます。お日待の日に、床の間に供える御供（おそなえ）の一つです。

床の間に上げるのは、先祖神とお光、鞍作りの霊に供える意味があります。

当日の料理の、おすましに入っている餅は「星の餅」といいます。お日、すなわち、太陽をあらわすのでしょう。太陽も星の一つです。この星の餅は、2つの大きな陶器製の椀に365個、半紙を底に敷いて入れ、床の間に供えます。

焼酎の入った3枚の笹の葉を刺した2つの爛瓶も供えます。

お日待の料理は、「アカンメシ」、星の餅の入った「おすまし」、「けんちんじる」、「ひじき

のため、「なます」、大根や人参、里芋のなどの入った「お煮染め」などです。

お日待のときはA家7戸の一族だけでなく池の原（イケンハイ）のA家小作人（田や畑を借りて農業をしている人）が全部、夕方に集まりました。その日は、米の上納（田畑を貸してくれている家に、米などをおさめること）の日でもありました。

「アカンメシ」は近くの人たちにもふるまわれました。不斷草の葉を手にして、「アカンメシ」を入れてもらいました。これを「アカンメシモロ（赤飯もらい）」と言いました。ほかに白菜、キャベツ、桑の枯れ葉を持ってくる人もいました。このことを、A家は「お布施（人に物をほどこしめぐんでやること）」と考えていたようです。子供たちも行儀良く並んで待っていました。上納の米は馬に背負わせてやってきました。

上納に来た人たちは、庭に敷いた筵（わらで編んだ敷きもの）に座って、ご馳走を食べました。A家一族の人たちには家の座敷に上がってもらい、高膳（高くしてある膳）にご馳走を載せてふるまわれました。高膳は、1人につき3つそなえられ、それを「一の膳」、「二の膳」、「三の膳」といいます。

当日の夜は、岡登りといって、おにぎりを41個準備しました。大人たちは焼酎も飲みました。

午前2時ごろになると、主人をはじめ数人のA家の人たちが「ハイ」と言って座を立ち、お光が亡くなった一ツ瀬に参るため、岡に登って行きました。金物はいけないというので金属のついた羽織は脱ぎました。鞍作りが、金属製の刀で切られたからでしょうか。

岡に上がって行く時は、下げ重（食べ物を入れた重ねた箱で、それを下げるようにしたもの）を持って行くことになっています。中には、米（1升5合）・塩・焼酎を入れました。それは、女の人たちが準備しました。それが出来たら「準備が出来ました」と男の人たちに伝えます。女性は岡に登ってはいけないというので家で待っています。

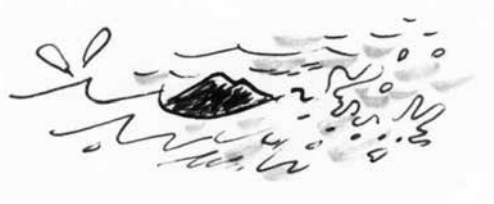
岡に向かう時は、白い着物を着て、話をしてはいけません。岡の上では、10数人が落ち葉で火を焚いて暖まります。そこでは、握り飯やナマスを食べます。集落の人たちは、足の音が聞こえたら「Aどん（殿）が岡に登られる」と言って、家の中では、さわいだりしないで、静かにしています。

いっときして、火をたいている主人が、お光が身投げした（あるいは殺された）「一ツ瀬」に「アカンメシ」と「生米」、2つの爛瓶を持って向かいます。

「一ツ瀬」に着いたら、持ってきたものを供えるのですが、生米は葉っぱにのせ、焼酎は瀬に、上からかけます。そして、海の方に向かって、手を合わせて声を出さずに拝みます。その後、帰る時は、後ろを振り向かないようにします。亡霊に呼び止められるからです。

「一ツ瀬」に向かって行く時は、波の音がするので容易に行けませんが、帰りは暗くて、皆のいるところまでたどりつくのは大変です。

火を焚いているところでは、皆が「アカンメシ」をもらって食べます。食べ終わるころは、空が白々として夜が明けてくるものでした。A家のお日待では、日の出を拝むしきたりはあ



りません。

家に帰ったら、女の人たちが準備していた「盆の料理」を食べます。

## A家では、今でも門は作らない

A家には今でも、門はありません。それは、門の外から、亡霊がお光の後ろ髪を引いて一ツ瀬まで連れ出したからです。門が不幸を呼んだと考えられているのです。A家では、代々門は作らないことになっています。

### 【はてな？】

なぜ、一向宗（浄土真宗）の鞍作りが殺されたのでしょうか。



それは、話にもあるように、薩摩藩では、明治9年に信仰の自由令が出るまで、一向宗

は禁止されていました。しかし、人々は隠れて信じていました。それを「隠れ念仏」といいます。農民や漁民は、謝ればゆるされることがありましたが、武士が捕まったらさあ、大変です。牢屋に入れられるか、家が取り潰され薩摩藩から給料をもらえなくなるのです。

なぜ、お光は亡霊に殺されたのでしょうか。

それは、鞍作りが殺された原因が、お光が主人に居場所を教えたことによるもので、そして、刀で切られ、悔しい思いをして亡くなった鞍作りが怨霊となりたたったからです。たたるといのは、殺した人に、害を与えたりして復讐をすることです。A家に対するたたりです。

A家にはうらみがないはずなのに、なぜお光の霊がたたるのでしょうか。

これは、この一向宗信者である鞍作りとお光の霊が、同じような怨霊となっている話ですが、海で亡くなった磯女いそおんなの話を取り入れ、ぞっとするような怖い話になっています。磯女は船幽霊ふねゆうの一つで、瀬脇海岸にはよく上がってくるといいます。この磯女との結びつきは、聞き手に恐怖感きょうふかん（恐ろしく感じること）を与えるように、また、面白みが出るように後の時代の人たちが作りかえたと思われます。市来は、港があり交易も盛んでしたので、九州北部の磯女の幽霊の話が伝わったのでしょう。

## 28 剣道の達人 庵者と左衛門

江戸時代、浅山一伝流あさやまいちでんりゅうの達人である庵者あんじゃと左衛門ざえもんという人が安茶あんぢやにいました。大きな道場どうじょうを作り、24人もの弟子がいました。そこには、よく道場破りどうじょうやぶが来ました。与左衛門に相手が

打ちこんでいても、彼は、天井にひょいと飛び上がり、手に持った六尺棒で、すかさず打ちかかり、叩きのめしてしまいました。道場破りは次から次へとやってきます。山伏姿をした六部（六十六部のことで、全国の寺や神社をまわり、法華経などのお経を写したものをおさめてまわる人）もやってきました。いかにも強そうな格好をしていましたが、ことごとく与左衛門に打ち殺されてしまいました。与左衛門は、負けて亡くなった人のためにお墓を作り、丁寧に弔いました。



彼の高弟（弟子のなかでもっとも優れた人）に今村久左衛門という強い剣道の達人がいました。その子、今村庄左衛門も父に劣らない腕前で、明治10年の西南戦争に行き、田原坂で勇ましく戦い、官軍（政府の軍隊）を悩ませたそうです。

与左衛門のお墓は、現在安茶にあります。安茶は、「庵者」とも書かれました。土地の人が与左衛門の腕を誇り、その名をつけ、それがいつのまにか安茶となったともいわれています。

## 【はてな？】

なぜ、与左衛門は、打ち負かして亡くなった人のお墓を作ったのでしょうか。

それは、負けて残念な思いで亡くなった人の霊をなくさめるためです。そうすると、その

霊が極楽に行き、与左衛門をうらむどころか、逆に守ってくれる霊になるのです。



## 29 太刀割石

昔、羽島土川の岩下家に山伏（修験者）がやってきました。そのとき、山伏に悪口を言いましたところ、山伏は大変怒って、ほら貝を吹きました。そのほら貝の呪術で、岩下家で飼っていた子馬の足が折れました。怒った岩下家の主人は刀を抜いて追いかけてきました。しかし、峠付近にさしかかるところで、その姿を見失ってしまいました。武士たる者、いっ



たん抜いた刀を何もせず<sup>さ</sup>に鞘<sup>さや</sup>に納<sup>おさ</sup>めるとは不<sup>ふ</sup>名<sup>めい</sup>譽<sup>よ</sup>なこと。主人はそこにある石<sup>いし</sup>めがけて、気<sup>き</sup>合<sup>あ</sup>いを入れて切り割<sup>わ</sup>りました。その石<sup>いし</sup>を太刀割石<sup>たてわりいし</sup>と人々は呼<sup>よ</sup>んでいます。

なぜ、山伏<sup>さんぶつ</sup>がほら貝<sup>ほらかい</sup>を吹<sup>ふ</sup>いたら、子馬<sup>こま</sup>の足<sup>あし</sup>が折<sup>お</sup>れたのでしょうか。

それは、山伏<sup>さんぶつ</sup>のほら貝<sup>ほらかい</sup>の音<sup>ね</sup>に呪術<sup>じゆじゆつ</sup>の力<sup>ちから</sup>があったと考<sup>かん</sup>えられていたからです。ほら貝<sup>ほらかい</sup>を一つ鳴<sup>な</sup>らすのは「ヒトツゲ（一つ貝）」といっ<sup>こ</sup>て恐<sup>おそ</sup>がられました。この「ヒトツゲ」の話<sup>わ</sup>は照島<sup>てうしま</sup>でも語<sup>かた</sup>られています。特に、山伏<sup>さんぶつ</sup>が逆<sup>さか</sup>貝<sup>かい</sup>を吹<sup>ふ</sup>く（ほら貝<sup>ほらかい</sup>を逆<sup>さか</sup>にして吹<sup>ふ</sup>くこと）と火事<sup>かじ</sup>になったとい<sup>い</sup>う話<sup>わ</sup>が各地<sup>あちこち</sup>に残<sup>のこ</sup>っています。山伏<sup>さんぶつ</sup>の仲間<sup>なかま</sup>たちは、ほら貝<sup>ほらかい</sup>の音<sup>ね</sup>で話<sup>わ</sup>をしたともい<sup>い</sup>われています。

## 30 冠岳<sup>かむか</sup>のウヘッ（大蛇<sup>だいじや</sup>）



冠岳<sup>かむか</sup>には大蛇<sup>だいじや</sup>を見たとい<sup>い</sup>う話<sup>わ</sup>が多いです。

### 胴体<sup>どうたい</sup>の直径<sup>ちうけい</sup>が男<sup>おとこ</sup>の太股<sup>たふ</sup>ほどの大<sup>おほ</sup>きさのウヘッ（大蛇<sup>だいじや</sup>）

平成<sup>へいせい</sup>10年代<sup>だい</sup>半ば<sup>はん</sup>ごろの話<sup>わ</sup>ですが、野元<sup>のもと</sup>に住<sup>す</sup>む男性<sup>おとこ</sup>が、ハナシ（めじろ）を捕<sup>と</sup>るため<sup>ため</sup>に鳥かご<sup>とりかご</sup>を持<sup>も</sup>って鎮国寺<sup>ちんこくじ</sup>裏<sup>うら</sup>、西岳<sup>にしだけ</sup>下<sup>した</sup>の奥<sup>おく</sup>深<sup>ふか</sup>い山<sup>やま</sup>に入<sup>い</sup>っていきま<sup>い</sup>した。そこ<sup>そこ</sup>に、胴体<sup>どうたい</sup>の直<sup>ち</sup>径<sup>けい</sup>が男<sup>おとこ</sup>の太股<sup>たふ</sup>ほど<sup>ほど</sup>の大蛇<sup>だいじや</sup>が<sup>で</sup>出<sup>で</sup>て来<sup>き</sup>ました。恐<sup>おそ</sup>くな<sup>な</sup>った男<sup>おとこ</sup>性<sup>せい</sup>は、さっそ<sup>さ</sup>く、鳥かご<sup>とりかご</sup>を片<sup>かた</sup>づけて逃<sup>に</sup>げ帰<sup>かえ</sup>ったとい<sup>い</sup>うこと<sup>こと</sup>です。

### かま首<sup>かまくび</sup>を持<sup>も</sup>ち上<sup>あ</sup>げて睨<sup>にら</sup>んだウヘッ（大蛇<sup>だいじや</sup>）

これ<sup>これ</sup>も平成<sup>へいせい</sup>10年代<sup>だい</sup>の話<sup>わ</sup>です。薩摩川内市<sup>さつまがわうち</sup>の人<sup>ひと</sup>3人<sup>さん</sup>が、山野草<sup>さんやそう</sup>を取<sup>と</sup>りに、西岳<sup>にしだけ</sup>下<sup>した</sup>の山<sup>やま</sup>に入<sup>い</sup>っていきま<sup>い</sup>した。いっ<sup>い</sup>と<sup>と</sup>き<sup>き</sup>し<sup>し</sup>たら、近<sup>ちか</sup>く<sup>く</sup>でカサカサ<sup>かさかさ</sup>とい<sup>い</sup>う音<sup>ね</sup>が<sup>か</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>す。確<sup>たしか</sup>か3人<sup>さん</sup>で来<sup>き</sup>たの<sup>の</sup>です<sup>です</sup>が、誰<sup>たれ</sup>か山<sup>やま</sup>に入<sup>い</sup>っているの<sup>の</sup>だ<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>か<sup>か</sup>と思<sup>おも</sup>った瞬<sup>しゆん</sup>間<sup>かん</sup>、兎<sup>う</sup>が<sup>が</sup>び<sup>び</sup>ょ<sup>ょ</sup>ん<sup>ん</sup>び<sup>び</sup>ょ<sup>ょ</sup>ん<sup>ん</sup>と飛<sup>と</sup>んで逃<sup>に</sup>げて来<sup>き</sup>ました。そこ<sup>そこ</sup>に胴体<sup>どうたい</sup>が男<sup>おとこ</sup>の太股<sup>たふ</sup>ほど<sup>ほど</sup>の大蛇<sup>だいじや</sup>が<sup>か</sup>ま<sup>ま</sup>首<sup>くび</sup>を<sup>も</sup>ち<sup>あ</sup>げ、3人<sup>さん</sup>を睨<sup>にら</sup>んで<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>した。恐<sup>おそ</sup>ろ<sup>ろ</sup>しく<sup>く</sup>な<sup>な</sup>った3人<sup>さん</sup>は、急<sup>いそ</sup>いで逃<sup>に</sup>げ帰<sup>かえ</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。

### ウヘッ（大蛇<sup>だいじや</sup>）の骨<sup>ほね</sup>

ず<sup>ず</sup>っと昔<sup>むかし</sup>の話<sup>わ</sup>。大岩戸<sup>おおいわと</sup>の下<sup>した</sup>に猫<sup>ねこ</sup>の骨<sup>ほね</sup>ぐら<sup>ぐら</sup>い<sup>い</sup>の大<sup>おほ</sup>きさの肋骨<sup>りゅうぼつ</sup>を持<sup>も</sup>つウヘッ<sup>うへつ</sup>が死<sup>し</sup>んで骨<sup>ほね</sup>だけ<sup>だけ</sup>に<sup>に</sup>な<sup>な</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>た<sup>た</sup>とい<sup>い</sup>う話<sup>わ</sup>が<sup>か</sup>残<sup>のこ</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>す。

### しのめ<sup>しのめ</sup>が迫<sup>せま</sup>のウヘッ（大蛇<sup>だいじや</sup>）

昔<sup>むかし</sup>、ある人<sup>ひと</sup>が、つづら（カゴ<sup>かご</sup>を作<sup>つく</sup>るため<sup>ため</sup>の<sup>の</sup>か<sup>か</sup>づ<sup>づ</sup>ら）を取<sup>と</sup>りに、しのめ<sup>しのめ</sup>が迫<sup>せま</sup>に行<sup>い</sup>きま<sup>ま</sup>した。夢<sup>む</sup>中<sup>ちゆう</sup>にな<sup>な</sup>ってつづら<sup>つづら</sup>を取<sup>と</sup>って<sup>て</sup>い<sup>い</sup>ると藪<sup>やぶ</sup>の中<sup>なか</sup>でカサカサ<sup>かさかさ</sup>とい<sup>い</sup>う音<sup>ね</sup>が<sup>か</sup>し<sup>し</sup>ま<sup>ま</sup>した。じ<sup>じ</sup>っと<sup>と</sup>見<sup>み</sup>て<sup>て</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup><sup>と</sup>大<sup>おほ</sup>きな蛇<sup>へび</sup>が頭<sup>あたま</sup>をひ<sup>ひ</sup>ょ<sup>ょ</sup>こ<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>持<sup>も</sup>ち上<sup>あ</sup>げ<sup>げ</sup>ま<sup>ま</sup>した。恐<sup>おそ</sup>く<sup>く</sup>な<sup>な</sup>って急<sup>いそ</sup>いで逃<sup>に</sup>げ帰<sup>かえ</sup>った<sup>た</sup>とい<sup>い</sup>いま<sup>ま</sup>す。

## すんけん山のウヘツ（大蛇）

上名かん みょうの人が、すんけん山まきに薪を取りに行きました。そこに道を横切よこぎって大きな松の木のようなものが横たわっていました。よく見ると動くので岩陰いわかげに隠れ、石を投げました。石が当たったのでしょうか、ウヘツがヒョッコリ頭を持ち上げました。そして毒どくの雨を降らせたといいます。その人は、恐くなって一生懸命走って逃げ帰りました。その後、しばらくの間、仕事も出来ないほどおびえていたということです。

## メシゲを持っていくウヘツ（大蛇）

西岳うっ そうが、鬱蒼くらくらとして昼でも暗い森林しんりんにおおわれていたときの話です。材木神社ざいもくじんじやの下に炭釜すみ がまを持っていた人が、朝、炭釜のところに行ってみるとメシゲ（しゃもじ）が無くなっていました。しかも、これが毎朝のように起こるので不思議ふしぎに思っ、ある日、小屋の陰かげに隠れていました。すると大きなウヘツが出て来ました。そして、蛇かまは釜の上にあるメシゲをくわえて行ったということです。

以上、6つの例を上げましたが、まだまだウヘツの話を知っている人は多いでしょう。冠岳のある宗教関係の人の中には、実際に龍りゅうが玄関げんかんのところを通り過ぎていったのを見た、真剣しんけんに話される人もいます。霊山れいざんには、龍や大蛇の話はつきものです。龍や大蛇は水神の化身け（水神がこの世に蛇の姿であらわれたもの）といわれることもあります。冠岳の水は水田すい でん用水や飲用水として貴重きちゆうなものだったので、水分神（ミクマリノカミ）としてもうやまわれています。冠岳は、森林がうっそうとしているので、大きな蛇がいるのでしょう。それを水神としてあがめた信仰も残っているのです。

## 31 舟川の山姫

いちき串木野市川上舟川かわ かみ ふなかわに古寺（ふっでら）と呼ばれているところがあります。小字にはなっていませんが、土地の人には古寺（ふっでら）で通じています。今は山のようになっていますが、そのあたりは、ゆるやかな傾斜地（かたむいているところ）で戦時中は畑せんじちゆう はたけになっていました。その畑の一番上のあたりに、古寺があったのだそうです。いつ建立されたのかも分かりません。むかしは、そのそばの山に行くために、そこを通るときは恐ろしいものでした。夕方には、早く帰らないと山姫（山女ともいい妖怪ようかいの一つ）が出ると言われていたからです。





## 【はてな？】

どうして、山には山姫がいるという話が聞かれるのでしょうか。

山姫の話は、屋久島に多く残っています。

山姫は、つやのある洗い髪で、それを後ろへ

長くたらしめています。山姫が笑って、それにつられてこちらが笑うと血を吸われると言われていて、正月・五月・九月の山の神祭りの日に山に入ると山姫にあうなどとも言われています。妖怪の一つではありますが、もともとは山の神だったと考えられます。一般的に、山の神は女性であるといわれています。それにしても、川上の舟川に山姫の話が伝わっているというのは珍しいですね。



## 32 洗濯女

これは川上に住んでいるある方の体験談です。

昭和26年8月に、私は県の木炭講習会に参加しました。日置市東市来町の重平山で40日間、釜の作り方や炭の作り方などの講習がありました。東市来町の製炭業者や、日置郡郡内の木炭検査員と講習生が対象です。その山に、泊まり込んでいたのは、鹿児島県の講師と郡内検査員と講習生5人でした。



重平山は官山（国有林）で大木がしげり、夜などは気味が悪いくらいの山深いところでした。泊まり小屋のそばに小さな谷川が流れ、その向かいに炭釜がありました。炭釜は講習用に、岩手一号釜2基と薩摩式1基で、泊まり小屋のそばの釜は薩摩式でした。その薩摩式には火入れがしてあり、夜も交代で温度を計っていました。その晩、私は温度を計る当番になっていました。

夜中の11時頃、小屋には講師・検査員・講習生11人が泊まっていました。講習生の別府さんという人が、カンテラ（菜種油やロウソクで火をともした携帯用の照明具）に火をつけて勉強している以外は皆眠っています。外はうす暗い月夜でした。私は、外に出て、谷川中の石の上を渡りました。後から誰かが下駄の音をさせながら小屋から出て来ました。気をつけて見てみると谷川の石のところに来て、しゃがんで何かジャブジャブと洗濯を始めました。私は釜に着いて、置いてあったローソクに火をつけ、煙突の温度を計りました。

火を消して谷川にくと、まだ黒い着物を着た人が石の上で、ジャブジャブと洗濯をしています。黒い着物といえば講師の人と、同じ講習生の二人しかいなかったと思い、この夜中に何を洗っているのだろうと思いました。洗濯している人に、石を占領されているので、石

の下に生えていた木につかまりながら、やっと谷川を渡りました。何も声をかけませんでした。向こうも無言です。

小屋に帰ってもジャブジャブと音がしていましたが、しばらくして、音が止まりました。しかし、誰も帰ってきません。不思議に思って起きていた別府さんに「私が出ていったのを知っていましたか。」と聞くと、「はい、知っていましたよ。」との答え。「私の中から誰か出て来たでしょう」というと、「いや、誰も出て行きませんよ。」と言います。「私の中から下駄をはいた人がついてきて、谷川でジャブジャブと洗濯をしていたんですがね、私はそのそばをやっとよけて通って来たんです。」という、「そんな馬鹿な、そんなら今夜泊まったのは11人だったから数えてごらん。」という。数えてみると11人皆います。

明るる朝、起きた皆が「お前たちは昨夜、何か言っていたようだが、何のことだ。」と聞きました。皆、私と別府さんの話を、目を覚まして聞いていたのです。

昼間になると東市来じゅうの製炭者が、講習の作業にやって来ました。たちまちその話が皆に広まりました。私は2～3日して高山の農協支所に、食料の買い出しに行きました。すると農協職員の人たちが「重平山には洗濯女が出たそうだね。」といました。いつの間にか洗濯女になっていました。それにしても不思議な出来事でありました。

## 【はてな？】

なぜ、奥深い山に洗濯女がいるのでしょうか。ヨーロッパでは、洗濯を仕事とする女の人が出て、それを洗濯女といいます。日本では、あまり聞きませんが、日本各地では、河童あるいは妖怪の一つとされています。お産で亡くなった女性が、山の中で洗濯をしていたという話が聞かれます。しかし、東市来の山に洗濯女がいたという話も珍しいです。



## 33 又又の仇討ち

市来に伝わるお話ですが、あるところで、おばあちゃんが家に帰ってきたら、台所に狸が入り、ハガマ（ご飯をたく鉄でできた道具）の蓋を開けて、ご飯を食べていました。「おや、またお前か」と叫んで、狸が出られないように入口の戸を閉めました。



狸は「しまった」と思いましたが、もう逃げられません。「そうだ」と考えてワラウッゴロ

(藁打ち五郎 藁を打つ棒のこと) に化けました。そして土間のすみに転がりました。

おばあちゃんは「はれ、どこへ行ったのだろう」と見回していたら、「ははん」と狸の化けたワラウッゴロに気づきました。しかし、知らんふりして「すばしい奴じゃ、どこからか逃げたもんじゃ、仕方がないから藁でも打とうか。」と言って、ワラウッゴロを握り、藁をとって庭の石のそばに行きました。そうして藁は打たずに、思いっきり石を叩きました。「あいたー」と言って狸は、一目散に逃げました。

何日かたって、おばあちゃんは、おじいちゃんと二人で、餅をついていました。そこへ、越中富山（富山県）の薬売りが来ました。初めて見る若い薬売りでした。おじいちゃんが「はじめてだな」と言いますと、薬売りは「今度、新しく来た薬売りです。よろしく願います。」と言いました。「餅つきは年寄りには大変でしょう。私が手伝いましょうか？」と言いました。そして手伝いはじめました。おばあ



ちゃんは、「手マゼ」（臼で餅をつくとき、平等につかれるように蒸したもち米を手でまぜること）をしていました。薬売りは杵を振り上げて餅をつきます。おばあちゃんが臼の中に手を入れた時、薬売りはおばあちゃんの手を目がけて、思いっきり振り下ろしました。「あいたっ」と叫んで、おばあちゃんは手を上げてびっくりかえりました。「ざまあみろ」と言って薬売りは逃げました。それはあの狸でした。

おじいちゃんは怒って、「ワナ」をかけて狸を獲ろうと考え仕掛けましたところ、狸がワナにかかりました。そして狸の手も足も一緒にしばって、土間の上に吊るしました。狸は「おじいちゃん、もう悪い事はしません。どうか、許して下さい。はなして下さい」と何べんも頼みました。しかし「うんにゃ（いいや）、もう許さん。今夜、狸汁して食ってやる。」と言って許してくれません。狸は手も足も縛られているので、化ける事も出来ません。そこで考えました。そして、「許してくれたらおじいちゃんに、お金をいっぱいあげます。」と言いました。おじいちゃんは「だまされるもんか、明日の朝、木の葉に変わるようなお金なんかいらん。」と言いました。狸は「いや、木の葉なんかではありません。本当のお金です。実はこの間、分限者どん（お金持ち）の家に食べ物を盗みに入った時、ゼン棚（お膳や椀などをしまっておく棚）の中に大きな袋を見つけました。何が入っているのか開けてみようとした時、誰か来るような気がしたので、そのまま穴の中に持って帰り、開けてみたら食べ物ではなくお金でした。狸は食べ物以外のものはいりません。おじいちゃんに全部上げますから放して下さい。」と頼みました。それでもおじいちゃんは信用しません。「おじいちゃんが信用しないのならこうしましょう。まず私の足だけを解いて、手は縛られたままで、腰にヒモをつけて、おじいちゃんはそのヒモを引っ張って、私の後からついて来て下さい。」と言いました。「それならいいだろう。」とおじいちゃんも納得して、吊るした狸を土間（家入口で、地面のままになっているところ）に下ろし足を解いて、ヒモを腰に巻きつけその先を握って、狸の後か

らついて行きました。

穴のところにやってきました。その穴は、狸は入れても人間は入れないような小さな穴です。「おじいちゃんはここで待っていて下さい。」と、狸は穴の中に入って行きました。しばらくして出て来て「おじいちゃん、手を解いてくれないとお金を持ってこれないよ。」と言って、手を差し出しました。「それもそうだな。」と、手を解いてやりました。しばらくしてまた狸は、穴の中から「おじいちゃん、ここまで持って来たけど、重いから手を差し出して」と言いました。おじいちゃんは「そうか。」と言って穴の中へ、手を差し出しました。

この時とばかり、狸はおじいちゃんが握っていたヒモで、おじいちゃんの両手をグルグル巻きにして、穴の中へ引っ張り始めました。「こら、何をする。」と言いながらもズルズルと引っ張られ、頭も穴の中へ入ってしまいました。「苦しい、こら、助けてくれ、放してくれ。」とおじいちゃんは何べんも頼みましたが、狸は「うんにゃ、許さん、今夜人間汁にして食ってやる。」と言ったそうです。

## 【はてな？】

狸は本当に化けるのでしょうか。

狸にまつわる話は、滑稽な話が多いのですが、化けて人を死なせるという話があります。この話のおじいちゃんは、大丈夫だったのでしょ



## 34 安茶ヶ原のキツネ

### 男の子に化けたキツネ

安茶ヶ原の源助どんは馬に薪をウせて(背負わせて)、島平に売りに行きました。そして新しいサバを2匹買って、帰路につきました。まだ明るい夕方でした。

暗くならないうちに早く家に帰ろうと思った源助どんは、馬を引き急いでいました。(牛は後ろから追うようにして、綱を引ますが、馬は前方で手綱をひきます)

一方、安茶ヶ原には、人を化かしたり、盗んだりする、悪いキツネがいました。「何か、よい獲物はないかな」と、下の道を見ていました。すると、大好きな魚の匂いがしてきました。「どこかな？」と鼻をピクピクさせていると、馬を引いた人がきます。近づいてみました。案



の定、匂いは馬の鞍の上からでした。「馬の上は高いから、盗るのは難しい。よし、知恵を働かせて人間をだまし、馬の上に乗って盗ろう。」と考えました。

源助どんは、八房川沿いのビュ（別府）の土手の中ほどに來ると、前に男の子がしゃがんで、泣いているのを見つけました。そばに行って「こらこら、コゲン（こんな）ところでどうしたのか？」と聞きますと、子供は「日が暮れると思って走っていたら、転んで足を痛めました。歩く事が出来ません。」と言って泣きます。かわいそうに思った源助どんは「どこまで行くのか。」



と聞きますと、「牛ノ江まで帰ります。」と答えました。「よしよし、おれは川上まで帰るのだから馬に乗せてあげよう。」と言って、男の子を抱き上げて馬の鞍の上に乗せてやりました。悪いキツネが男の子に化けていたのです。「しめしめ、この間抜けな人間が、魚のそばまで抱き上げて乗せてくれた。どら、ご馳走になろうか。」と小声で言いながら、魚を食べはじめました。

源助どんは、馬を引きながら牛ノ江まで來ました。「おい坊や、牛ノ江に來たよ。」と言いながら、後ろを見ると誰も乗っていません。「ありゃ」と言いながら、しばらくポカンとしていました。「あっ、そうか安茶ヶ原にはキツネがいると聞いていたが、あれはキツネだったのか、魚を持っていたからなあ、ほーら魚はない。おれはキツネにだまされたのか、畜生」と悔しがりました。キツネは馬の上で、魚を2匹ともたいらげて（食べてしまって）、「やっこらさ」と飛び降りて、逃げていったのです。

## 今度は、娘に化けたキツネ

何日かたって源助どんはまた、馬を引いて島平に薪を売りに行って、新しいサバを買って、鞍の上に魚を乗せて帰ってきます。キツネはまた、知恵を働かせました。

源助どんが馬を引いてビュの土手までくると、きれいな若い娘が腹をおさえて、うめいていました。「こらこら、娘さんどうなされた？」と声をかけると「腹が痛くなって歩けなくなりました。」「どこまで行きなされる。」と聞くと、「井手ンコラ（井手の河原）まで帰る所です。」と答えました。しかし、源助どんは、この間のことがあるので「ははん、また、この間のキツネだな、魚を持っているからなあ、もう、だまされんぞ。」と思いながら「そらいかな、それならこの馬に乗せて上げよう。」と言って、抱き上げて乗せてから、ヒモで手も足も鞍に縛りつけました。娘は驚いて「なぜ、手も足も縛るのですか。」と聞きました。「この馬はなあ、時々暴れるので、娘さんが落ちて怪我でもするといかんから、縛るのだよ。」と答えました。「そんなら、手だけはほどいて下さい。しっかりつかまえておりますから。」と頼みましたが、源助どんは「手をほどけば、魚をとって食えると思って言うんだな。」と考えてほどきません。

そうして源助どんは言いました。「娘さん、あなたはこの辺で見かけないべっぴんさんだが、

まさかキツネじゃなからうね。」と。娘は驚いた様子で「なぜですか。私は娘です。人間の娘です。」と言いました。「そんなら、あなたに聞くけど、人間の娘には、見た目には分からんけど、頭に角が生えていて、かねては頭の毛で隠しているけれど、嫁に行く時は、ひょっとして見えたらいかんので、角隠し（結婚式の時、花嫁がかぶる白い布かざり）というのをするんだが、あんたには角があるかね。」と。キツネの娘は考えました。「人間の娘には、角があるといったけど、何本あるのだろう、どこにあるのだろう。」と思いましたが、聞くわけにもいかなないので、両方の耳の上に2本つけました。そして「私にもここに角があります。」と言いました。源助どんが触ってみると、本当に短い角を2本、耳の上につけているではありませんか。源助どんは、ふきだしそうになるのをこらえて、「なるほど、角はあった。そんならもう一つ人間の娘はオッパイが4つあるけど、あんたには幾つあるかね。」と聞きました。キツネの娘はまた考え込みました。「人間の娘にはオッパイは、いったい幾つあるのだろう、源助どんは4つあると言うたけど、本当だろうか。だけどキツネも4つあるのだから、人間も4つだろう。」とあって、「私もオッパイは4つあります。」と答えました。源助どんは「そら、しっぽが出た。」と言いました。キツネの娘はドキッと、「そんな事はありません。しっぽは、ちゃんと着物の下に隠してあります。」と。源助どんは「ハッハッハ」と笑い、「化けん皮（化けの皮）がはげたね。」と言いました。するとどうでしょう。娘はだんだんキツネに変わり、馬の上に縛られているではありませんか。

## 良いことをしてやったと最後まで信じてやった源助どん

キツネは「助けて下さい。もう悪い事はしません。」と謝りますが、「うんにゃ、この前もお前は、子供に化けておれをだまくらかし、魚を盗った。このままお前をつれて帰って、キツネ汁にして食ってやる。」と聞きません。キツネはまた考えました。「私は悪いことをしました。だからもうどうなってもかまいません。しかし、家には年をとった母さんが、病気で寝ております。私が帰らないと、どんなに悲しむでしょう。この間も悪いとは思いましたが、あなたの魚を盗んで持って帰ったら、大変喜んでくれました。今日もまた、母さんを喜ばそうとしたことです。」と泣き出しました。

それを聞いた源助どんは、「何、母さんが病気なのか、そうか。」と言って少し考えていましたが、「よしよし、二度と悪い事をするな、そして母さんを大事にせえよ。」と言って、ヒモをといでやり、「これを一匹、母さんに持って行け」と、魚をくれてやりました。

キツネは魚をもらうと、一目さんに走り、見えない所にくると、「あの人間の間抜けが。おれに母さんなんかいるもんか。」と言いながら、「こりゃおいしい、こりゃおいしい」と魚を食べました。

源助どんは、「あんな畜生も、母さんを大事にす



るもんじゃ、魚を一匹くれてやったから、キツネの母さんが喜んで、食べてくれるだろう。」と、良いことをした気分です。帰って行きました。

### 【はてな？】

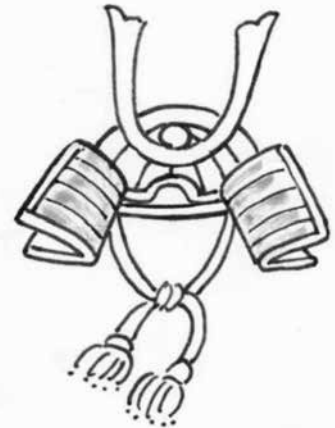
なぜ、源助どんは、キツネに最後までだまされたのでしょうか。

キツネは狸と違って、化けて人を殺すような民話はあまりありません。キツネのだまし方もうまいですね。キツネは稲荷信仰（農業や漁業、商業の神様）と結びついて、良いことをしてくれる民話もあります。源助どんは、ひょっとしたら、稲荷様の使いであると信じて、許してやれば、いつか良いことがあると信じていたのかもしれませんがね。



## 35 黒江嘉門介の怨霊

黒江嘉門介は、申木野氏5代、忠秋（ただあき、あるいはただとき）の家来で、侍大将であったと伝えられています。忠秋が、島津家5代貞久に申木野城の戦いで敗れたのは、興国3年（1342）のことといわれています。このとき、主君を知覧に逃がした後、身に多くの傷を負いながらも、「たぐいが坂」をたぐり上がって、袴田の、今の申木野小学校校門横にあった森までたどりつきました。ついに、無念のうちに力つき、命を落としてしまいました。「たぐいが坂」は「さくいが坂」とも呼ばれています。



嘉門介の霊は、怨霊となり、後々の人々にたたるようになりました。うっそうと茂った森の小枝を一本折っただけで不幸がおこったという人もいます。人々は、嘉門介の霊を荒神（死んで荒々しい神となった人の霊を祭った神）としてよく祀り、なぐさめてやりました。

### 【はてな？】

なぜ、残念な思いをして亡くなった人の霊は荒々しくたたるのでしょうか。

これは、たぐいが坂までたどりつきながら無



念にも亡くなった怨霊が、あの世からこの世の人を恨むからです。あの世からの復讐ふくしゅうなのかもしれません。







# 祭り編

# 1 いちき串木野市の祭りのようす

## (1) 春の祭り

### ア 打植祭

ガウンガウン祭といわれる打植祭(予祝祭)が野元の深田神社であります。祭日は旧暦の2月2日で、最近はその前後の日曜日に行われます。ここの牛は暴れ牛で、見物人に突っかかって行きます。牛がモガ(馬鋏)を引いたり、寝ころんだり、また、子供たちが木の枝のクワで、テチョ父親の足を引っかけて、テチョを倒すと豊作になるといいます。松葉の田植えがあります。(参照90ページへ)



代かきの様子 (ガウンガウン祭)

註 予祝祭 = 豊作を願って、稲作をする様子をまねて祝う行事。

荒川の松之尾神社(南方神社に合祀)でびょうびょう祭の(参照92ページへ)打植祭。ヤマという柴(椎の木)で泥をなすりつけたり、引き合ったり、牛を探して連れてくると、牛が暴れたり、代かきをしたあとで、模型の舟の中のモミをまきます。

註 合祀 = ある神社にほかの神社を一緒に祀ること。

打植祭の太郎太郎祭が羽島崎神社で行われます。祭日は旧暦の2月4日で、最近ではガウンガウン祭の次の日曜日に行われることが多いです。最初は、船持ちといって、漁業集落の5歳の男の子が父親と模型の舟を持って出て、境内を回って社殿に引っ込みます。その後、舟唄という唄を歌う人が20人ほど出てきて、境内を回って船持祝が終わります。

次に、打植祭がはじまります。牛が人気です。逃げまわる牛を連れてきて、境内を田に見立て、モガで耕したり、牛が地面に倒れたりします。5歳の男の子が松葉を苗の代わりにして田植えのマネをして打植祭が終わります。そして、夕方から5歳の男の子のお祝いがはじまり、昔はお客が300人から600人も集まって、大にぎわいになりました。料理にコガヤキ(卵が入ったカマボコみたいなもの、ハンペンともいい、甘い)やカマボコに、ガネンテンプラ(形がカニに似ている、ゴボウ・ニンジン・カライモのテンプラ)・煮しめ(大きく切った大根・ニンジン・コンブ・あげトウフなどの煮物)・ヒラ(飯椀より浅く直径が大きい漆椀に焼きサバを盛る)が出ます。農家と漁師のお祭りので、港の漁船には大漁旗が飾られて、にぎやかです。通りにはお面やスルメなどの出店がならび

ます。(参照 95 ページへ)

祭が簡素化されたのは、八房の八房神社の打植祭。ここは赤い面の牛が拝殿から鳥居まで行ったり来たりするだけです。別府の稲荷神社の打植祭では赤い面の牛が、やってきた小さい子供を追いかけたりします。昭和 50 年代 (1975) に行われなくなったのが大藪の伊多神社です。ここでは権兵衛をからかって、いたずらに作った落とし穴に落す行事がありました。

打植祭とは、予め豊作を祈って稲作に関する作業を模した祭りで、羽島・荒川・野元平江・大藪・八房・別府と 6 か所、薩摩川内市で 4 か所行われていて、いちき串木野市と薩摩川内市が打植祭の最も多い地域です。

## イ 浜競馬

4 月末頃、照島海岸で、農耕馬やポニー・サラブレッドが走ります。昭和 32 年 (1957)、荷馬車組合の花見で、馬の自慢から余興に競馬を始めたといわれています。平成 26 年は県内外からの参加があり約 80 頭出走しました。子どもの騎手がでたり、言うことを聞かず砂浜から海の中に入ったり、逆走する馬、馬から落ちる騎手などの姿に観客は大喜びです。



浜競馬

明治の末頃、3 月、照島では「馬叩き」という行事が行われていました。照島海岸にある馬頭観音詣りの馬を元気にするための行事で、ふんどし一つの浜の青年たちが長い竹竿で、馬頭観音から下りてくる馬を叩こうとします。すると、馬主は長い手綱をゆるめて馬を激しく走らせます。馬を追う青年は自分たちが危険になると思うと海の中へ逃げ、その間に馬は帰ります。そのようすをみて観衆は喜んだそうです。浜競馬の始まりは、それがもとになっていると考えられます。

また、市来でも、明治から大正にかけて湊地区の潟小路から日之出にかけての浜 (現在は埋立てられている) で競馬が行われていたことが記録に残っています。

## ウ まぐろフェスティバル

4月末の土・日、串木野漁港外港で行われる、マグロのイベントです。マグロラーメン・マグロ丼・マグロ船取り丼などの食や、マグロ販売・海の幸や野山の幸の販売などがあり、郷土芸能や踊りなども披露されます。30回になる県下に広く知られているイベントです。



マグロフェスティバルの様子

## (2) 夏の祭り

### ア 六月灯

鹿児島城下、新照院上山観音堂の灯籠上げから始まります。島津初代忠久・忠良・貴久・義弘の命日が6月に集まっていたので、6月に霊を弔う灯籠上げをしたのではと思われます。上町・下町は家の前に灯籠を立てました。安永(1772～1780)の頃、島津家25代当主重豪が花火を上げることを命じてから、はなやかになりました。いちき串木野市では長四角の灯籠に竹竿を真ん中に通している様子が田楽に似ている、「田楽灯籠」が多かったようです。昔は、菜種油を皿に入れて藺草の灯芯に火を灯していました。

六月灯は、市内各地で行われますが、代表的なものを紹介します。

照島の六月灯は、照島神社前のなぎさ公園を中心に店が並び、橋から神社まで灯籠、神社前には書や絵が大きな貼り板に飾られています。舞台では催しものが披露されます。

金山では、跨線橋を渡ると、長灯籠(道路の上を横切る長い灯籠)がアーチになり、角灯籠が金山神社の入口まで続いています。入口には店が並び、舞台では、小学生の石当節踊や虚無僧踊が出たり、歌が出たり、舞踊が出たりします。昭和3年(1928)、歌人と謝野晶子が鹿児島に行く途中に歌った「やみの中に灯ゆれて祭りあり 金山峠の夜の道かな」という石碑が神社にあります。古くからにぎわっていた様子が分かります。

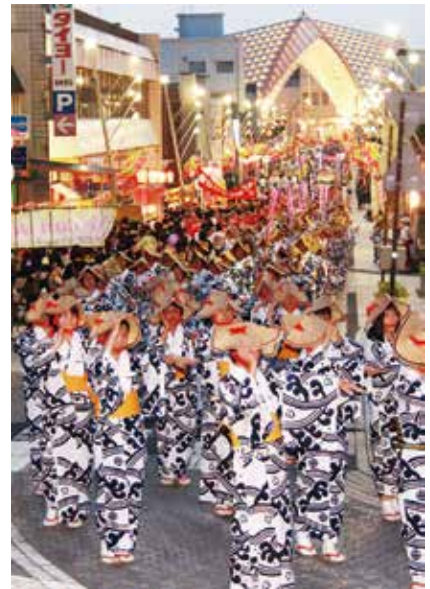
旭町ではロータリー近くを通行禁止にして、舞台を作り、串木野中学校などの吹奏楽や歌があります。出店もあり、長灯籠もあり、町の中でにぎわっています。

他に浜町や春日町、御霊神社、市来神社など市内各地で角灯籠を飾って、地域の人々の楽しみになっています。

## イ 串木野さのさ祭

串木野さのさは「かんかんのう節」からでたといわれています。坂本竜馬も長崎で「かんかんのう節」を歌い、<sup>かんかんのうど</sup>看々踊を踊ったと言われます。

サノサの歌は明治31年（1898年）頃、長崎から全国的に流行しました。「かんかんのう」踊りに<sup>はやし</sup>囃子を加えた「法界節（ホーカイぶし）」ができました。この頃は<sup>かどづ</sup>門付けといって、家々を回って歌ってお金や品物をもろう人がいました。その最初に歌うのが「サノサ節」で、花や歌舞伎の人気俳優や相撲取りの名前を歌っていました。サノサ節はその場にあわせて替え歌で歌うのが普通でした。



さのさ祭 市中流し

今から110年ほど前、明治22（1889）年からバショウカジキのはえ<sup>なかりょう</sup>縄漁が始まり、<sup>えき</sup>餌に生きたサバを使いました。はえ縄漁は長崎県<sup>つしま</sup>対馬・<sup>ごとう</sup>五島方面で盛んに行われ、帰りに寄る港は長崎県五島玉之浦でした。串木野の人たちは、そこで「五島サノサ節」を覚えました。昼間、バショウカジキを釣る、その<sup>えき</sup>餌のサバを夜に釣るのですが、昼間の疲れで眠いので、<sup>ねむけ</sup>眠気覚ましに「サノサ節」を交代で歌い、歌えなかった人が<sup>か</sup>ケツ巻き（カステラの中にアンが入っている）というお菓子を買って皆に食べさせるとい<sup>か</sup>賭けをしました。そこで、いろいろな<sup>か</sup>替え歌を作り歌いました。それで、「サノサ節」の歌詞は200ぐらいあります。いつの間にか、メロディーは別になり、串木野流の「サノサ節」の歌い方になりました。「五島サノサ」と同じ歌い方は「サノサ」という<sup>はやし</sup>囃子だけです。

漁師の若者は帰港後もそれぞれ集まっては歌を歌って競争していました。昭和の初め頃には自分たちのふるさとの歌となっていました。それが、昭和18、9（1943、4）年にNHKラジオで全国に放送され、昭和32（1957）年にはレコードにもなり、「串木野さのさ」として知られるようになりました。それに踊りの振り付けがなされ、「サノサ踊」ができました。その後、「串木野さのさ祭」が昭和46年に始まり、翌年さのさ踊が市中流しになりました。それから途切れることなく続いています。さのさ祭があるのは全国でも串木野だけです。

今は、7月末の土曜日・日曜日に行われます。前夜祭では、出店や、舞台での踊りや歌やダンスの<sup>ひろう</sup>披露があり、ゆかた姿の女の子や親子連れでにぎわいます。翌日、さのさ踊中心の<sup>しちゅう</sup>市中流しが始まります。多くの参加者が祭りを盛り上げます。

## ウ 祇園祭

祇園祭は7月末から8月初めに湊町で行われる祭りです。今は山（ダシ）が女山2台、男山2台の4台で、山の高さは5mを越えます。山の下には出し入れができる舞台があります。本祭の前の夜は前夜祭で、裸山といい、4台の山と神輿1基が並んで共演をします。裸山では余興があり、前夜祭を盛り上げます。



祇園祭 山の競演

註 余興 = 山の前で、踊りを踊ったり、歌を歌ったりする演芸。

祭り当日の引き手は大ぜいです。女山は「アー、イヤオー」といって、太鼓や拍子木、鉦を打ちます。男山は立ったまま「ハー ナイチョウ ナイチョウ。ナイチョウ カイモウ」などと叫んで、太鼓と拍子木を打ちます。女山も男山も三味線はお嫁さん姿のお姉さんが弾きます。近年はサマーフェスタと一緒に開催されており、国民宿舎周辺には、出店が並び、花火も上がります。昭和32年(1957)ごろまでは、漢林王囃子の行列があり、カンカンノウという踊がありました。

註 ナイチョウ カイモウ = 今のところ、どういう意味か不明

昭和2年(1927)頃、市来湊町の祇園山(ダシ)を買って、串木野大原町でも祇園祭を始めました。戦後は浜町や本町など4、5か所から祇園山が出ましたが、数年でとだえ、大原町の祇園山も昭和の末に行われなくなってしまいました。(参照98ページへ)

## エ 七夕踊

夏の祭りの中で代表的なもののひとつとして、大里の七夕踊があります。非常に大掛かりな祭りとして全国で知られています。鹿・虎・牛・鶴の作り物(張り子)の大きな動物が走りまわったり、暴れまわったりします。狩人が鉄砲や竹槍でしとめる様子や、狩人の会話がおもしろいのです。また、牛の尻を天高く突き



七夕踊 虎

上げる動作は、豪快です。作り物の最後に静かに鶴が登場します。そのうしろに琉球王行列、大名行列が続きます。大名行列の奴のバリン振りがバリンを投げ渡すのも見ものです。薙刀行列は一列に並んで長刀を振り回すしぐさをします。そして最後に太鼓踊が



登場します。鉦の人も太鼓の人も花笠をかぶっているのは珍しいです。踊りの間、太鼓を叩くのは2分の1ほどで、まるで舞いを踊っているみたいです。（参照 102 ページへ）

### オ 羽島南方神社の太鼓踊

羽島南方神社の太鼓踊は8月24日の近い日曜日に行われます。珍しいのは神事が終わってから、アラマキ投げという、猪の肉が入ったワラツトを木の枝に投げかける行事があることです。これは他の地域では見られません。（参照 111 ページへ）

### カ 川上踊

川上踊は8月最後の日曜日に行われます。上組と下組に分かれて踊ります。上と下の上手な人が踊ってみせます。山田楽を踊りますが、山田楽という太鼓踊は川上から南ではみられません。（参照 114 ページへ）

## (3) 秋の祭り

### ア 虫追踊

大里の虫追踊は9月23日ごろ行われます。鉦の音と太鼓がよく響きあう踊りです。そして、矢旗が緑の稲田に映える踊りです。（参照 115 ページへ）

### イ ちかえて祭

ちかえて祭は西薩中核工業団地で、10月末の土・日に商工・農林・水産業が合同で行うイベントです。市内の様々な食の紹介や水産イベント（魚のつかみ取り）・郷土芸能に歌や踊り、海上保安船の乗船体験など、毎年様々なイベントが開催されています。



ちかえて祭（夜の花火）

### ウ 照島神社秋の大祭

旧暦の9月9日には照島神社の秋の大祭、ほぜ祭・浜下りが行われ、天狗が登場します。（参照 126 ページへ）

## (4) 冬の祭り

### ア 恵比須祭り (元町)

1月10日に、元町公民館で神事を行った後、神輿が町内を一回りします。その時十字路や三叉路にさしかかると、榎でお祓いをします。参加した子供たちは榎のお守りをもって帰ります。ほかにも、十日恵比須といって、湊町の八坂神社でも神事が行われます。

恵比寿は事代主神のことで、釣り好きだったので、鯛と釣竿を持つ豊漁の恵比寿神となりました。大国主神は「大国」が「大黒」に読めるので、大黒天と結びき、打出の小槌を持って大きな袋を肩に担ぎ、俵の上に座っている福の神になりました。

県内では、十日恵比須といえば、漁業の恵比寿神を祭る日が1月10日です。ところが、大黒恵比寿は商業繁盛の神になりましたので、商業地区の元町の神になっています。そこで、1月10日に祭りが行われたのです。

### イ お伊勢祭 (浜町)

お伊勢祭とは、五穀豊穡や人々の幸せを祈って始められた祭だと考えられています。

元町と浜町は隣同士で、1月10日は元町の恵比須祭り、11日は浜町のお伊勢祭と続きます。元町は「恵比須祭」なのですが、お伊勢講の厨子を持ってきてお祓いをしてもらっています。もともとのお伊勢講があっ



お伊勢祭 榎神輿

たと考えられます。お伊勢祭(講)は県内では11日にする祭りです。浜町には各地区(昔の班)にお伊勢講があって、その伊勢の厨子(伊勢の神を入れる家型の置物)を公民館に持って行って、浜町全体で祭りをしています。これ以前は、班ごとに寄り合いをして講をしていたのでしょう。神事のあと、太鼓と賽銭箱を先頭に行列が回ります。賽銭を入れた人には、お餅をあげます。その後ろに榎神輿が町内を回ります。十文字の交差点に来ると、神輿を力いっぱい空へ投げ上げて、そのまま手を放します。神輿はドスンと地上にぶつかります。3回ほど神輿を落とします。昔は神輿に綱を付けて、神輿が空に上がったとき、綱を勢いよく引いて、地面にたたきつけたそうです。しかし、平成24年ごろから放り上げる神輿は止めました。

お伊勢祭でこのようなことをするのは県内でもあちこちに見られます。

公民館に着くと、ぜんざいが振る舞われます。それぞれの厨子には「1区お伊勢講」などと書いてあり、それぞれの地区の人は、また、厨子を持って帰ります。

羽島のお伊勢講は寛政12年(1800)からの記録が残っていて、会所(座元 当番の家)・

触れ人・料理などのことが簡単に書かれています。羽島でのお伊勢講ではノソ（星鮫＝フカコ）が出てきます。これは「イデフカ」といって、ゆでて、水でさらして酢味噌で食べるものです。

生福では、お伊勢講で簡単な食事が出てから夜も深まり、クジ引きをします。空くじが多いので当るまで4、5回引きます。クジに当たった人が次の会所になる決まりでした。当たった家にはすぐ連絡の人が行き、当番だった会所から厨子を持ち、石油缶をガンガン叩きながら行列をなして田の畦道を通っていくと、迎えに来た次の会所の人々と出会います。すると「蹴り合い」をして、どちらかを田の中に蹴り落とすことで、迎えの行事は終わります。そして厨子はようやく次の会所へ到着することになるのです。生福地区での、このような行事は、第二次世界大戦後には見られなくなりました。

## (5) そのほかの祭り（芸能）

### ア 棒踊

棒踊は県内至るところにありました。今は3分の1ぐらいに減っています。いちき串木野市内では昔は25か所以上で行われていましたが、今は6か所ほどです。数が多い理由は、棒踊は田踊とも言われており、稲が豊作になることを願って踊られたからです。



野元の虎とり

棒踊は奉納踊ですが、短すぎるので、棒踊を踊ったあとに、アトヤマというおもしろい踊りや劇や芝居などをします。野元に「虎取り踊」といって、人が中に入っている虎が出てくる芸能があります。和藤内が李踏天と虎退治をする物語です。今では、野元に棒踊は伝わっていませんが、これは棒踊のアトヤマだと言われています。

### イ いろいろな踊

虚無僧踊は女性の踊りで芹ヶ野と生福の上石野・下石野に伝わっています。虚無僧姿で白衣の男役と、紫の御高祖頭巾に黒衣着物姿の女役が2列になって踊ります。川内方面から伝わったと考えられています。同じ虚無僧踊でも、日置市日吉町から南は男性が踊る棒踊の虚無僧踊です。

石当節（せつとぶし）は金山の坑内で金鉱石を掘る様子などを歌にしています。石当節踊は石当（カナヅチ）でノミのビンタ（頭）を叩いて「キン キン」と音を立てて踊ります。小さくした鉱石をフゴ（竹のチリすくいみたいなもの）に入れ、それを金山テ

ゴ（ダッテゴ＝背負い籠）に入れて運ぶ様子や、選び出す踊りもあります。

相撲節踊は須賀集落の女性だけの踊りです。三味線・太鼓に合わせて、相撲甚句を歌い、相撲を取る所作をし、弓取りが登場します。

相撲甚句踊は本浦の青年が裸でまわし（ふんどし）に大漁旗の前垂れをし、歌に従い手を打ったり、円になって踊ります。中の1人が交代で輪の中心に来て歌います。最後の歌詞には「スズメがチュ カラスがカア」という、おもしろい歌詞があります。

土川には左官踊と棒踊があります。左官踊は壁を塗る場面が中心で、三味線・太鼓の伴奏で、土を足でこねるまねや投げるまねなど、おもしろおかしく演じます。棒踊は川内側の寄田瀬戸野にある馬頭観音（牛馬を守る観音）に旧6月18日に奉納していました。

ドンジ節踊は生福大六野集落の踊りで、これは家を建てる時に柱を乗せる石（土台）を置くところを3本の柱でヤグラを組んで、丸い柱状のドンジをつけて、それを上にあげては「ドシン」と落して土台を固める動きをします。歌に従って落とす動作を繰り返します。

これらの踊りは、いつ実施するという日程が決まっていますが、文化祭やイベントがあるときなどに実施している所が多いようです。そのほかに、荒川小学校は棒踊を、旭小学校は石当節と虚無僧踊を、川上小学校は棒踊を、運動会を中心に踊っています。



生福のドンジ節踊り

## 2 ガウンガウン祭—深田神社春祭に伴う芸能（田打） 鹿児島県指定無形民俗文化財（昭和37年10月24日指定）

### （1）ガウンガウン祭の由来

現在は「ガウンガウン祭」と言われているが、もともとは「ウブシナサー祭」とか「ウブスナドン祭」とか言われ、旧暦の2月2日に行われていました。これはここだけでなく、市内別府の稲何神社、八房神社の春祭も「ウブシナサー祭」と言われていました。「ガウンガウン祭」と



ガウンガウン祭

言われるのは、木の股<sup>また</sup>で作った<sup>くわ</sup>鋏、方言で「クワ」を幼児語で「クワン クワン」から「グワン グワン」となまり、「ガウン ガウン」となったのではないかとされています。木の股の鋏は子供たちが手にして、テチヨ（父親の古い言い方）の足を掛けて引き倒すことから、子供たちが手に入れたいものであったために、「クワ」が中心になった命名となったと考えられています。

「春祭」と言うのは、昔は「打植祭<sup>うちうえまつり</sup>」と言われていました。全国的には「田遊び」とも言います。「打植」と言うだけあって、祭の様子は田を打つことから始まります。簡単に言えば「田植え」のことです。神社の境内を田に見たて田植えの真似<sup>まね</sup>をし、稲作の豊作<sup>あらかじ</sup>を予め祈願する「予祝行事<sup>よしゆくぎょうじ</sup>」です。

もともと「深田神社」は深田にありましたが大洪水で流され、野元に移されました。

## (2) ガウンガウン祭の内容

### ア 祭の準備

当日は、社殿に真新しい注連繩<sup>しめなわ</sup>を張り、御幣<sup>ごへい</sup>の付いた竹竿を立てます。祭は、野元・平江・深田の各集落が年毎に輪番で担当し祭を主催します。平江が主催するときのみテチヨの妻役（太郎と次郎の母親役）のカカが登場します。

出演者は、父親役のテチヨとその息子役の太郎と次郎、それに母親役のカカ、そして牛役を勤める二人の青年です。出演者は衣装を整えながら、合間をみてテチヨと太郎・次郎はお互いの掛け言葉のやりとりの打ち合わせをします。この地域の方言でやりとりをします。表情は真剣そのものです。しかし、即興<sup>そつきょうてき</sup>的な台詞<sup>せりふ</sup>で観客の笑いを誘います。

### イ 祭の内容

ここに登場する牛は、深田神社の精霊<sup>しょうりょう</sup>でもあります。この精霊が神社の境内に植えられた稲の苗に活力を与え、秋の豊作を約束してくれるのです。祭り当日は、深田神社の境内を水田に見立て、その田んぼに畔<sup>みなくち</sup>や水口に設けられます。

神事が終ると、テチヨが大きな木の股<sup>くわ</sup>の鋏を担いで登場します。テチヨは、方言で独り言を言いながら水田の畔<sup>あぜ</sup>や水口に、水漏れがないかを確認したり、畔を塗<sup>ぬ</sup>ったりしながら田んぼをみてまわります。水口とは、水田に水を引く用水路の口のことです。水田にとって田の神が宿ると言われるほど、大事な場所です。

そこに子供たちが手に小さな木の股の鋏を持って現れます。この鋏をテチヨの足などに引っかけてテチヨの作業<sup>じふま</sup>を邪魔し、テチヨを鋏で引き倒します。テチヨが倒れると豊作になると言われています。

子供の持つ木の鋏の柄の部分は長さ 40～50cm から 90cm程の物まであり、子供の身長に合わせて貸します。

テチヨは子供たちに邪魔をされながら、やっとの思いで畔を塗り終えます。次は代掻<sup>しろか</sup>

きです。テチヨは、息子の太郎と次郎を呼んで、「牛を連れて来い」といいます。代掻きとは、マンガ（馬鍬）を牛に曳かせ水田の土を碎きならすことです。

しかし、太郎と次郎は牛を捜し廻りますがなかなか見つかりません。そこで神殿にいる宮司にお願いして、神様に牛の居る所を聞いてくれるよう頼みます。牛は神殿の近くの森の中に隠れているとの「神のお告げ」があります。太郎と次郎は森から現れた牛を捕まえ、マンガを付けて代掻きを始めようとしませんが、牛は逃げ出してあっちこっちと暴れ廻ります。見物客の中に突っ込んだり、子供を追いかけたりして大騒ぎです。やっとの思いで田打ちが終わり田植えを始めることになります。

この間、親子のやりとり、兄弟のやりとりが実に面白いです。平江主催の場合はテチヨとカカのやりとりがあります。

田植唄 資料編 136 ページ参照

## ウ 登場人物の服装と道具

- (ア) テチヨ（父親役）～蓑みの。笠（タカランバッチョ、竹の皮で製作したもの）  
上は白い長袖の肌着に、下は白の足首まであるパッチ。  
白足袋はかますがたに袴姿。木製の大きな鍬を持つ。白ダスキ。
- (イ) 太郎（長男役）～テチヨと同じ服装。
- (ウ) 次郎（次男役）～テチヨと同じ服装。
- (エ) 牛（仮装）～竹製の牛の面を付け黒い布をかぶる。牛はコッテ牛（雄牛）で、股間に米の入った袋二つと人参一本を付けている。
- (オ) カカ（母親役）～平江集落のみ登場。モンペに上衣。手ぬぐいで姉さんあねさん被り。赤いタスキをしている。おにぎりの入ったテゴ（竹カゴ）を持つ。
- ※担当する集落によって、服装に多少の違いがあります

## 3 びょうびょう祭

### (1) 由来

昔から、旧暦2月6日に荒川にある松之尾神社（昭和42年3月南方神社と一緒に祀られるようになりました）で、行われている打植祭です。これは予祝祭で稲の豊作をあらかじめ祈る祭りです。いつのころから始められたのかははっきりし



びょうびょう祭の様子

ませんが、次のことから古くから行われていたものと思われます。

ア 昔からヤマ（山）といわれる柴（椎の木）を名頭（荒川では「メツ」という）のメツヤマ（名頭山）から切り出してきました。

イ 登場人物である、テチョ（父親の古い言い方）、太郎、牛役（中に2人入ります）は、祭が終わった後、もと名頭家（百姓の門・屋敷というグループの長、納税責任者）であった、荒川でもっとも古い由緒ある家柄であるといわれる城之園本家にお祝いに招かれていました。

ウ 荒川に15名頭家があったころから行われていた祭であるという言い伝えがあります。

## （2）内容

決められたせりふはないですが、素朴な農村劇として次のような筋書きがあります。

### ア ヤマを持って追いかけてまわす

祭りの2、3日前からニセ（二才 青年のこと）たちが、ヤマ（椎の木で柴ともいう）をメツドンメツドンの山から5、6本切り出してきました。それを神社近くを流れる荒川川の水に浸しておきます。ヤマは根本の直径が5～10cm ぐらいの大きさのものです。昔はもっと大きいものでした。

祭りの当日、ニセたちが、それを担ぎ上げて神社の境内近くを走りまわります。ヤマについている泥水を、晴れ着を着た若いオゴジョ（おじょうさん 娘のこと）や新婚の嫁むこや婿むこまたは子どもたちにふりかけ、悲鳴をあげて必死に逃げまわる人々を、追いかけてまわします。時には100メートルぐらい追いかけて、泥水のついたヤマをこすりつけたりします。子どもたちは恐ろしさのあまり、自分の家に逃げ込み、戸をしっかりと閉め切ってガタガタふるえていました。

### イ 田の荒打ち

神社の境内に帰ったニセたちは、境内を田んぼに見立てて、大きなヤマを持って向かい合い、相互に押し合います。時には、鉤状かぎじょうになった枝を引っかけて引き合いをしたりします。

これは田の荒打ち（固い田んぼをくわや三又みつまたなどの農具で打ち起こす作業）の様子を示しています。以前は子どもたちが小さなくわを作ってもらって、田を耕す真似をしていました。

その後、神官が現れ、次のような言葉を唱えます。

「上等蒔きが1千石、中等蒔きが1千石、下等蒔きが一千石、合わせて三千石、打って通れや、ミトンドウ（御田人）」

田人というのは田植えをする人のことです。

この唱え言葉と同時に、ニセたちは「オー」というかけ声とともにヤマを引き上げ、境内の脇に引きずって行きます。そして、その枝葉をむしり取ってカシキ（緑肥 緑の草木を肥料にしたもの）撒きをします。

## ウ 牛が暴れ回る

そこにテチョが登場し、「ビヨウビヨウ（牛を呼ぶ言葉。ビヨウは牛のこと）、オイゲン（俺の家の）牛ヤドケイタネ（牛はどこに行ったね）、ユベ（夕べ）、放レタモンジャ（放れたものだ）」と言う。すると、見物人が「コラナラン（これはいけない）、太郎（テチョの子）がヨアスツバツカイ（夜遊びばかり）スイモンジャツデ（するものだから）、牛ニヤカセジ（牛には食わせないので）綱を切って放れたモンジャ、ミンナ、カセシツ（加勢をして）、チカメツクレ（捕まえてくれ）」と言う。

見物人が「牛ヤ 庄屋ドン（庄屋殿 村の責任者）の豆畑イ（豆畑に）、オッタド（居たぞ）」と教えてくれます。太郎は、やっと牛を捕まえてきます。

連れて来られた牛は太郎の手を放れ、境内を暴れまわり、時には見物人の中に入り込んでいたりします。昔は出店の所まで行き、<sup>あめ</sup>飴をせがんだりしました。飴を与えないと牛がなお暴れるので、店の主人などは苦笑いしながら、しぶしぶ飴をさし上げるものでした。

## エ 代かき

ようやく牛を捕まえて、代かき（田植え前に田の泥を細かくくたくこと）が始まります。そこで、テチョと太郎は、社会情勢を<sup>ふうし</sup>風刺（遠回しに社会の<sup>ひひょう</sup>批評など言うこと）した面白い会話をくり返ししながら、ユーモアたっぷりの所作で畔を水が漏らないように塗ります。そして、最後に、<sup>みなくち</sup>水口で上から平たい石を置く真似をします。

## オ 粃種蒔き

その後、神官が次のような言葉を唱えながら、フネ（舟の形をした容器）に入れた粃を蒔きます。

「上の玉田が千丈（升）蒔き、中の玉田が千丈（升）蒔き、下の玉田が千丈（升）蒔き、合わせて3千丈（升）、ホウ、シツ、シツ、シツ、ホウ」

<sup>せんじょうま</sup>千丈蒔きというのは、非常に広い面積の田んぼのことです。

見物人は、その粃種を拾って持ち帰り、家の床の間に供えました。そして、その年の粃蒔きの時、境内で拾ってきた粃種を混ぜて、自分の田んぼの苗代田（稲の苗を育てるための田んぼ）に蒔きました。それは豊作を約束してくれるものだと信じられています。



## 4 太郎太郎祭—羽島崎神社春祭に伴う芸能（田打・船持祝） 鹿児島県指定無形民俗文化財（昭和37年10月24日指定）

### （1）祭の由来

地域の人々の説によると、むかし天智天皇の妃大宮姫が額娃（開聞神社）に行かれる途中に鏡を遺したといわれます。それで鏡大明神と呼ぶようになりました。しかし、いつの頃からかはっきりしませんが、羽島崎神社というようになったようです。



テチヨ・太郎・牛の代かきの様子

この神社は海岸近くに作ったために、寛延元年（1748）津波（高波か）にあい神社にあった品々は流出したといわれています。

祭日は以前は旧暦の2月4日でしたが、平成11年度から3月4日に近い日曜日になりました。昔は、潮が満ちてくる午後2時頃から始めていました。額娃の方向にある野間岳から吹いてくる南風（下ん風）に乗って神がやってくるといわれていたからです。

現在は午後2時頃を目安に始めています。ここでいう神とは、大宮姫のことです。「太郎太郎祭」のことを、土地の人たちは「二月祭」とも呼んでいたようです。

### （2）祭の概要

「田打ち」と「船持ち」は、農業と漁業の安全と豊作・豊漁を祈願し事前に祝う「予祝行事」としての性格を持っています。漁業集落と農業集落の行事が一緒に行われるのが特色です。数え年5歳になった男児を祝う行事が行われます。これは県内でも珍しい祭です。

舟唄は正月2日から祭の日までは練習や本番で歌われますが、それ以外の期間は歌ってはならないと言われていました。

### （3）「田打ち」と「船持ち」の祭の内容

二つとも羽島崎神社の境内で行われますが、境内の広場には、高さ2mくらいの所に広場を1周するように、御幣を付けた注連縄が張られています。この注連縄は、神の世界と人間の世界との境界を示すものです。注連縄の内側は聖域を表します。人々は勝手に立ち入ることはできません。

この2つの祭は、10数年前までは、「田打ち」が先で「船持ち」の順に演じられていましたが、今では「船持ち」「田打ち」の順に演じられています。

2つの祭とも5歳の男児とその父親が参加することになっています。「田打ち」は牛耕ぎゅうこうから代掻しろかき、田植えで構成されています。

「船持ち」は、船持ち・舟唄の二部で構成されています。

## ア 船持ち

漁業を主とする集落の5歳の男児を中心に行われます。階段を登った神殿の脇には長さ1m程度、幅20cm程の木造船の模型が用意されています。

神主さんが神殿から一隻ずつ模型の舟を歌い手に渡します。歌い手は拝殿に横一列に並び「ヤッスンヨイ ヤッスンヨイ」のかけ声を掛けながら、下の方へ次々に手渡



船持ち 祝いの様子

して行きます。拝殿にいる5歳児とその父親に渡します。昔は先頭のダンベ船(米積み船)には、米と塩が乗せられていました。ダンベ船や帆かけ船を一隻ずつ受け取り、親子で抱きかかえるようにして下りて来ます。そして船を上下左右に揺らしながら境内の広場を回ります。上下左右に揺らすのは、船が荒波あらなみを航海する真似まねをしているのです。こうして航海の安全を祈願しているのです。境内を半周ほどすると、「取り舵とりかじ」の声で方向を転換し、拝殿の前の階段を上がり拝殿へと戻って行きます。

5歳児の服装は、羽織はおり・袴姿はかますがたに青色の大きな襷たすきを左肩から右脇下に掛け、豆絞りまめしぼで頬被りほおぼりをし、白足袋はくを履いています。服装は田打ち祝の男児と一緒にです。付添いの「船持たせ人」全員が背広姿などの正装で、豆絞りまめしぼで頬被りほおぼりをしています。



舟唄の様子

次が「舟唄ふなうた」です。子供と共に船持ちの行列が拝殿の方へ姿を消すと、引き続き「舟唄」の行列が拝殿から階段を降りて境内の広場へ出て来ます。

20名程の歌い手が、縦二列に並び中央と列の左右に笹たての付いた2・3本の竹を持ちます。これは船に乗っている様子を示しています。

むかしは、羽島浦の15歳以上33歳までの青年男子によって歌われていました。現在は青年が少なく、舟唄を歌える若者も少なくなったため年齢にこだわっていません。

この「舟唄」を歌う人たちの服装は、上は紋付袴姿もんつきはかますがたで下には白い腰巻き風の布をまっています。そして羽織はおりの裾すそをまくり上げています。そして豆絞りまめしぼで頬被りほおぼりをし、白足袋はくを履いています。

20分くらい歌います。唄は頭かしらと下しもの掛け合いで歌われ、先頭の2人が音頭をとります。

最後尾には1人の太鼓打ちがいます。

歌詞は資料編 136 ページ参照

## イ 田打ち

神事が終わると拝殿の前にテチョ（オンジョ）と言う父親役が出て来きます。テチョの服装は、手拭いで頬被りをし、黒っぽい衣に背には蓑を付け、頭にはタカランバッチョ（竹の皮で編んだ笠）を被り、下には袴、黒足袋です。テチョが息子役の太郎を呼ぶと太郎が出て来る。太郎もテチョと同じ服装です。

テチョと太郎の親子の会話のアドリブのセリフが実におもしろいです。太郎が牛を連れて来ますが、牛が暴れまわり仕事になりません。このような親子のやりとりを、羽島の方言で行うため観客の笑いを誘います。

この父親役と息子役を出す家は代々決まっていたといいます。昔は、<sup>げんじゅう</sup>嚴重に守られてきたようです。

農村部の5歳児は、<sup>は おり はかますがた</sup>羽織・袴姿で青色の<sup>たすき</sup>襷を左肩から右脇下に掛け、豆絞りの手拭いで頬被りをし、背中には<sup>みの かさ</sup>蓑笠を付けて、白足袋に<sup>わらぢょうり</sup>藁草履を履いた姿で登場します。

テチョは、5歳児とその保護者と一緒に、大きな椎の木を引いて回り<sup>けいだい</sup>境内をほぼ一周します。これでカシキ（緑肥）を踏み込み、田を打ち起こしたことになります。5歳児たちが引いて回った椎の木の枝の股になっている所を親が切り、「レ」の字型の<sup>くわ</sup>鋤を作ってもらい、この鋤は家に大切に保管されます。

さらにテチョは椎の木の大鋤で子どもたちのやり残した田を打ち、水口を固めるなど、整地するさまを<sup>こっけい</sup>滑稽に演じて見せます。

テチョが「太郎、太郎、ウシヨ取ってケ」（牛を連れて来い）と言うと、太郎はふてくされ、テチョと太郎の羽島方言での滑稽な会話が始まります。

太郎は牛を捕まえに行きます。牛はなかなか太郎の言うことを聞きません。やっとの思いで牛を引いて来ますが、牛は言うことを聞かずに暴れ出し逃げてしまいます。境内に下りてきた牛は観客の前で暴れ出します。太郎はテチョに向かって「テチョ、テチョ、牛が言うことを聞かん、女房を持たせてもらえないから、牛にまで<sup>ばか</sup>馬鹿にされる」と言う、テチョは「牛の使い方が下手だから逃げてしまうんだ。女房を持たせてやるから、もう1度行って、牛をよくだまして連れてケ」とやり返す。また捕りに行かせる。太郎は再び牛を連れて来ます。

牛の中には、1人の男が紅白に彩られた牛の面を付け、体には黒い布を被り股の下には米の入った袋を下げています。この牛の面の裏側には、「安永十年（1781）二月四日」の<sup>めい</sup>銘が記されています。

暴れる牛をやっとの思いで捕え、テチョと太郎は、牛にマンガ（馬鋤）を取り付けようとしますが、牛が暴れてなかなか思い通りにはいきません。二人とも転んだり、立ち上がったりしながらやっとなんがを取り付けます。

境内を田んぼに見立てて、太郎が牛の鼻はな竿ざおを引きテチョがマンガを使い代掻しろかきをします。

その後、牛は社殿の方へ帰って行きます。

テチョと太郎は、大きな石を持ってきて水口みなぐちに置き、その石を踏み付けます。

次に縄を地面に張り、田植の準備をします。そこに5歳児とその付き添いの父親た



田打ち祝の様子

ちが縄の前に並び、「松の葉」を稲の苗に見立てて田植の真似をします。これが「田打ち」です。

## (4) 5歳児の祝い

神社境内での祭が終わりと、夕方になると、5歳児の祝いが始まります。豪華ごうかでしかも手作りの祝い膳ぜんが準備されています。5歳児と父親、あるいは祭でそれに替わる役目を果たした付添い人が、上座に座って多くの来客から祝福を受けます。

この祝い膳のために、相当の日数と労力が費つひやされます。およそ1週間程前から準備に取りかかります。当日は200人から300人もの来客があります。昔は長男の祝いともなると500人以上の来客がありました。そのための食材を準備し、膳や碗・皿などは親戚や隣近所から借り集めたり、その膳を並べて置く棚を設置したりします。

料理はすべて自家製です。特にカマボコ・コガヤキは、地域に共通した料理で、沿岸で採れるエソとノソ（サメの一種）のすり身が使われています。大きなすり鉢ぼちと長さ2mほどの大きなスリコギを使用して作ります。

お祝いの料理は、主にカマボコ・コガヤキ・ガネなどです。ガネとはゴボウ・人参・カライモなどを細長く切り、これを油で揚げたものです。

夜が更けても来客は途切れることなく、神棚の前で舟唄を歌ってくれます。昔は前夜祭・本祭まへ・後祭あごと何日も続いたそうです。

今日では、子供の数も少なくなり、昔ほど盛んではありません。

## 5 祇園祭

市指定無形民俗文化財

(昭和36年4月1日指定)

### (1) 由来

文化9(1812)年、湊町の商業が栄えることを祈り、京都の八坂神かんじょうを勧請かんじょうするため、八坂神社が建られました。祇園祭は湊町の商人・若松宇吉が京都の祇園祭を習って来て

山車を作ったといわれています。仲之町の山車に飾る小野道風の古い木像の背中には文政12(1829)年に作った、という墨で書いた文が残っています。



祇園祭の山車

祭りは第二次世界大戦直後まで、旧暦6月13日に前夜祭の裸山（飾りのない山車のこと）で競演があり、にぎわっていました。旧暦6月14・

15日が本祭で、お神輿・漢林王囃・男山・女山の順序で出発しました。女山は牛が山を引いていました。お旅所（旧御仮屋跡 現市来庁舎）で山と山との競演をしたり、「カンカンノウ」踊りが踊られました。

現在は新暦7月末近くの金曜日に前夜祭、土曜日に本祭が行われます。

## (2) 山のこと

山は男山と女山に分かれ、集落で造りました。第二次世界大戦前には、男山は市口町「天狗像」・新町「安珍像」・内門「加藤清正像」で3台。女山は浜之町「関羽像」・仲之町「小野道風像」・松下町「浦島太郎像」で3台。合計6台ありました。唐人町にも山はあったのですが、大正15年頃、串木野の大原町へ譲りました。というのは、唐人町は山車とは別に漢林王囃という行列と踊りがあり、負担が大きかったからだと言われています。

「天狗像」や「安珍像」などの像は、人と同じ大きさの半身像で、山の上に飾ってあります。



祇園祭の神輿



祇園祭（出し入れ式舞台）

松下町は以前「春日大明神像」でしたが、「浦島太郎像」に大正の末から変わりました。山は高さ5m、全体が黒漆塗り、欄干は朱塗り（赤）で、金色の金具、周りを岐阜提灯で飾ります。山の台の下にはアトヤマを踊る舞台となる出し入れ式舞台があります。

現在は、神輿を先頭に男山の栄町「加藤山」・天神町「天神山」、女山の祇園町「道風山」・土橋町「竜宮山」の4台が続きます。

アトヤマ＝祇園山ではサキヤマが山車のことで、ハナ（ご祝儀）をもらうときに舞台を山車の下から引き出して踊ることをアトヤマとっていて、これが棒踊になると、棒踊がサキヤマで、おもしろい劇をアトヤマといたしました。けれど、ハナをもらう家を探しに行く人をサキヤマという所もります。

### （3）男山と女山

男山には、三役という男の子3人に、地方と呼ばれる三味線を弾く4、5人の女性と、アトヤマで踊りをする人々が乗っています。男の子3人は立ち、地方と踊り手は座っています。

三役の男の子は、向かって右からカゲ（拍子木）・ウデコ（太鼓）・ゼンデコ（銭太鼓）で、鉢巻に半被を着て立ち、拍子木で叩き台を叩きます。太鼓や銭太鼓は固定した太鼓を叩きます。

「ポコ ポンポン、ポコポコ ポン」と太鼓、「チッキヤラカッカー チッキヤッカー」とカゲ、「トントン、トントコトン」と銭太鼓が叩きます。すると三役はもちろん、山の綱引きも声を揃えて「ソーラ」と囃すと、すかさずカゲ役が拍子木を叩いて「ハァーナイチョ、ナイチョ」と叫びます。次に太鼓役が「ハァーナイチョ、カイモウ」、また銭太鼓役が同じように叫びながら、拍子木やバチを頭上で左右に振ります。地方の三味線を弾いているのが聞こえないぐらいです。

女山はみんな座って、前の方から大太鼓役4人、2列目にカゲ役2人、3列目に銭太鼓役2人、4列目にスリ鉦役3人と順々に幼くなっていきます。前列の4人がバチを頭の上に振り上げて、三味線に合わせ、「ハァー ポン、イヤァー ポンポン」とゆったりしたしぐさで太鼓を叩くと、カゲ・銭太鼓・スリ鉦が続きます。

服装は官女のような衣装で、帽子も独特です。

また、高島田の髪に、美しい着物を来た、花嫁さんと呼ばれる地方（三味線を弾く人）4、5人が乗っています。地方によって、三味線の弾き方や太鼓やカゲの叩き方も微妙に違い、大太鼓からスリ鉦役の帽子や衣装もそれぞれ地方ごとに違ってきます。このような服装や掛け声やふりは市来独特のもので他の地域ではあまりみられません。



祇園祭の男山



祇園祭の女山（地方）



祇園祭の女山

現在は地域の人々が綱を引いて山を動かしています。昔は国道3号線でも踊っていましたが、今は交通事情の変化により、できるだけ国道を避けて、国民宿舎吹上荘近くのサマーフェスタ会場に集まり、最後の競演を行ないます。そこでは、にぎやかに花火が打ち上げられ夏祭りが盛り上がります。

#### (4) 漢林王囃

唐人町（現土橋町）が受け持つ漢林王囃の行列があって、「カンカンノウ」という踊りもあったのですが、今はまだ復活していません。その行列は異国情緒あふれる中国風の装いの行列で「唐人町のハンワ・ハンワ（意味不明）」と親しまれていたそうです。



祇園祭の山車を引く様子

「カンカンノウ」という歌に踊りは、江戸時代の終り頃、坂本竜馬などが長崎で覚えた、というものです。そのころ、唐人町の江夏という人が長崎に行って、踊りや歌、服装を覚えて帰りました。それをもとに漢林王囃という行列にした、と伝えられています。

「カンカンノウ」は中国の歌で「九連環（知恵の輪という意味）」というのが元の歌です。「カンカンノウ踊」は道楽（歩いているときの歌）で一列になって、庭（踊り場）に入ると円になると、王子役が「フリーツライ ハフテモ キンジ テンキホー（意味不明）」といいます。歌い手が「ダチャ コヒコヒ（意味不明）」というと、踊り子は赤衣着物の袖に、中国風に両手を入れて、頭を下げ「オー ジンミ ジンミ（意味不明）」といってから、歌い手の歌に合わせて踊ります。

明治12（1879）年の記録を見ると、男性だけが踊っているのですが、昭和16年ごろからは少女だけの踊りになっています。

参考 資料編142 ページ参照

## 6 市来の七夕踊

国指定重要無形民俗文化財

(昭和 56 年 1 月 21 日指定)

### (1) 祭の概要

「市来の七夕踊」は、現在、毎年 8 月の 5 日から 11 日までの間の日曜日に行われています。

もともとは旧暦の 7 月 7 日が踊り日でした。

踊りの由来は、豊臣秀吉が朝鮮に出兵したとき島津義弘も大勢の家臣と一緒に出兵しましたが、その活躍を記念して市来の人たちが太鼓踊などいろいろな踊りを披露



七夕踊の太鼓踊

たのが始まりとされています。その後、江戸時代の天和 4 年（1684）、大里の門前集落にあった金鐘寺の捨範叟というお坊さんと、地頭と呼ばれて親しまれていた床濤到住が協力して大里水田の開拓や用水路・用水堰などを作ったとされています。そして、それらが完成したことを喜び、祝賀会を催しましたが、その余興として再び踊られたのが七夕踊だといわれています。大里の人々は、このことを後世に長く伝え、神や仏への感謝や豊作を願うため毎年七夕踊をしてきました。

踊りの主な担い手は、大里地区のうち 14 集落の青年たちで、総勢数百人にのぼります。

この青年とは、青年団に入団してから退団する 15 歳から 29 歳までをいいます。この青年団を中心に、三才（30 歳～）や大人（年配の人）に青年団が依頼して指導や手伝いしてもらい、皆が一体となって踊られます。青年団は七夕踊のためには大切なものでした。ここでは七夕踊のことはもちろん、人としての道や礼儀作法などを目上の人から教わる郷中教育の役割も果たしていました。しかし今では、少子化で青年団がないところもあり、また仕事の都合などによって参加できなかつたりして、人数も少なくなりました。

そのため平成 7 年に、大里の関係公民館長、青年団長、庭割役、有志、世話役などにより、大里七夕踊保存会が結成されました。そして現在、青年団だけでなく集落総出で行ったり、県立市来農芸高等学校やほかのところからの応援をもらったりして、踊りを続けています。

当日は、午前 8 時に中福良集落にある堀ノ内庭で全員が集まって踊り始めます。ここには床濤到住の碑があります。大里地区の人たちは親しみをこめて「到住サア」と呼んで、和田家がそれを守っています。その後鶴ヶ岡八幡神社で、金鐘寺跡に向かって、行列物がまわった後、太鼓踊を踊ります。10 時からの門前川原（もんぜんごら）では、霧島神宮・鹿児島神宮に向かって、12 時頃まで全員で踊ります。午後 3 時からの弘山の踊り場では



薩摩川内市の新田神社に向かって、ここでも全員で踊ります。午後8時にまた堀ノ内庭で踊り納めをします。

この時は太鼓踊だけで、これを庭上り（ニアガイ）といいます。これは後夜祭の意味で踊りをしめくくります。

また、お昼の休み時間と弘山踊り場が終わってから、青年団に入ったばかりの小二才や、踊り子以外の青年たちが太鼓と花笠を借りて、島内集落の来迎寺跡にある丹後局の墓前、一ノ宮神社、実盛塚、鶴ヶ岡八幡神社の第一鳥居があった鳥居松跡、巖島神社（下手中）、御霊神社、戸崎の左沖合にある久多島に向かって松林の中から、それぞれの神様に向かって太鼓踊を奉納していました。これをマッカケといいます。意味はよくわかりませんが、大里中で太鼓の音が1日中鳴り響いているようにとの意味がこめられているとも聞きます。

## （2） 踊りの構成

七夕踊は太鼓踊と垣回（カッマワイ）の2つで構成されています。踊りが行われる庭（踊る場所）まで全員の大行列として、先ず作り物（ツクリモン）と呼ばれる鹿・虎・牛・鶴の大張子、その後に行列物と呼ばれる琉球王行列・大名行列・薙刀行列などが続き、最後に太鼓踊が続きます。

垣回は太鼓踊以外のもので、真ん中で踊られる太鼓踊を囲んで回りながら守る役目をしています。太鼓踊は太鼓と鉦を持った20数人の踊り子で構成されています。役者（ヤッサ）と言われる太鼓の踊り子は各集落から1人は出ています。青年が多かった頃は2人出ていました。

昔は行列物も太鼓踊も全員男性でしたが、平成24年から女性も参加していいことになりました。

## （3） 話し合いと踊り相談

七夕踊の大体2か月前に、今年の踊りをどう進めるかの話し合いが、七夕踊保存会を中心に、川北交流センターであります。次に「踊り相談」が踊りの2週間くらい前にあります。場所は堀ノ内庭にある和田家で、午後8時頃、庭割役と各集落の青年団長、世話役たちが集まって、太鼓の1番ドン・2番ドンから決めていきます。中心になるのは青年団で、司会は青年の代表が務め、会の始めから終わりまできちんと正座をして進めていきます。庭割は、太鼓踊の踊り方や作り物、行列物の動きや流れをよく知っている人が、青年団からお願いされて決まります。

ここで「1番ドン」と「2番ドン」について述べてみます。

「1番ドン」は太鼓踊の中心になる人で、歌や踊りが上手で、踊りの最初に太鼓を叩いて全員をリードして行きます。七夕踊の当日は、朝早く、日の出前に自分の集落の一番高いところに行って、「降神の儀」を行います。これは神に降りてきてもらうための儀式

です。七夕踊が済むと、またそのところに行って、今度は神に帰っていただく「昇神の儀」を行います。そのときは夜9時ごろで、辺りはもう真っ暗になっています。

「2番ドン」は「1番ドン」の右横側に並び、声を通り、歌の上手な人が選ばれます。1番ドンの補佐役です。「1番ドン」と「2番ドン」に選ばれるのは最も名誉とされています。

「踊り相談」は、各集落の役者や鉦叩き・入太鼓の子供たちの確認などをして終わります。

## (4) 七夕道作いと七夕飾り

踊り本番の1週間前の日曜日に道の掃除をします。特に、七夕踊行列が通る道は念入りに掃除をします。この時に「奉寄進大里七夕踊」と書かれたのぼり旗を関係する場所に建てます。または、以前は各家ごとに「七夕飾り」を建てていましたが、今は前日まで子供会などを中心に大きな「七夕飾り」を作り、あちこち建てられます。

## (5) 習し

七夕道作いの次の日から太鼓踊の習し（練習）が始まります。場所は堀ノ内庭で、午後8時から行われます。1日目は「太鼓揃え」といって、各集落の役者の確かめをしてから、13庭（歌）中7庭（歌）を練習します。

2日目は、役者の踊りを指導しながら、踊り姿や動作、太鼓の叩きかたなどの上手・下手をじっと観察しています。習し3日目も同様です。

4日目は「据付」といって、役者の位置を決めます。まず、「入太鼓引（イデコヒキ）」3人を決めます。これは入太鼓を引き連れるという意味です。「入太鼓引」は、踊りが上手で、「1番ドン」の真向かいにいて、「千歳まで」と「つきもせぬ」の歌のとき、「1番ドン」と同じ踊りをします。7庭（歌）のときは2回、13庭のときは4回になります。これを「つのもどし」といいます。意味はよくわかりませんが、鶴が優雅に大きく舞うのをイメージして踊るのだそうです。このときは他の役者は、太鼓を胸にしなが立ち、踊りません。「入太鼓引」は、交代で3人で2か所ずつ役を務めます。堀ノ内庭と鶴ヶ岡八幡神社、習し6日目（前夜祭）と門前川原、払出踊り場と七夕踊当日夜（後夜祭）です。次に「鉦尻（カネンシイ）」2人を決めます。鉦の後ろに付きます。「入太鼓引」に何かあった時のための控えです。そして、「座引（ザビッ）」は1番後尾の太鼓で、踊りの最後に退場します。

その他は平太鼓といい、それぞれ位置が決めます。この役をもらうために、習しの初日から、堀ノ内庭での習しが終わったあとそれぞれの集落に帰り、年輩者から猛特訓を受けます。役をもらうということは、踊り子だけでなく集落の名誉もかかっている

ので、教える方も教わる方も熱がこもります。これを内習しうちならといいます。

5日目は1回目の練習（前庭ぜんていといいます）が終わってから、「陣じんの歌うた」（順の歌ともいう）を行います。1番ドンから2番ドンと右回りに順々に「千歳まで」を太鼓打ち全員が歌います。

一節ひとふしなのですが、「まで」の後を長く歌うので、深く息を吸い込んで歌わないと息が切れて、うまく歌えません。それが終わって練習をして終わります。この日は、各集落から作り物や行列物の届け出をします。

6日目は、朝から作り物や行列物の準備をし、習しは7庭踊って終わります。この日は本番前の前夜祭ぜんやさいの意味もあります。

## （6）作り物と行列物

### ア 作り物

#### （ア）鹿

作り物の先頭に立つのは、宇都集落の鹿です。踊りの前日、朝から大人おとせの指導で集落総出で作ります。材料は前もって準備しておきます。孟宗竹もうそうたけで骨組みを作り、布をかぶせます。布には鹿のような模様があります。首と頭は竹のカゴを用いた張り子で、角つのは小麦ワラの束を使ってあります。毎年同じものを使うので壊しません。



鹿うちの様子

その上に張ってある紙は毎年新しく張り替えます。布の下にはヤマブドウ（ガラメ）のかずらをたらし、中に入った青年の足が見えないようにします。中には4人はい入ります。七夕踊当日の服装は、白の上着に白ズボン、白足袋（今は白い運動靴でもよい）です。鹿捕りが3人いて、鉄砲を撃ちながら鹿を追い回します。鹿は時々立ち止まって、回りを見て警戒けいがいします。

鉄砲はなかなか当たりません。もちろん空砲くうほうです。

ついに弾が当たると、鹿は止まって前に頭を下げます。鹿捕りが、「オイがト（おれのもの）が当たったが」などと言い、鹿の前で祝いの焼酎を飲んでいる間に、別のニセドンが中にもぐりこんで鹿の足の交代です。焼酎は、焼酎樽と水樽があって、樽の穴に竹がさしこんであり、まず焼酎を吸って、次は水樽の水を吸います。ですから、門前川原もんぜんかわらでは、すっかり酔っ払って、川の中に入ったりすることもあります。

## (イ) 虎

次は、島内集落の虎です。木と竹でがんじょうに骨組みを作り、かぶせる布は赤・黒・黄の縞模様しまに塗りわけ、眉や口ひげにシュロの皮をつけ、布の下にはガラメの蔓つるをたらしめます。虎の頭は自在に首が動くように念入りに作られます。虎は大きな口をあけ、目をむき、するどい歯の間に赤い舌をのぞかせ恐ろしい様相をしていますが、どこか愛らしくもあります。



虎とりの様子

朝鮮の役で虎捕りをしたことをユーモラスに再現したものです。狩人は市来郷士の長野助七郎（墓は東市来町のスケシこと宗乾寺の墓所にあります）、他に福永助十郎・安田次郎兵衛・帖佐六七の4人です。昔の資料によると、長野助七郎の子孫の家に、刀身の柄つかに入った部分に「虎切」と銘のある長さ1尺6寸（約48センチ）余りの脇差1腰わきざしがあったそうです。〔「山川神社仏閣名所旧跡由緒物産」天明7（1787）〕この4人に扮した虎捕いドンが、虎とユーモラスに激しく戦う様は見ものです。

虎の中には8人入ります。2列になってかつぎますが、各々分担が決まっています。前2人は前方に注意しながらかついで走ります。2番目は首振りを行います。3番目は常にかついでいますが回転の時の軸になります。4番目は、前につめて回転を速くします。そのため早く走ることができ、狭い所でも早く回転ができます。当日の服装は鹿と同じく白装束です。

虎に虎捕いドンは追われ、背中を押され、道端に倒れたり、川土手の下に転がったり、急に走り出したり、仲間と「こんだ、おいがとってね（今度はオレが捕るからね）」と、虎を仕留める話をおもしろおかしくします。虎捕いに槍や刀で口の中を刺されて仕留められた虎は、頭を垂れ体をヒクヒクさせます。この時虎の中の8人が次々と交代します。「虎はとっても油断すんな（するな）」と叫んだら、また虎は暴れ出します。

## (ウ) 牛

3番目に登場するのが牛です。雄牛と雌牛がいます。以前は木場迫・中福良・中原・弘山・松原・堀・平ノ木場・寺迫・陣ヶ迫ちんがさこの各集落が、年によって交替で2～3頭ぐらい出していましたが、今は堀・平ノ木場が合同で1頭だけ出しています。中には16人入ります。昔は30人も入る大きな牛もいました。



牛使い

2本の孟宗竹を2列に並んで担ぐ形とな

り、これに竹で骨組をつくり、その上から帆布をかぶせます。帆布の下回りにガラメの蔓をたくさん垂らして、中の人たちの足をかくします。

頭も竹で、面は箕(籾を選別する農具)を用いそれに大きな眼を銀紙を用いて作ります。この頭も保管して置いて次の年は、紙を張り替えるだけにします。顔は動きません。尻尾を付ける時は竹を割って作ります。大きいワラ製のX字の形の出し鞍を乗せて、ヨキと環(鉄の輪に「ノミ」)をつけて、山仕事をする牛にします。

ウシツケ(牛使い)は、マエツケ(前使)とアトツケ(後使)の2人がいます。2人とも法被を着て木製の斧を帯に差し、大きな煙草入れを腰にさげています。前使は鼻輪(ハナグイ)を引っ張ったり、斧を前に打ち下ろしたり、大きく叫んだりの動作もあって見ものです。鼻輪は、1~2歳の子牛のときに鼻に穴を開け、生のカズラを編んで輪にして、それに綱を通して、牛を引っ張るものです。後使は手綱を持って、後ろにいて叫びます。牛使いが「ゼーイ」と言う牛は止まり、中の青年が牛の後部を高く持ち上げる動作をします。「コー」というと前に進みます。

## (エ) 鶴

最後は門前集落の鶴です。唐竹で編んだ胴体に、長い首をつけて紙を張ります。頭のかざりは赤く、くちばしは黒くぬります。下にガラメを下げ、中には人が1人入ります。本物の稲をくわえた長い首を地面すれすれにぐるっと回して、昔は見物客に赤いベンガラをつけて、いたずらをしていました。

餌まきは1人です。陣笠をかぶり脚半をはいて、稲をかつぐ棒で2つの桶をかついでモミガラをまきながら、鶴の前を歩きます。ヒシャクでまきますが、人が近寄らないように遠くへまいています。鶴は羽をパタパタさせて前に進みます。

鶴の後に十手(人を捕まえる道具)を持った鷹匠が数人並びます。以前は十手ではなく、模型の鷹を持った20数人の鷹匠がいました。



作り物 鶴

## イ 行列物

行列物は長い列を作って行進します。作り物とともに太鼓踊の周囲をめぐる垣回かきまわりです。

### (ア) 琉球王行列



琉球王行列

まず最初は、琉球王行列です。これは木場迫と中福良の両集落の担当です。赤い布に墨で「漢林王」と書いた旗を待った人が1人、「中山王」と書いた旗を持った人が1人、3本槍、なぎなた。次に横笛、大音（うね）、中音（つね）、拍子木、銅鑼、摺鉦と続きます。これらは実際に音を出しながら歩きます。摺鉦は行列の中心で、笛に合わせて琉球人踊りを踊ります。それから、⊕紋の入った三角旗持ち、弓台（キュデ）持ち（筒の中に弓2本と矢4本）。王様は1人で、青年団に入ったばかりの小二才こにせうが赤い着物に黒袴姿で、王様に扮します。その後ろに御傘持ちがいます。そして千本槍、小長刀です。

さて、この琉球王行列はどのようにして大里の七夕踊に登場するようになったのでしょうか。江戸時代の天保3年（1832）に、鹿児島から薩摩藩主島津斉興とともに、江戸

の將軍家に挨拶のため出発した琉球王子使節一行が、市来郷を通行した記録（『儀衛正日記』）が残されています。そのときの行列の様子を描いた浮世絵もあります。（『琉球人行列図錦絵』『琉球人来朝之図』）それを見ると、七夕踊の琉球王行列とよく似ています。

琉球王子使節一行は、市来湊の入り口に入ると、路地楽ろじがくをしながら入り、御仮屋おかりや（今の市来庁舎のところにありました）で昼食を取り、また路地楽を村はずれまでして、その後は路地楽行列を解いています。これは路地楽という楽と踊りで、使節一行が「村に入りますよ」、「村を出ますよ」ということを知らせるものだったのです。「中山王」とは、14世紀、沖縄に北山・中山・南山の



琉球人王行列 拍子木

3つの国ができて、やがて、中山王が1つの国にまとめました。それから琉球王のことを「中山王」といいました。この使節団は、江戸時代何度も江戸の將軍に挨拶に行っています。

大里の人たちは、この行列の様子を見て、琉球の楽や踊りのおもしろさを七夕踊に取り入れたのでしょう。

琉球王行列の最初に「漢林王かんりんおう」がいますが、漢（中国の昔の国名）の林王という考えもあります。湊町の祇園祭に「漢林王ばやし」の行列がありました。

今は途絶えています、これから取り入れたと思われます。

## (イ) 大名行列



大名行列 奴道中



大名行列 バリン振り

これは、先払い役の奴<sup>やつこ</sup>とか奴道中などといわれ、大名の参勤交代<sup>さんきんこうたい</sup>の行列をあらわしたものです。払山<sup>ばらいやま</sup>と松原両集落の担当です。これも琉球王行列と同じく、鹿児島から江戸へ行くとき、大里を通る大名行列を見て、七夕踊に取り入れたと考えられます。

行列の中では、馬簾振役<sup>ばりんふりやく</sup>がむつかしく、何回もけいこしないと1人前になりません。

馬簾<sup>ばりん</sup>は大きな傘の骨だけのよう、竿<sup>さお</sup>の先に放射状<sup>ほうしやじょう</sup>にしなう竹が広がったものです。上はハチマキ、半てんに似た奴じゅばん、ぞうり、馬簾を持つ人と持たない人が一組になって列を作り、「ドコイサードコイサー」と掛け声をかけて馬簾を振ります。左手は奴のように広げて進みます。進む途中で前の奴に馬簾を投げ渡し、受け取った人はそれを振り（回す動作）ながら進みます。この動作を繰り返します。馬簾振の次にオボ口（帽子のようなもの）持ち・薙刀<sup>なぎなた</sup>持ち・御腰物<sup>おこしもの</sup>（刀）持ち・鉄砲<sup>てつぽう</sup>持ち・はさみ箱（衣裳入れ）持ち・弓台<sup>きゅうだい</sup>持ち・御傘<sup>おかさ</sup>持ち・槍<sup>やり</sup>持ちと続きます。馬簾振以外は、後足を前足に引き寄せては先に出すやり方で進みます。

## (ウ) 薙刀行列

池ノ原集落・下手中集落・寺迫集落の3集落が担当です。太鼓踊の役者の前と後に付いて、その露払い、後払いの役をします。池ノ原は男踊、下手中・寺迫は女踊です。以前は陣ヶ迫<sup>ちんがさこ</sup>も担当していましたが、青年の減少により参加できなくなりました。

服装は女物の浴衣<sup>ゆかた</sup>に色物のタスキ、白足袋<sup>しろた</sup>です。頭には毛笠<sup>かぶ</sup>といって笠の台に白馬



薙刀行列

のたてがみや尾の毛を植え付け、その頂に⊕の紋をいれたものをかぶり、白ハチマキをします。薙刀は1～2メートルほどの竹の先に、小さい木に銀紙を張った刃を付けてあ

り、刃の付け根には色紙のシベがついています。1列に並び麦踏みといって小刻みに進みます。そして、次々に薙刀なぎなたを振ったり、右手に待った薙刀をぐるっと回して前に切り払い、後に切り払い、それから両手で薙刀を斜め下に持って麦踏みで進みます。

## ウ 太鼓踊

いよいよ最後は太鼓踊の登場です。太鼓踊は七夕踊の中心をなすものです。以前は14集落すべて踊り子を出していましたが、今は踊り手の青年がいない集落もあって人数が減っています。この太鼓踊は、3人の師匠が武士踊を習いに行き、それをそれぞれのところで伝えたと言われています。そのため踊りの形が少しずつ異なってきました。



太鼓踊 堀之内庭（床次到住の碑前）

り、今では3つの形と、そのいずれかが混じり合って2つ増え、合わせて5つの形があります。

踊りには1～7の庭にわ（歌詞のこと）があり、それに合わせて踊るのを本踊りといいます。1～7まで踊ると7庭、1～6を2回繰り返して7を踊ると13庭になります。7庭踊るか13庭踊るかは場所によって異なります。

まず始めに、1番ドンの合図で踊り子が集まりながら太鼓や鉦を打つ太鼓寄せをします。2列に並んで踊りの庭に入場し、左右に分かれ円陣を作り、本踊りの陣形を整えると本踊りがはじまります。これを打込うつけんといいます。1庭が終わると1番ドンが太鼓を連打する打切があります。つのもどしは1番ドンと入太鼓引が歌いながら2人だけで踊ります。歌詞3の終わりに鉦と入太鼓だけで一定数打ちますが、これを中入太鼓といいます。神の舞は、本踊りが終わってから神に感謝する儀礼です。1番ドンは3歩ほど円陣の中へ進み太鼓を打ち、オーと叫びながら左から右へ回り、神前に向かって祈ります。他の踊り子はしゃがんでいて一緒に祈ります。その儀礼が終わると、1番ドンは勇ましく太鼓を打ち切り、踊り子は列を作って退場します。これを繰り出しくりだしといいます。

踊り子の服装は、衿えりと袖口を黒でふちどった広袖の着物に裁着袴たっつけはかまを着け、白手袋、白靴下・白足袋にわらじをはきます。頭にかぶる花笠は、毎年色紙を張り替えます。

七夕踊は、昭和45（1970）年に大阪で催された万国博覧会で、お祭り広場で行われた日本の祭りに出場し、2万人の観衆の喝采かつさいを浴びました。

歌詞は資料編149ページ参照



## 7 太鼓踊

### (1) 羽島南方神社太鼓踊

いちき串木野市指定無形民俗文化財（昭和 62 年 2 月 26 日指定）

#### ア 踊りの期日と始まりの言い伝え

羽島南方神社の社名は、江戸時代は諏訪大明神、明治 7、8 年頃に南方神社と変わりました。

祭神は建御名方命、八坂刀売命です。

羽島南方神社太鼓踊は、昔は旧暦 7 月 18 日、次に新暦 8 月 18 日、現在は 8 月 24 日に近い日曜日に踊られています。

太鼓踊を踊り始めた言い伝えは、羽島の高い山の上から薩摩川内市東郷町山田を見ていると、太鼓踊が見えたので、それを見て覚えて、踊ったと言われています。この話は、羽島南方神社太鼓踊に「山田楽」を取り入れた理由にしているものと思われています。



羽島南方神社太鼓踊

いちき串木野市には 3 地区で「山田楽」が踊られています。

それは羽島南方神社太鼓踊と川上踊、荒川太鼓踊（休止中）です。東郷山田楽系の太鼓踊の南の境はこの 3 地区です。東郷山田楽の特徴は「霧島の霧島のいちのきざはし腰かけた」の歌があることです。阿久根市・出水市・伊佐市など県北にも「山田楽」がありますが、これは出水の地頭山田昌巖が江戸初期に作ったものと言われ、同じ「山田楽」と言っても、「霧島の霧島の……」の歌がないため、別の種類の山田楽だと思われています。

#### イ 太鼓踊の練習・扮装

太鼓踊の練習は午後 8 時ごろから南方神社の境内で 2 時間ぐらい、3 週間ほど練習します。太鼓 16 人・鉦 4 人の計 20 人で踊ります。

太鼓打ちは矢旗を背負います。矢旗は 170cm 程で、てっぺんにホロ（薩摩鶏の尾羽）、飾りが下がり、南方神社の社名旗がひらめいています。陣笠のような笠をかぶって、白の半天に白のパッチ（ズボン）、黒の兵児帯（男用の細くてかたい帯）、腰に「イロ」というハンカチ大の派手な色布を下げ、黒脚絆（すねに巻く布）に白足袋姿（今は地下足袋）です。頭と副太鼓打ちは薄い色袖の白半天を着ています。

鉦は女役といわれ、左手に鉦、右手にべ（バチ）を持ちます。花笠をかぶり、襟は黒、色袖の白衣・白のパッチ・チョウ結びの色帯・イロ・白靴下・白足袋姿（地下足袋）です。

## ウ 太鼓踊の概要

当日は午前9時ごろから踊りが始まります。公民館を出ると近くの広場で、まず、北方にある手取ヶ丘の山の神に対して踊りを奉納します。隊形は中央に鉦2列、両脇に太鼓2列ずつ6列です。終わると道楽の太鼓と鉦で、2列で神社まで登って行き、拝殿前鳥居の外の階段に腰掛けます。

午前10時から始まる神事（神様を祀る行事）が終るまで待つのです。

拝殿のうしろにある神殿前の石垣の右側と左側に藁筒が下げられてあり、それを「アラマキ」（稲ワラでイノシシの肉を包んだもの）といいます。アラマキに、どうしてイノシシの肉を入れるのか、またアラマキという言葉の意味もわかりません。長野県の諏訪神社との関連で、贄狩り（神に捧げる「いけにえ」を狩りすること）の祭事があった名残りとも考えられています。このアラマキ投げが羽島太鼓踊の一番の特徴です。県内の太鼓踊で、猪の肉を巻いて投げることは、聞いたことがありません。大昔は小さな鎌にイノシシの肉を巻いていたのだそうです。



アラマキを投げる様子



木にかかったアラマキ

神事が終ると、アラマキを代表者の2人が持って下りてきて、鳥居の外の大きな木の枝に投げ上げて引っ掛かるまで、何回も投げます。昔は右の人が左の枝、左の人が右の枝へ交差してに投げていました。今は右の人が右の枝へ、左の人が左の枝へ投げます。成功すると観客から盛大な拍手が起ります。それが終ると、鳥居の外で待っていた太鼓踊が「キザウチ（階段で打つこと）＝鉦と太鼓の楽」を打って、境内に入っていきます。

太鼓踊は、まず「楽」と呼ばれる踊りから始めます。「山田楽」の踊り方は、直線から円形、ぐるぐる回るなど、すばやい動きがあり、踊りに変化があります。「楽」が9つ、「山田楽」が20の踊りから成り立っています。「楽」の踊りは①門がかい（踊り庭での最初の踊り）②いーは ③一の引き回し ④こがく ⑤ずい ⑥やべ ⑦なげがく ⑧二の引回し ⑨くちまねです。

「山田楽」は①門がかり ②キザウチ ③サシガネ ④ヨコクリ ⑤コンキャン ⑥コゴランノマネ ⑦カタセキ ⑧一番引回し ⑨コガク ⑩ズイ（タナバタドン）⑪ヌケ ⑫タンキャン ⑬コゴラン ⑭スベリアシ ⑮コゴランクズシ ⑯カタチンバ ⑰カシラウチ ⑱ナゲガク ⑲二番引回し ⑳口マネ（この中、③・④・⑯は現在してない）と全部踊れば29あることとなります。「楽」と「山田楽」には同じ踊りが6つあります。例をあげると「一番引回し」「二番引回し」です。これは「楽」も「山田楽」も鉦打ちが

太鼓を引き連れて、円陣の輪の内側を「回っていく」ので、「引回し」と言っています。ほかには「楽」の「ずい」と「山田楽」の「ズイ（タナバタドン）」があり、この楽譜を比べると、「楽」の「コン コン タナバタドン カラナイト ショロドン」と「山田楽」の「カン カン タナバタドン タナバタドン からなあいと やーっさあ ショロドン ショロドン」と似ていますが、微妙に違います（「コン コン」は鉦の音、「タナバタドン」も鉦の音で、「タ・ナ・バ・タ」と叩いて、「ドン」と強く叩きます）。カタカナで「カン」・「コン」と表したのを楽譜としています。



太鼓踊の様子

必ず踊る場所が5か所あり、それが終わってから、ハナ（祝儀）をもらいに踊っています。5か所とは、①公民館近くの広場 ②南方神社 ③悟入寺 ④浜中公園で平石のヤマンカン（山神）に ⑤羽島小学校で羽島崎神社への奉納踊をすることです。②南方神社以外は半庭（はん にわ）といって、半分を踊りました。

註 文中の「かたかな・ひらがな」表記は地元の資料による。

ゴシック体は、「楽」と「山田楽」に共通するものを示す。

## エ 組織

戦前までは16の門（かど）が中心になって、太鼓踊を支えていました。「門」というのは、江戸時代の薩摩藩の政策で、門を中心に農業をして、貢納（こうのう）（税）を納めていたしくみです。16の門をくじで4組に分け、組の中から座元（ざもと）（祭の責任者）を決め、そこが1反5畝の祭田を耕し、収穫米（しゅうかくまい）を祭りのために使い、また、「ハクツザケ（白酒）」という甘酒（あまざけ）より少しすっぱい飲み物を作り、氏子（うじこ）に振舞（ふるま）いました。また、太鼓踊には門の名頭（なご）（責任者）の長男が踊っていましたが、昭和30年代の半ばから、一般の氏子の男子が踊りに参加できるようになりました。平成17年から女性も参加しています。

## オ 特徴

南方神社太鼓踊の特徴をまとめますと、①「アラマキ投げ」がある、②太鼓を打つとき、バチを上（う）に振り上げたとき、バチを放す（薬指（やくさ）か小指（こさ）に輪（わ）を指輪（さしわ）のようにはめているので、飛んでいくことはない）、③太鼓を叩かないときは太鼓の上（う）にバチをX型（けい）にしている、④現在は鉦（かね）と太鼓（たいこ）が上（かみ）と下（しも）と2組（くみ）に分かれている、⑤「楽（がく）」と「山田楽（やまだがく）」（歌「霧島（きりしま）の…」）がある、⑥小太鼓（こたいこ）（入れ鼓（いれこ））がない、ことです。

（楽譜は資料編 151 ページ参照）

## (2) 川上踊

いちき串木野市指定無形民俗文化財 (昭和 42 年 3 月 31 日指定)

### ア 由来

川上踊は家内安全などを願って古くからはじめられ、五穀豊穡ごこくほうじょうを願って始められたと伝えられています。五穀豊穡とは米や麦、大豆などの豊作を願うことです。

毎年 8 月 26 日を「川上踊の日」と定めて踊られてきましたが、第二次世界大戦中から一時途絶えていました。そして昭和 39 (1964) 年に地域住民の願いを受け復活しました。

現在では、原則として 8 月末の最後の日曜日を「川上踊の日」と定め、川上踊保存会の手によって踊られています。



諏訪神社での太鼓踊の様子

### イ 現在の踊りの運営

昔は、川上の「二才にさい (青年)」の手によって行われていましたが、現在では「川上踊保存会」によって運営されています。鉦も太鼓も右と左で、上組・下組と分かれていて、指導するお師匠さんも上・下に 1 人ずついて、鉦の音も上が「コン」、下が「キャ」と異なるといいます。見せ場の踊り比べでは上と下から 1 人ずつ出て踊ります。

昔は上地区 (久福・舟川・木場・平木場・中ノ平) 下地区 (中組・内門) に分かれて競っていましたが、現在は地区割りにこだわっていません。

踊り子は太鼓 14 人、鉦 4 人からなり、練習には 20 日間くらいを要します。以前は夕方に長田神社の境内に「二才」が集まり夜遅くまで練習していましたが、今日では川上小学校の児童も参加するので、小学校の校庭で夏休みの夕方涼しくなる時間帯に練習します。笠や道具の製作は小学校近くの旧地域館で行われます。



踊りくらべの様子

### ウ 踊の演目

一般的には「川上踊の楽譜がくふ」と呼ばれています。楽譜は 23 番まであり、踊の順番を示すものです。順番は次の通りです。

- ①門係<sup>もんがかい</sup> ②庭入<sup>にわいり</sup> ③庭取<sup>にわとり</sup> ④後すざり<sup>あと</sup> ⑤荒川<sup>あらかわ</sup> ⑥チャンチャコ ⑦ササラ ⑧片セキ<sup>かた</sup>  
 ⑨高跳び<sup>たかと</sup> ⑩コ克蘭 ⑪横飛び<sup>よこと</sup> ⑫コ克蘭出切<sup>できり</sup> ⑬四十べ<sup>しじゅう</sup> ⑭サシ鉦<sup>かね</sup> ⑮楽<sup>がく</sup>  
 ⑯モッコンコンノヌカシ ⑰回節<sup>まわりせき</sup> ⑱入コシ<sup>いれ</sup> ⑲庭崩<sup>にわくずし</sup> ⑳ツンテン ㉑唄<sup>うた</sup> ㉒七夕<sup>たなばた</sup>  
 ㉓謝礼<sup>しやれい</sup>

㉑の唄は「きりしまの、きりしまの、いちのキザに腰かけて」という短い唄です。この「きりしまの・・・」という歌詞は山田楽の特徴を表しています。

## エ 踊る場所（奉納の場所）

平成 25 年度の場合を参考にすると、最初に<sup>ふちわき</sup> 瀧脇集落の<sup>おさだ</sup> 長田神社で午前 8 時から始まります。

次は中組の諏訪神社に移動します。およそ 2 km の道程ですが、昔は歩いて移動しました。

ここでは午前 9 時頃に始まります。この鳥居が 2 つ並んでいる諏訪神社は夫婦の神様を祀っていると地元の人には言っています。ここでは 2 回踊ります。

次が中組集落の県道沿いにある<sup>かつらぎ</sup> 葛城神社です。午前 10 時頃から奉納されます。

その後、中組の公民館前の庭で午前 11 時頃から奉納されます。ここでは冠岳の西岳神社と霧島神宮に対し奉納します。

昭和 40 年代後半の頃までは、ここでの奉納が終わったら昼食を取っていたようです。鶏を料理し、大豆等と一緒に<sup>に</sup>煮染めにしてリヤカーに載せて運び、このあたりの広場で昼食を取るものであったと言います。当時は、これがまた大きな楽しみであったそうです。また、近くを流れる<sup>や</sup>八房川で踊り子の衣装を洗って干していると、昼食を取り休憩している間に乾いていたと言います。

最後に川上小学校の校庭で踊り、踊り納めとします。

夕方からは川上の旧地域館で「通夜」が行われます。昔は踊りの後、上下の師匠の家で宴会がはじまり、夜通し踊っていたので、今でも通夜といわれています。

## (3) 虫追踊<sup>むし おい おどり</sup>

いちき串木野市指定無形民俗文化財（昭和 36 年 4 月 1 日指定）

### ア 由来

虫追の行事は全国的に見られるものです。古くから稲の害虫は<sup>おんりょう</sup> 怨霊が乗り移ったものだと考えられていました。ですから、「虫追踊」は稲に害をもたらす怨霊を追い払うための儀礼だったのです。

稲作地帯における重要な共同<sup>き がん</sup>祈願の一つでした。

この地区の「虫追踊」も、<sup>さいとうべつとうきねもり</sup> 斎藤別当実盛の怨霊が崇って稲に害をもたらしていると語

り継がれています。源平時代の武将、斎藤別当実盛が源義仲を討つ戦いで乗っていた馬が稲の切り株につまづいて不運にも手塚光盛に討たれ、その怨霊が害虫となって稲に害を及ぼしていると言われるようになったものです。これは日本の中部以西に広く分布している「実盛送り」の1つです。



大里虫追踊

大里田んぼの中に「上<sup>カシラ</sup>実盛ドン」「下<sup>シイ</sup>実盛ドン」と呼ばれる塚があります。実盛塚は県内でも貴重な史跡です。

## イ 踊の概要

鉦は、一番殿・本入れ・平入れがいます。一番殿は鉦の頭であり鉦の先頭に立ちます。平入れは一般の鉦のことです。鉦を打つ「べ」は、固い檜<sup>かし</sup>の木を材料として作り両端を火で焼いて形を整え調節します。この鉦の中の浴衣姿<sup>ちようせつ</sup>（本来は女装）の2人は入れ鉦役の人です。

太鼓は白地下足袋と白くつ下です。すねにシュロの皮を巻き付けます。藁縄<sup>わらなわ</sup>で上下2ヶ所を二重に括り男結びをします。男結びは解けにくく丈夫な結び方で、結び目を外側に向けます。

鉦は、下は縦じまの袴<sup>はかま</sup>を着用し、袴の裾を括って固定します。上着は白い法被姿<sup>ほっびすがた</sup>で頭には花笠を被ります。入れ鉦だけは花笠から背中に色紙の飾りを垂らします。平鉦はついていません。

太鼓は、背中に三本の矢旗<sup>やばた</sup>を鞍<sup>くら</sup>で固定します。鞍は昔は竹製でしたが、今では金属製の



田んぼの畦を歩く様子

のパイプを使用します。三本の矢旗は中央が3 m程度の長さで、その両脇に2.5 m程度の矢旗を立てます。太鼓の直径は大人用は50cm程度です。白のさらしで胸に動かないように固定し、太鼓には青や黄色の胴巻き<sup>ずま</sup>を付け飾ります。「べ」は長さ50cm程度、直径1 cm前後の梅の若木を利用しています。

## ウ 踊りの場所

平成25年度の場合は次の12か所で踊られました。

①さつま日置 J A 市来支所前 ②喜楽館駐車場（田中ドン） ③門前河原踊り場 ④中原水神前 ⑤思案橋 ⑥ 弘山踊り場 その他、6か所でハナをもらいに踊りました。

昔は鉦を叩きながら歩いて移動していました。

昭和初期頃までは次のような場所で踊られていたようです。

- ①堀之内庭 ②鶴ヶ岡八幡神社 ③田之神（中福良） ④門前河原 ⑤宇都井堰 ⑥来迎寺 ⑦一之宮神社 ⑧中原上段 ⑨中原水神碑 ⑩鳥居松 ⑪上ノ実盛殿 ⑫田中殿 ⑬思案橋（崎野） ⑭御霊神社 ⑮久多島 ⑯下ノ実盛殿 ⑰茶屋前（弘山踊り場） ⑱橋ノ口 ⑲榊殿 ⑳鎌倉殿 ㉑蒲牟田神社（巖島神社） ㉒大園河原 ㉓上城 ㉔鍋ヶ城 ㉕詰城

その頃は、大里川と大里の水田を管理する大里土木（現在の土地改良区）が中心となって実施されていました。田植前に大里区民全体で水路の草払い、清掃をして田植を終わり、その後に虫追踊が実施されました。



虫追踊（門前河原）

（歌詞は 158 ページ参照）

## エ 虫追踊踊り手

虫追踊に出演する人は、役員を通して頭鉦、入鉦、太鼓等の役まで出演希望を伝えていました。役員会では、希望の役や人数などを決めていました。出演が決定された本人はもちろん、家族や集落にとっても非常に名誉なことであり、お互いに喜び合ったということでした。

## 8 そのほかの祭り（芸能）

### （1）芹ヶ野の虚無僧踊

#### ア 由来と練習

「虚無僧踊」は、正徳5年（1715）の春、江戸の中村座で、二代目市川団十郎が、曾我物語の五郎の役を虚無僧姿に扮して演じたものが、その後、舞踊化したものだといわれています。

この「虚無僧踊」は薩摩川内市隈之城町で9歳のときから踊っていた龍園ケサさんが、明治時代末、芹ヶ野の龍園家に嫁入りし、集落に伝えたものです。「虚無僧踊」は女性だけの踊りで、芹ヶ野では「お嫁に来た人は必ず踊らなければならない」という言い伝えが今でも続いているそうです。女性踊りの「虚無僧踊」は山1つ越えた生福の「虚無僧踊」が南限です。

日置市日吉町のあたりからいわれる「虚無僧踊」は棒踊のことで、全く違う踊りです。ここの「虚無僧踊」の練習は月に1回、だいたい土曜日の夜8～9時まで、芹ヶ野公

民館で練習します。踊る時期は決まっています。いろいろな祭りの後山<sup>あとやま</sup>として、また、今では「ちかえて祭」などのイベントで踊ります。

## ②道（道行）と踊り

「道（道行＝行列の行進）」と「踊り」の音楽は違います。楽譜<sup>がくふ</sup>はなく、聞き伝えです。

三味線は2人、拍子木と太鼓は1人ずついます。

御高祖頭巾（紫の布で顔から頭まですっぽりかぶって、目だけ出す）が女役の踊り、虚無僧（筒型の編み笠をかぶり、首に袈裟をかけて、脇差〔刀〕を腰にさし、尺八という竹笛を吹いてあちこち回ってお金をもらうお坊さん）は男役の踊りです。女役の踊りの方が少しむずかしいといわれています。



芹ヶ野虚無僧踊

芹ヶ野の場合は、縦に2列。女役の御高祖頭巾役が舞台に向かって左、男役の虚無僧役が舞台に向かって右にいて、踊りはじめてしばらくすると、両方が入れかわります。この時楽役が「ハイ」と掛け声をかけます。ここが見せ場です。御高祖頭巾と虚無僧が全部入れかわったら、退場です。

女性役6名は黒の紋付きを裾短に着こなし、赤い裾をちらつかせ、頭には紫の御高祖頭巾をかぶっています。手甲（手の甲にかぶせる布）・脚絆は青色、白足袋、草履、黒い帯を後ろに長四角2つが並んで結びます。黄色の腰紐は前でねじりを入れて左下から帯にはさみます。

男役は6名で、葦製の深編み笠をかぶります。白い着物を裾短に、足は白脚絆・白足袋・ワラジ。手に白手甲、右手に尺八を持って、帯は女役と同じ、黒の2つ並びの長四角です。

黄色の腰紐も女役と同じようにねじって左下から帯にはさんでいます。

楽は三味線が2名・太鼓が1名・拍子木が1名。歌はありません。服装は、黒紋付きに黒い帯で昆布結び（X型に結ぶ）に黄色腰紐のねじりです。

## （2）生福の虚無僧踊

生福の虚無僧踊は明治の末頃、松田宗二さんが薩摩川内市東郷町に習いに行き、下石野に伝えたもので、下石野と上石野



生福の虚無僧踊



と合同で踊っています。芹ヶ野とほとんど同じ踊りです。虚無僧役と御高祖頭巾役は、ともに両手を左右に振りながら、拍子木に手先を合せます。これを開くとき、踊りに強いアクセントを与えます。

また、両手を、左足を前に進めながらゆっくり2回押し、また、手前に引いて押す動作を2回繰り返します。

服装は芹ヶ野とほとんど変わりませんが裾は桃色です。女役が黄色の広幅の帯、虚無僧役は頭陀袋（首から前に下げる袋）を下げていて、深編み笠は飾りの花が、芹ヶ野とは違います。

深編み笠は葦製のスタレを利用して、ていねいに作ってあります。

練習は下石野公民館で行います。もともとアトヤマですが、今はイベントなどに出場しています。

### (3) 金山の石当節踊

旭小学校の児童が、石当（カナヅチ）とノミを持って、地面に向けて穴を掘る様子、上に向けて天井に穴を掘る様子を、「カチーン カチーン」とノミの頭を叩いて音を響かせます。

大人の踊りと比べてずいぶん簡略化されています。昔の金鉱石を掘り出す様子を再現しています。



金山の石当節踊（ちかえて祭舞台）

大人の踊りは、両脇に2人ずつ分かれて、地面に向けて穴を掘り、ツルハシを持った鉦夫姿（前当の作業着）の人が出てきて、シベ（御幣）の付いた柴を山の神に供えて拝みます。それから、カンテラ（四角いガラスの中にローソクの火）を照らして、壁や天井をツルハシで鉦石を掘るしぐさをします。そこに、1人、鉄製の壺と椀（御器掛け＝金を選び出すための、外側は赤、内側が真っ黒な漆椀）を持ってきて、鉄製の鉢に鉦石を入れて、鉄の棒で細かく砕いて、すりつぶして、椀に入れて、金がどれぐらい入っているかを見るまねをします。両脇の4人は天井を掘る様子。今度はテゴカリ（籠を背負った人）1人とハネブイ（鉦石をすくい上げる竹製の容器。両脇に持ち上げる持ち手がついている）と前かき（鉦石を引き寄せる△型の鍬状の道具）の1人が出てきて、鉦石を集めて、籠に入れると、テゴカリは重そうに歩いて、鉦石を1か所に集めるしぐさをします。両脇4人は立ったまま下に向けてノミを叩き、次に座って叩き、最後はみんな立って「ばんざい」で終わります。

言い伝えでは、深田集落から習ってきた、とっていますが、はっきりしたことは分かりません。

#### (4) 須賀の相撲踊

女性が力士姿になって踊ります。三味線2人・小太鼓1人、歌い手1人、力士10人、行司1人、弓取り1人がいます。力士は肌色の襦袢に股引、ま



須賀の相撲踊

わしを締め、化粧まわし（前垂れ、ここでは大漁旗）をします。5人対抗で、右と左に分かれ取り組みのまねをします。塩をまき、四股を踏んで、ハッケヨイと相撲をとるなどすべてまねです。3組が相撲を取り終って、全員が円になり、甚句の歌に合わせて踊ります。3歩下がって、2歩進む。両手を前に出して、左右に開いて、手を打ち、左右に払います。だんだん三味線・太鼓のテンポ（調子）が早くなり、退場です。

最後は弓取り式を行い、全員勢ぞろいして終わります。歌は「相撲甚句」だけです。進水式や大漁祝いに踊っていました。

（歌詞は資料編 160 ページ参照）

#### (5) 本浦の相撲甚句踊

青年が裸になってまわしを締め、力士姿になり、化粧まわし（前垂れ、大漁旗）をして、丸く輪になります。1人が輪のまん中に出て、甚句を歌うと、力士姿の青年たちは両手を押し出し、後ろに下がったり前に出たり、右足を出して2回手を打って、「ホイ」といって左回りで前に進みます。



本浦の相撲甚句踊

関取が力強く動く姿をまねたようです。

歌は「相撲甚句」「船名甚句」「出船甚句」「入船甚句」「さのさ甚句」の4つあり、最後の「さのさ甚句」では「申木野みなとに 船が百隻着きや 帆柱も百本本 止まるカラスも同じ百羽羽雀がチュ カラスがカア トンビがほだね吹きや ひんするする」という歌をまじめな顔で歌います。

これは昭和の時代、えびすヶ丘公園で毎年開かれていた漁願相撲で踊られていました。今は本浦青年交友会が伝統を守っています。

（歌詞は資料編 162 ページ参照）

#### (6) 土川の左官踊

明治維新で、禄を失った郷士たちは、生きるために左官の職を求めました。左官と言

う職に誇りを持ち、その史実と誇りを伝えるために、左官踊が生まれたと伝えられています。

明治・大正時代のころ、棒踊のアトヤマやお祝い、新築祝い・結婚式の披露宴などで踊られていました。三味線・太鼓が1人ずついて、鹿児島ハンヤ節を歌います。左官は親方と弟子の2人、合計4人で演じます。



土川の左官踊

まず、土踏み。粘土にワラなどを入れて、よく混ぜるように両足で踏むようすを演じます。弟子がこねられた粘土をコテ（土を混ぜたり、塗ったりする舟型の平らな鉄板に柄のついた道具）でよい大きさに丸め、親方にひょいと投げます。それを親方は左手に持った台形の板の台にひらりと受け取り、粘土を壁に塗っていくようすをまねします。それを何回かくり返し、作業が終って帰るまでのシーンをにぎやかにおもしろおかしく演じます。平成22年3月までは土川小学校の児童によって行われていましたが、現在は行われていないようです。

## (7) 野元の虎とり

いちき串木野市指定無形民俗文化財(昭和53年11月28日指定)

棒踊のアトヤマとしてできた踊りです。これがいつ頃から踊られてきたのかは、はっきりしません。あらすじは江戸時代の初め頃、中国の明国から清国へ代わる戦いに、中国人の父、日本人の母との間に生まれた鄭成功が明側について戦う話を、近松門左衛門が浄瑠璃の「国姓爺合戦」として大当たりとなった中の、「千里ヶ竹」という場面の一部を「虎トイ」としてアトヤマにしたものです。主役はマトウナイ（ワトウナイ＝和藤〔唐〕内）で、敵は清軍のジトウテン（李蹈天）です。竹林に迷い込んだところ、まわりがさわがしくなってきます。大勢の人の声にドラや太鼓の音が聞こえてきます。そうだ、虎狩りをしているのだ。いきなり虎が暴れ出てきました。マトウナイを目がけて飛びかかってきました。虎と激しく戦い、生け捕りにしました。ここで、子どもの道化役が出てきて、おもしろいしぐさをします。そこへジトウテンの部下の安大人が現れ、その虎は韃靼王に差し上げるために狩り出したものだ、返せ、と迫る。そこで争いとなり、マトウナイに負けて、家来となります。



野元の虎とり（深田神社境内）

虎は虎の面を付けた2人入りで、虎模様

の布の中に入ります。体より長いしっぽがあり、後ろの人がうまくさばきます。太鼓・三味線・拍子木が鳴り出すと、笹竹に付けたのれんを2人で持っていて、そこからジトウテンは出てきます。虎は向かい側の右隅にいます。人数は、虎2人、ジトウテン・子ども・安大人・楽器3人・笹竹持ち2人の10人です。

## (8) 棒踊

### ア 棒踊の概要

市内には少なくとも27か所以上の棒踊がありました。松原武実著『鹿児島県地区別民俗芸能要覧 薩摩編』(1986刊行)には、市来地域4か所、串木野地域23か所書かれています。市来地域が少ないのは、大里には大がかりな七夕踊があり、湊町はもともと商業が中心の町(棒踊はもともと稲作の豊作を祈る踊りだから)で、祇園祭に力が入るし、川上も太鼓踊が中心だったからでしょう。前出の『鹿児島県地区別民俗芸能要覧 薩摩編』には串木野地域は23か所と書かれていますが、そのほか明治18年の『入来定穀日記』(串木野麓郷土の日記)には、河内の馬込とか生福の内田という組が記されています。また、『市来町郷土誌』(1982刊行)には棒踊りを踊っていた集落として、迫・湯小路・橋ノ口・平向なども記されており、各地で盛んに踊られていたことがわかります。

県内の農村は棒踊を盛んに踊りました。江戸時代での税金にあたる貢納は米が中心だったので、薩摩藩は稲作に力を入れていました。それで多くの村々で踊られるようになったのでしょう。古い記録には「田踊」と書かれています。

神社や、馬頭観音などに奉納していた棒踊は、短くて1曲2～3分あれば終わってしまうので、同じ踊り方で歌詞を代えて2回か3回踊っていました。神社や寺の奉納踊ではあるけれど、もの足りなかったのでしょう。そこで、神々をにぎやかにするため、そして見物人を喜ばせるために、「アトヤマ」という「狂言芝居」のような、楽しめる劇を見せました。そのために、遠く川内市や日置市東市来町湯之元などからお師匠さん(指導者)を呼んで一生懸命に練習をして、披露しました。それで、棒踊とアトヤマがいっしょになっている所が多いのです。

アトヤマの方がおもしろかったので、棒踊は消えてもアトヤマだけが残っている集落もあります。たとえば、野元の「虎取り」はそのよい例です。

**馬頭観音** = 馬や牛の病気やケガをしないように、たくさんふえるようにして下さる観音さま。

**奉納** = 神さまや仏さまに、踊る、すもうを取る、弓を射る、絵馬、品物を上げるなどして、お願いごとをすること。

**狂言芝居** = 能・狂言の狂言で、笑いが中心。芝居はここでは劇のこと。

## イ 各地区の棒踊

### (ア) 久福の棒踊 (川上の棒踊)

6尺棒を持ち、2列になり4人1組で踊ります。昭和42年(1967)には「久福の棒踊」として踊られています。久福は久保野と福ヶ野がいっしょになった集落の名前です。

現在は、「川上棒踊」と言い、川上小学校の運動会で、全校生徒で踊られています。

小学校で始まったのは平成14年度の運動会からです。歌は「オセロ(後)は山で、前は大川」と「岡の背」です。「岡の背」は「焼野の雉は岡の背に住む」の一部です。

### (イ) 上石野の棒踊 (生福)

6尺棒を持ち、2列になり4人組1組で、紫頭巾をかぶって踊ります。歌ははっきりしないので、テープで踊っています。決まった踊り場所はなく、田植えが終わった後や、十五夜、冠岳山市で踊っています。2年ほどまえ青壮年が踊りました。



上石野の棒踊

### (ウ) 下石野の棒踊 (生福)

6尺棒だけの踊りです。最近も踊られています。



下石野の棒踊

### (エ) 坂下の棒踊 (生福)

6尺棒を持ちの6人組で踊ります。今まで絶えたり、復活したりしながら、時々踊られていましたが、昭和53(1978)年に、大日様(坂下家のお堂の仏さまで、大日堂という)の六月灯をきっかけに復活しました。この時、婦人会が棒踊を踊りました。

歌は「抱きよて寝れば月が冴えこむ」「オセロは山で、前は大川」などです。

### (オ) 平江の棒踊

6尺棒を持ち6人組になって踊ります。9月の敬老の日に中学生が踊っています。昔は田植えが終わった後、「お田踊」と言って、あちこちに行って棒踊を踊りました。夜は「田祈念(田植えがすんで、神社からご幣をもらって、田の水口に立てる行事)」とって、

ご馳走ちそうを作りました。戦前までは棒踊をマエヤマといい、アトヤマがかならずついていました。

アトヤマには歌舞伎の一場面である「鈴ヶ森」などが披露されました。2日間市内に繰り出すこともありました。

### (カ) 荒川あらかわの棒踊

6尺棒だけで踊ります。もともと草良そうらと大河内おおかわうちが踊っていました。川内市宮里みやざとから習ってきたので、「宮里棒」と名づけられました。明治初めから20数年ごろがもっとも盛さかんで、川内新田神社お田植祭なかむきに中向そうら・草良の踊りとして奉納したことがあります。その後、草良・大河内で昭和14年ごろまで伝え、その後、中止。戦後、復活して昭和40年に中止。戦後、復活したとき、入来方面へ歌を習いに行きました。昭和50年ごろ（今から30年ごろ前）には荒川小学校の3～6年生が毎年運動会で踊っています。2列で3番踊りますが、2番目がむずかしい。棒を高く上げ、腰を落として、かがむ、棒をたたくところがむずかしいのです。最後は「ヤー」です。

### (キ) 大原南おおはるみなみの棒踊

6尺棒を持ち6人組になって踊ります。冠岳の岩下棒踊を受け継いでいますが、岩下棒踊りと違い覆面ふくめんはしていません。小中学生で保存会を作り、青壮年部が指導しています。夏休みに入った7月21日～22日の夜、串木野庁舎駐車場で練習し、8月の初めに集落を回り、夕方18時に住吉公園で披露しています。



大原南の棒踊

## ウ いちき串木野市内の棒踊

中止した地区も入れて27か所の踊りを分けてみると、「6尺棒踊」が12か所、「鎌と6尺棒踊」「鎌と3尺棒踊」が3か所ずつ、「6尺と3尺棒踊」が3か所、「3尺棒踊」が1か所、「カナヤマ踊」が1か所、「不明」が4か所と分かります。

全員が6尺棒を持って踊る「6尺棒踊」が一番多く、12か所もあるのは、もともと「棒踊」という踊りは「棒術」や「示現流しげんりゅう」の6尺棒さんこうを参考にして作られたようなので、基本の型だからでしょう。「鎌と6尺棒」「鎌と3尺棒」「3尺棒だけ」「カナヤマ踊」などは、「6尺棒踊」から変化してでき上がった棒踊なのでしょう。どちらかという、アトヤマ風に作られて踊ったかもしれません。

いちき串木野市内の棒踊にはない種類は「棒踊の虚無僧踊」と「笹踊ささおどり」です。棒踊の

虚無僧踊は、鹿児島市谷山を中心として踊られています。この辺りから各地に伝わったのでしょうか。深編み笠をかぶり尺八を持った虚無僧役と3尺棒との打ち合いです。笹踊というのは、日置市日吉町の「せつぺとべ」や南さつま市金峰町あたりに広まった踊りで、三度笠に笹竹を持って踊る踊りで、打ち合いはありません。もともと錫杖踊という錫杖と木製の「丸く曲った刀」を持って踊る踊りがあり、ここでは錫杖の代わりに笹竹にしたのでしょうか。錫杖が手に入らない所は、マガイ刀と扇子を持って踊ります。(錫杖=杖の先にとがった錫に4個とか6個とかの金輪がついていて、杖をふると、ジャラン、ジャランと鳴って、魔を祓うもの。)

歌い手は踊り手の前の方で歌うのが薩摩半島に多く見られます。鹿児島市花尾町の大平地区の獅子舞踊に出てくる棒踊では、背の長さより高い椿の木を持って、うしろで歌い手は歌っています。大隅半島はほとんどの歌い手は踊りの後ろにいて、2～3mほどの柴の枝を持っています。

いちき串木野市内の棒踊りには、南薩で見られるようなシベ竹は使用しません。南薩で使用するシベ竹とは、カンナで板状に薄く削ったものの先端部分をベンガラ（第二酸化鉄）で赤く染め、それを長さ5m、直径10cmほどの竹の上端につけたものです。この竹を2～3人で持って、棒踊の歌が始まると、上に持ち上げて「ドスン、ドスン」と地面を搗くので、ずいぶん大きな穴ができます。シベ竹の高さを自慢するのは日置の「せつぺとべ」で、田んぼに着くと、20m以上もあるシベ竹を1人で抱いて、田んぼの中に入り、肩の上や額に乗せて、田んぼを斜めに渡って、飾る場所へ運びます。これは田んぼの中なので、搗くことができません。

伊集院町飯牟礼の熊野神社でも境内で、「せつぺとべ」と同じように、シベ竹を手で運びます。それが、いちき串木野市にはありません。

いちき串木野市内の棒踊りの歌は「後が山で 前は山で」がいちばん多く、基本です。その地域独特のものというのはいりません。だいたい似たような歌ですが、歌詞を長くのばして、「ハ・・・」とか「ホ・・・」とかの文字をつけ加えるので、何を歌っているのか、ほとんどわからなくなります。けれど、注意していれば、どの文字を長くのばしているか、どれがつけ加えられている文字なのかがわかってきます。たとえば、川上棒踊の歌は「オセーローハハハアヤーハ ヤマエ (ハイエーヤーレ)」と歌いだします。「オセローハマエ=後ろは山で」の間に「ハ・アヤーハ」などを入れて長くしているので、歌詞がわかりにくい歌になってしまいます。

それに、口説歌（あら筋がある歌）があり、これは長い歌詞で、基本的な短い歌「後ろは山で」などを「表」といい、口説歌を「裏」という所もあります。熊本県人吉市より北は口説歌が多くて、1曲13、4分踊ります。また、奄美の方でも長い歌詞の棒踊があります。

地元の人「棒踊の原型だ」と言っているところがあります。

鹿児島市吉田町本名の谷上棒踊です。歌が長く、歌詞を書くと「苗は小苗で一本苗よ、

一本、ヤア、苗は一本苗は米が八石「もののみごとは八幡馬場よ、後は、ヤア、山で、後は山で前は大川」とあり、ほかのところでは「一本苗は米が八石」「後ろは山で前は大川」と後ろの方だけを歌っています。いずれにしても豊作を祈る歌詞です。

鹿児島神宮の「田歌」の影響が強いという説もあります。

鹿児島神宮の田歌は、お田植祭のとき、田の神になった人が田んぼに入って踊ってから、早乙女、早男が田植えを始めます。このときに、加治木町木田の人々が田植え歌を歌います。

それを田歌といいます。

(棒踊の歌詞は資料編 170 ページ参照)

## (9) その他の祭

### ア 照島神社 秋の大祭

#### ほぜ祭・浜下り

##### (ア) 由来

由来は、はっきりしませんが、毎年旧暦9月9日に行われます。このお祭りは秋の大祭のほぜ祭り（豊祭 豊作を感謝する祭り）です。

ここでは、平成24年10月23日に行われた祭りの様子を紹介します。



ほぜ祭 照島神社

##### (イ) 浜下りの人々

午前9時に神事が行われ、天から神様をお迎えし、御輿（御神体をのせる乗り物）に移します。

そして、神社を出発します。

照島地区の石川山から酔之尾、照島小学校、尾の上を通過して須賀から神社まで、集落をひと回りします。



浜下り 神輿

先頭に、天狗が行きます。天狗は面をつけ、赤い着物を着、わらじ履きです。手には錫杖（上部に数個の輪がつけられ、お経を読むときなど振る杖）を持って先払いをします。

その後、照島神社の旗持ち、3番目に金幣（金色のシベ〈御幣〉）を持ち、4番目に太鼓担ぎとそれを打つ人が続きます。5番目に神主、6番目に、ねじり鉢巻をし、赤い法被を着た稚児（幼い子ども）と氏子数人が神輿を引きます。又、氏子の人たちは神輿



を押して加勢します。稚児の母親たちが、それにつきそって子供の面倒を見たりします。7番目に、賽銭箱担ぎが2組おり、総勢40人程が参加します。

各家の木戸口（入口）や沿道には、地域の方々が賽銭を持って、今か今かと行列を待っています。

### （ウ） 浜下りの様子

天狗は、途中で赤ん坊や子供の頭を撫でたり、握手をしたりして行きます。怖くて泣き出す子供もいます。子供が天狗を怖がるのを見て、「いうことを聞かないと天狗さんがくるよ。」と言って聞かせている親もいます。昔から照島の子供たちは、天狗さんのお陰でよく躰けられてきたといわれています。



浜下り

天狗だけでなく神主も人々をシベ（紙幣）で祓ったりして行きます。

途中、照島神社の宮司をしていた内宮家の内神がある所で休憩します。内宮家の内神には、中国の航海安全の女神である媽祖神が祀られています。中国の貿易船が、嵐で島平海岸に難破したとき、その中に媽祖神があり、それを内宮家で内神として祀ったそうです。島平の漁船の安全を祈ったのです。ここでは、つけあげやジュースが配られ、子どもたちが元気づけられます。むかしは、甘酒をふるまっていましたが、各家庭でも、豊作に感謝するホゼ（豊祭）祭りには甘酒を作っていたものでした。

照島小学校では、多くの児童が窓から手を振って迎えます。何といても、人気者は天狗で、大勢の児童が出て来て、天狗に悪戯します。児童たちは天狗に追い回されたり、天狗とじゃんけんをしたりして喜びます。昔は天狗がトイレまで追いかけてきたといわれています。ここには、神村学園附属幼稚園の園児もきていましたが、皆、怖そうにして近づいたり、天狗に捕まりそうになり、逃げ回ったりしていました。時には、泣き出す子もいます。

その後、一行は照島保育園を訪れ、尾の上、須賀を通って神社へと戻ります。

### （エ） 高齢者たちの話

このごろは天狗がおとなしいです。昔は、天狗が大暴れし、子どもたちが「天狗の鼻は一尺五寸」と言ったり、からかったりすると天狗が追いかけてきましたので、青くなって逃げるものでした。天狗は、一本歯の高下駄を履いていました。そして赤面と白面の天狗が出ていました。

昭和27年頃の稚児は、男の子は、小さいバッチョ笠を被り、袴姿でした。女の子は、巫女の姿をし、鈴を持って歩いていました。

# 解説

市文化財保護審議会会長  
(鹿児島民俗学会代表幹事)  
所崎 平

## (1) 棒踊

棒踊は、文化年間(1804～1817)から明治時代頃まで、「田踊(たおどり・たおど)」と言われていました。田踊と言われるように、田植前後に、豊作を祈る奉納(ほうのう)の踊りです。現在、「お田植踊」と言っている棒踊は、日置市日吉町・日置市吹上町・南さつま市金峰町の3町だけです。他はみな「棒踊」と言っています。



岩下の棒踊

薩摩半島側には600か所ほどありましたが、現在は200か所ほどに減っています。島々にも

伝わり、奄美大島まで地域にあった踊りに変化しながら広く伝わりました。使用する道具は棒だけで、短い踊りだったからです。

元禄(1700年)前後、棒術(浅山棒術)や武術(示現流など)を参考に棒術ができ上がったのかもしれませんが。棒術は逮捕術です。武術は剣術などの武道で、師範がいて弟子がいます。

棒術の基本は6尺棒です。棒術の棒が6尺だったからです。6尺棒踊が多いのはそのせいです。

種類は、6尺棒と6尺棒、6尺棒と3尺棒、3尺棒と3尺棒、これに2列、3列と並び、2人で打ち合う2人組、4人で打ち合う4人組、6人で打ち合う6人組、などと変化が出きます。これらは棒だけの踊りです。



川畑の棒踊

次に、カマ(鎌)と6尺、カマと3尺などの組み合わせと、2列・3列、4人組・6人組と組み合わせがあります。これはカマ踊ともナタ踊とも言います。

錫杖踊は、錫杖を右手に、マガイを左手に持って踊ります。この踊りは、出水市の方から流行り出したようで、北薩の方は、錫杖踊といいますが、だんだん南の方に来ますと、カナヤマ(金山)踊、カタナ(刀)踊(カナナ踊)と言い、南に行くほど違った言い方、キョゲン(狂言)とかチョイノチョイなどの言い方が出てきます。そして、右手に持つのも錫杖からマガイ(曲い)という、丸っこい刀に代わり、左手にシベ(御幣)を持って踊るので、マガイ踊と言われました。錫杖が笹竹に変わると、笹竹踊と言い、左手にシベや扇子などを持

ちます。それは錫杖という山伏などの持つ道具はなかなか手に入らなかったもので、身近なものを利用したからです。キョゲン（狂言）とかチョイノチョイというのは、ハヤシ言葉や歌がおもしろい歌詞で、アトヤマの狂言みたいだからです。つまり、もともと錫杖踊は棒踊のアトヤマとして踊られていたものだからです。

豊作を祝う（祈る）棒踊は神社や寺や山の神や田の神などへ奉納されます。しかし、棒踊は踊る時間が短すぎて、ハナ（祝儀）を貰うには、棒踊だけでは場が持たなかったために、アトヤマという滑稽な、おもしろい出し物を付けくわえたのでしょう。本市野元の「虎取り踊」などがその例です。

虚無僧踊という棒踊があります。これは、鹿児島市谷山の山田を中心にして広がったらしく、日置市日吉町が北限です。本市の女性踊りの虚無僧踊と言いは同じですが、別物です。

棒踊には、大きく分類すると、6尺棒踊・6尺・3尺棒踊・3尺と3尺棒踊・カマ踊（ナタ踊）・錫杖（笹踊などを含む）・虚無僧踊と、6種類ほどになります。

## （2）太鼓踊

太鼓踊は、中世の末から近世の初めごろにお盆の精霊送りとして伝わったのではないかと考えられています。

太鼓踊の役割は、精霊送りが中心で、墓地や初盆の家々を回って踊ります。他に、虫追いと雨乞い踊を兼ねています。稲作地帯では、虫追踊でウンカなどの害虫を地区の外に追い出します。

また干ばつの時は、高い山に登り、太鼓や鉦、大きな音の出るものを叩いて、雷のように響かせて、雨雲を寄せ集めることをして、雨を期待しました。

現在のように、戦勝踊だ、出陣だ、帰陣だ、城攻めだ、などと勇ましく、踊りが活発になって来たのは、江戸時代の後期からだと考えられています。それは、島津氏が長野県諏訪地方から戦の神としてお迎えした諏訪神社（清水町）への奉納踊として、鹿児島城下の24か村を半分ずつ、1年おきに奉納させたことからますます活発な踊りになったと思われます。（『薩摩風土記』南林寺行図 1821）それで各地で諏訪神社（南方神社）に全集落の太鼓踊が奉納することが多くなりました。その他、馬頭観音祭やホゼ（豊祭）などにも踊ります。

太鼓踊は、薩摩半島側に多く、大隅半島側には八月踊という、水神祭と盆踊（宮崎県串間市の盆踊が伝わってきた）の重なった祭りが多くて、薩摩半島側に似た太鼓踊は7か所ほどです。

県内では、三島村黒島・屋久島・種子島までが太鼓踊の盛んな範囲です。

種子島では昔の手鏡（銅鏡）を鹿のツノで叩く所があります。屋久島には、指宿から伝わった、鬼役が出る太鼓踊があり、黒島には坊津から伝わったと思われる太鼓踊があります。薩摩半島の南の枕崎市や南さつま市坊津の太鼓踊には、踊りの輪の中に女装している鉦打ち1人、小太鼓1人がいます。新人はサッキョンと言われ、先頭で飛び跳ねて、2・3分で終り

ます。坊津は鉦が1人で小太鼓が2人です。

南さつま市加世田から野間半島、南九州市川辺にかけて、特徴としては、ワラだけ、あるいは藺草いぐさだけのバチを使い、太鼓を叩きます。とくに南九州市川辺の方には先頭にワラ振りといって、ワラだけで舞をする人が付きます。鉦と小太鼓は2人ずつの4人で、女装です。

日置市吹上町はウチワ型の矢旗やぼたが立派です。日置市吹上町伊作側いざくは鉦と小太鼓は2人ずつ4人です。日置市吹上町永吉から鉦は男装になり、矢旗が高くなります。北に行くほど、だんだん鉦打ちが多くなり、6～10人ぐらいに増え、鉦踊かねおどりという所が多くなります。その中でも鹿児島市花尾町には彩りのある高い矢旗の花尾楽はなのおぐといわれる花尾神社奉納の太鼓踊があります。それに陣笠じんがさをかぶり、長い柄の刀(木製)を太鼓から突き出して、武士姿で踊っています。

士踊まむらいおどりが加世田に残っていますが、これは白衣はくいに赤い陣羽織じんぼおりを着て、両膝ひざには逆三角の白布を付けています。稚児踊ちこおどりは子供が踊ります。左手に持って打つおどりと小太鼓を腰から竹を2本出して、その上に小太鼓を乗せて上から叩く稚児よろいかぶとがいます。鎧兜よろいで弓持ちの武士姿の大人が見張るようにしています。

いちき串木野市から北の方には山田楽と名付けられた太鼓踊があります。中心は薩摩川内市東郷町山田かもしれません。歌に「霧島の 霧島の いのちのキザに 腰掛けた」とあります。

薩摩川内市あたりから、踊り方で「ビナ巻き」があります。「ビナ」は「ニナ(巻貝)」のことで、渦巻きうずまきのように回りながら中心に集まり、また逆回りで元の大きな型に戻ります。「山折り」といって、ジグザグに歩くこともします。

また、太鼓の代わりにバラという竹で作ったザルのようなものを2つ合わせて、和紙をはって平たい板のようなバチで叩きます。「ウバラ太鼓」というのは、直径が1m近くあり、重いので大変です。

出水地方には、竹皮笠たけかわがさに色紙をはり、短冊を下げて、顔の周りを隠している太鼓打ちがいます。種子島踊にはメハチと言って、先頭でシンバル型の鉦を打ち、おもしろい動きをします。ミヤズという赤(シャグマ)や白(ハクマ)などの付け髪をつけ、大太鼓を左脇に抱えたり紐で下げたりして太鼓を打つ人や小鉦を打つ子供がたくさん出ます。柴を持って太鼓を叩く子供がいたり、太鼓はなくて柴だけ持って、柴を叩く子供もいます。

長島の裏底集落うらそこには、珍しくリコーダーを吹く人がいます。県内で笛を使う太鼓踊はここだけで、笛が出てくる太鼓踊は長崎・佐賀・福岡・大分の九州北部が主です。熊本・鹿児島・宮崎は笛のつかない太鼓踊で、こちらの方が古い形の太鼓踊だと思われま。

始良市には、ホタ振りというシベ(御幣)を持った人(昔は大人、今は子供)が先導し、次に大きな鉦を持った青年が続き、太鼓打ちとなりますが、陣笠をかぶり、顔にオシロイを塗り、頬ほおには赤い丸、黒い付け髭ひげを耳まで掛けています。

鹿児島市の太鼓踊の特徴は、変化が多く、活発で動きの速い、激しいものが多いことです。逆に静かで鉦の音が中心というのもあります。また、陣笠や刀などをつけて、武士姿じんがさになっているものがあります。基本的には、太鼓踊は農民の踊りです。武士が踊るのは士踊まむらいおどりといい

ます。

土踊という場合、江戸時代の末頃から、太鼓踊が先頭になり、後に武器（刀・槍・長刀）を持った鎧だけ、兜だけの武士が数百人、3列か4列で長く続きます。江戸時代の初めの記録には、藩主が鹿児島に帰って来た時の出迎えに、それぞれの郷が郷士を出して、元気のいい姿を見せました。後には出水などでは翌朝郷士を集めるよう、夕暮れに頼んだところ、1000人ぐらい集まったそうです。

太鼓踊の種類は、種子島踊・鼓楽（小楽）・鼓旗楽・山田楽・鉦踊・花尾楽・アケスメロ（薩摩川内市入来町中心）・三段打（宮崎県えびの市中心）とか、バラ太鼓踊などと言われているのがあり、古くは「ズシキャンキャン」とか「ズッカカンカン」などとの言い方があちこちにあり、次いで「鉦踊」が多く、「太鼓踊」と言っていたのは南薩が中心で日置市吹上町を境として北側・鹿児島市や始良郡などまでが「鉦踊」と「ズシキャンキャン（カンカン）」地帯です。バラ太鼓踊は始良市の北側からさつま町や湧水町栗野・宮崎県都城市辺りまでに広がっています。

### （3）いちき串木野市の太鼓踊の特徴

市内には、七夕踊・虫追踊・川上踊、羽島太鼓踊の4地区にあります。このほか、昔は荒川太鼓踊がありました。

#### ア 七夕踊

作り物・大名行列・琉球王行列・長刀踊がつく壮大な祭の最後に出てくる太鼓踊が、最も大事な踊だ、といわれ、また、現在もその意識は変わっていません。

開田を指導した象徴的な人物、床濤到住や捨範叟など、開田に携わった人々を中心とした霊を慰めるための太鼓踊が中心であったので、大切な踊りとなりました。

歌詞は3分の2が、土踊の歌詞です。農民の太鼓踊なのに、土踊の歌詞があるのは、特別な理由があるのでしょうか。もう1つ、小太鼓を左手に持って踊るのは土踊の特徴ですが、七夕踊も小太鼓を使います。

太鼓打ちは矢旗を背負わず、大きく美しい花笠をかぶるのが大きな特徴です。これは大きな動きが少なくほとんど位置を変えないからです。南九州で太鼓打ちが大きな花笠を被るのはここだけです。

太鼓踊の大部分は手踊りのように踊っていて、太鼓を叩くのが少ないのは南さつま市大浦町の日新祠堂の太鼓踊（盆踊）の2か所です。

#### イ 虫追踊

虫追踊はウンカなどの稲の害虫を地区外へ追い出して、稲の豊作を願う踊りです。一般的な虫追踊は、田んぼの畔を普段着で数人が太鼓と鉦を打ちながら集落境まで追い出す行事で

す。

ところが、大里の虫追踊は、細かく踊り分け、鉦の音がリズムよく澄んだ響きが快い太鼓踊です。矢旗も高く、彩りも鮮やかなので、田んぼの畦道を行進するときは、稻田の緑に映える美しい踊りです。

## ウ 川上踊・羽島南方神社太鼓踊・荒川太鼓踊

この3つの踊りに共通するのは、山田楽です。山田楽は薩摩川内市東郷町山田が発生の地と思われる太鼓踊で、特徴は「霧島の 霧島の 一のきざはし 腰かけた」の歌があることです。短い踊りが数多くあって、隊形もいろいろ変わります。

川上踊の場合は、上組・下組とあり、お師匠さんが2人います。上・下組の代表が踊る場面は、始良市の「一丁跳び」に似ています。「荒川」という題の踊りがあり、荒川太鼓踊から取り入れたものです。

羽島南方神社太鼓踊も歌詞は「霧島の ……」を含んでいます。ここは、「山田楽」と「楽」の2つを踊ることになっています。最大の特徴は「アラマキ投げ」の行事があることです。

荒川太鼓踊は、「霧島の ……」歌詞もありますが、今は休止中です。山田楽の南限はいちき串木野市です。ここから南には山田楽は出てきません。出水地方から大分地方にかけて山田楽と言っているのは、山田昌巖が作ったという伝承を持っていますが、東郷山田楽とは別だと考えています。

藩政時代の市来郷の太鼓踊は、太鼓踊なのに「太鼓踊」という言い方は少ないです。七夕踊・虫追踊・川上踊・伊作田踊と呼ばれています。おそらく、七夕踊が作り物から長刀踊までを含んでいるため、七夕太鼓踊とはいえないので、「七夕踊」とし、他の地区もそれにならい「太鼓踊」を外したのではないかと考えられます。







# 資料編

## ガウソガウソ祭

### (一) 田植唄

- 1、今日の田植の 弁当持ちは  
縹子の帷子 表帯や縹子  
笠ははちくれ しめ緒は縹子
- 2、今日の田植えの 田の主どのは  
苗もさなぼり 田もさなぼり  
いなごどのは 植田に移りて  
秋の出穂を待つ

(串木野市教育委員会 2003 『新編 串木野市文化財要覧』)

## 羽島崎神社春祭りに伴う芸能「太郎太郎祭」

### ○羽島崎神社奉納『舟唄』歌詞

#### (一) 初唄

頭「やら目出度いな ごゆもや目出度のの」

下「エエ そらわか枝もえ エエ 栄ゆ」

頭「のいい」

下「葉も」

(二) 舟唄

一 頭「年の始めの初夢に」

下「エイきさらぎ山の楠の木を船に造りて今降ろす

エイ白金しろかね 柱押し立てて

エイ黄金のお滑車せびをくくませて手繩てなわ水繩みなわに琴の糸綾おせや

錦にしきを帆にもちて」

頭「風吹く宝の島に乗り込んで」

下「エイ万のお宝積み込んで エイ そなたの倉に収め おくうれしや」

頭「目出度いのの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいい」

下「葉も」

二 頭「伊勢いせの雀すずめが」

下「ならの渚なみぞに巢ねをかけて何なにに」

頭「といても」

下「伊勢恋し うれしや」

頭「目出度いのの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいい」

下「葉も」

三、 頭「浅間山あさまから」

下「かんばらを見れば」

頭「晒ひかりしかねたる」

下「麻布あさの布ののじゃ」(あさのののののじや)

頭「ござらぬ」

下「雪ゆきじゃもの うれしや」

頭「目出度めでたいのの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいはい」

下「葉も」

四、頭「住吉の松に雀が」

下「葉をかけてさこす」

頭「雀が」

下「住みよかる うれしや」

頭「目出度いなの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいはい」

下「葉も」

五、頭「行けど戻れど この川は淀の川瀬のたい川に」

下「エイ二十八川（にじゅうはちよかわ）ごぞいちのまに めさし揃おて櫓拍  
子をさん揃えてしんとろとろとろとろいと押し下る お船遊びをなされる  
にお酒盃あ ヨイこのこのこのこん下されるやまとのまさき繁子松山（し  
げるまつやま）あざんざんざん アヨイこのこのこのこのふなおろしごぞ  
ごぞ船かいのエイヨーほんほんほんほんどほでどおぞえはも」

頭「目出度いなの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいはい」

下「葉も」

六、頭「鞘としもついの合の白石に出潮入れ潮巻き揃うて」

下「芭蕉（ばしよ）の引き綱」

頭「もろそばらいと」

下「切れもせぬかたぞ」

頭「がかいの」

下「物思(ものおも)いうれしや」

頭「目出度いのの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいいい」

下「葉も」

七、 頭「長崎の丸山にそなた首かぶに掛く」

下「花の手拭てぬぐいい手にもちて ともともの櫓うしに踊りでて さらばさらばと押しまねく  
うれしや」

頭「目出度いのの」

下「エイ そらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいいい」

下「葉も」

八、 頭「世は平らくと治まるに ごとごとし繁昌はむかのみもないが」

下「エイ 本草もなびく 飛ぶ鳥も君に従い奉つる 諸国国ぐに大名の エイ  
館を並べ舟続く門がかいには駒の立てとも 無きよつに四方のかぐめのた  
まのどぶ光り輝く金銀の エイごこんの色も増すとかやまぎいんじよらの  
楽しむに エイこの頃 ゆかでこれまえる うれしや」

頭「目出度いのの」

下「エイそらわか枝もえ エイ 栄ゆ」

頭「のいいい」

下「葉も」

(平成26年の歌詞)

○羽島崎神社舟唄 (昭和12年の歌詞)

○ヤシ目出度しや 年の初めの初夢に

山の楠の木を船につくりて今卸す

エイ白金の柱押立てて 手綱身綱に琴の絲

綾錦を帆に巻いて 風吹く宝の山に乗り込んで

エイそなたの倉に納め置く 嬉しや

○ヤシ目出度しや

浅間山から神原見れば

さらしかねたる浅間のいちや 嬉しや

○ヤシ目出度しや

伊勢の雀が奈良の渚に巣をかけて

何と言っても伊勢恋し 嬉しや

○ヤシ目出度しや

住吉の松に雀が巣をかけて

さこそ雀が住みよかる 嬉しや

○ヤシ目出度しや

行けどもどれどこの川は淀の川瀬の代用に

エイ二十八ちよ川御在地間にめそしそらふて櫓拍子そろへて

シントロトロトロイトン下る

ヤヤ舟遊びをなさるに大阪壱はヨイコノコノ神下る

大和山崎氏の船はお御座々々々船かいな  
エーヨーホンホンホンドーデ ドデエイハモ

○ヤシ目出度しや

輶と下津井の間の白石に  
出潮人潮巻きそふて  
芭蕉の引綱 モロソパライと切れもせず  
片素ばかりの物思 嬉しや

○ヤシ目出度しや

長崎の丸山に  
そんたくびにかく花の手拭手に持ちて  
さらばさらばと押し招く 嬉しや

○ヤシ目出度しや

ヤラ太平樂と治まる御末繁昌の御代なれや  
ヤシ草木もなびく飛ぶ鳥も君に従ひ奉る  
エイ諸国国々大名の  
エイいらかを並べ門外には  
駒の立て所もないやうに  
エイ今昔の色もますと輝き無上の楽しみに  
エイ此の頃ゆかでこれ勝る

○エイ目出度しや 花の江島がかるいとなれば

たぐいよせよもの巳が宿に 嬉しや

○ヤシ目出度しや 二十四日愛宕の御縁日

愛宕様には月参る 嬉しや

(鹿児島県立川内中学校編 1979 『川内地方を中心とする郷土史と伝説・西薩摩の民謡』  
歴史図書社)

註 鹿児島県立川内中学校 昭和11年、12年刊の合本複製

※このほか、串木野市教育委員会『串木野郷土史 増補改訂版』

昭和五十七年刊、『鹿児島県文化財調査報告書第二十四集』

昭和五十二年刊などにも紹介されている。現在、歌われているものとは多少異なる。

## 祇園祭

○漢林王離子

「祇園山琉人立役賦帳」 (個人蔵)

(表紙)

「明治十二年

祇園山琉人立役賦帳

卯旧林鐘吉日 唐人町相中」

役賦

一 簀持 有川善太郎 ○

一 長刀 濱田市次郎 ○

一 御茶弁當持 加藤三四郎 ○

一 鉾持 若松寿太郎 ○

江夏仁太郎 ○

一 府板持 長谷川兼太郎 ○

江夏清藏 ○



- 一 挟箱 平川乙次郎 ○
- 濱田清兵衛 ○
- 一 王ノ葉打 江夏清太郎 ○
- 江夏休助 ○
- 一 牛ぼら 江夏亀太郎 ○
- 山口政吉 ○
- 一 ちゃんめら 久保彦次郎 ○
- 江夏嘉市 ○
- 一 どら太鼓 平川治兵衛 ○
- 永山善兵衛 ○
- 一 鐘 江夏直兵衛 ○
- 有川吉太郎 ○
- 一 四ツ竹 江夏正平
- 奥 興助 ○
- 江夏 ナオ
- 江夏 スユ
- 一 三味線 若松 ミノ
- 江夏 モヨ
- 山口ケサチヨ
- 一 鼓弓 江夏 コノ
- 江夏 コト
- 平川 ソデ
- 有川 チヨ
- 一 大鼓 久保 ヌツ
- 有川 コネ

一 睡子

濱田 ヶサキク

濱田 幸之助

同 幸次郎

久保 弥吉

○濱田 平次郎

同 林助

○有川 徳太郎

○江夏 森吉

林 萬次郎

○同 善吉

有川 吉之助

○同 末吉

内匠 袈裟市

○山口 嘉吉

有川 善兵衛

江夏 精次郎

平川 庄次郎

平川 ヲセイ

同 ヲソヨ

久保 ヲナヤ

濱田 ヶサチヨ

江夏 ヲニヲ

長谷川 ヲモソ

平川 ヲスシ

江夏 ヲセイ

濱田 ヲスガ

江夏 トメ

一王子 平川 弥太郎

一傘持 迫 李右衛門

### 道楽

- 一 アーノヤアー オキクゾーワアア○  
アーノヤアー オキクゾーワアア○  
オ キコークアーネワ○○ ○○ ○
- 二 セイガンジノボンサンターチャアア○  
セイガンジノボンサンターチャアア○  
オシノールボサン○○ ○○ ○○○
- 三 シューゼンジノボンサンターチャアアア○  
シューゼンジノボンサンターチャアアア○  
キヤクトールボサン○○ ○○ ○ ○○○

### 踊唄

- 一 ランウーヤ チョーウーウーホシ。  
チウービョーヤ キョーウーハシ。  
ワイキヤーシンビョー。  
テンナシクーイイイ

11 チューチューホン。エーナンケン。  
ケンケンリン。イツポイチュー。  
イツポイチュー。  
スイチャーヤークローン。  
オーケージンイイト

1 コーデシシカンロー。コーデシシカンロ。  
コーシイタンバクビシヤローヤロー。  
ビシヤクイコホロ チンシヤイブ。  
チンザントオオオ

11 イツケンリンケン。イーケンリケン。  
エイツウ エイツウ。  
スイケースイボオチヨー イボオチヨー。  
オンチンザイブ チンシヤントオオオ

1 カンカンノー キューノトンス。  
キコロ キコチンスー カンスナニコ  
サーアイトー ミーカンサハ  
イツピンタイタネ ヤー(ンコト)  
モエモントウ ピヤハ

王子

オーシノ

挨拶

フリースライ

ハフテモ

キンジテンキホー

ガクタイ曰く

ダチヤ コヒコヒ

踊子曰く

オーシンニ

シンニ

### 〔解説〕

「明治十二年卯年旧曆六月のよい日 祇園のヤマの琉球行列の配役の記録」で和紙を横長に折った横折帳と呼ばれる。

箆持・長刀・御茶弁當持・鉾持・府板持・挟箱・王ノ葉打・牛ほら・ちゃんめら・どら太鼓・鐘・四ツ竹・三味線・鼓弓・大鼓・踊子・王子・傘持と書いている。箆持は旗を持つ人。長刀から挟箱までは、持っている人。王の葉打は、王の葉を打つ人。

牛ほらは牛のような音を出す「ホラ貝」を吹く。ちゃんめらはチャルメラ、中国式のラッパを吹く。どら太鼓はドラの鉦の代わりに太鼓を打つ。鐘はシンバルを打つ。

四ツ竹は両手に竹をカスタネットのように持ってたたく。三味線・胡弓は弾く。大鼓は大きな鼓を打つ。踊り子は八人ぐらいいて、赤い上着を着て踊る。王子は冠をかぶり正装している。傘持は王子の頭の上に傘をさす（偉い人にはかならず傘をさす）箆持からどこまでが行列で、どこから音楽がよくわからない。

## ○カンカンノウ

### 市来町湊町の歌詞

カンカンノー キューノダンス。  
キユワキユダンスー サンスナラエ  
サーアイアー ミーカンサン  
イツピンタイタイ ヤーハンエン。  
モエモントワ ピヤハ

### カンカンノウについて

「<sup>かんかん</sup>看々踊り」は文化・文政時代（1804～1829年）に江戸・大坂（明治2年から大阪となる）で大流行した歌。江戸では<sup>まち奉行</sup>町奉行（今の警察の役などを受け持つ役所）が禁止令（踊ってはいけない命令）を出しました。

明治30年ころから「ホトカイ節」。そのあとすぐ「サノサ節」。それから次々と形を変えてはやり続ける。「むらさき節」・「くれ節」・<sup>あひらふくろうたて</sup>鳴緋江節・<sup>まんじょうぼし</sup>満州節・「とつちりちん」などとなっていた。

中国の<sup>あきつれいかた</sup>「九連環」は<sup>めいじん</sup>明清楽（明と清時代のみんが歌っていた歌で、<sup>げつご</sup>月琴（三味線の四角い<sup>うろ</sup>胴が丸いお月さまのようなので月琴という、<sup>ことう</sup>琴より三味線に近い楽器）の<sup>ばんそう</sup>伴奏で歌う）代表の曲で、江戸時代の終わりころから明治30年ころまで流行した。「九連環」は九つの環<sup>わ</sup>でできた「<sup>ちえ</sup>知恵の環」のこと。

### 元の歌の歌詞

<sup>かんかん</sup>看々也。<sup>あきつれいかた</sup>賜奴的九連環。<sup>あきつれいかた</sup>九呀九連環。<sup>あきつれいかた</sup>雙手拏來 <sup>あきつれいかた</sup>解不開。

<sup>あきつれいかた</sup>擊把刀兒割。<sup>あきつれいかた</sup>割不斷了也々啣。<sup>あきつれいかた</sup>割不斷了也々啣。

<sup>あきつれいかた</sup>誰人也。<sup>あきつれいかた</sup>解奴的九連環。<sup>あきつれいかた</sup>九呀九連環。<sup>あきつれいかた</sup>奴就與他做夫妻。

<sup>あきつれいかた</sup>他門是不男。

男子漢了也々呦。 男子漢了也々呦。

群馬県上野村乙女地区にも「カンカン踊り（「カンカンノー」ともいう）」が伝わっている。上野村の江戸時代の頃からの「カンカン踊り」のくわしい歴史は『上野村誌』に書かれている。

## 上野村の歌詞

カンカンノー キユウノテ（リ）ス  
キユウキ（キユウ）デス サンシヨナラエ  
サアイホオイ ミイカンサン（ミイカンズ）  
イツピンダイザ（ダ）イ ヤハハノロ  
チンピガカラクテ スイカンサン（ズ）  
トテツラ シヤンシヤン トテツラ シヤンシヤン  
（オヤステツルシヤンシヤン オヤステツルシヤンシヤン）  
〔（ ）内は別に伝えた人の歌い方〕  
（『上野村誌』116～123ページ）

## 市采の七夕踊

### ○七夕踊のうた

一、千歳まで

◎ 限れる松も、今日よりは

君にひかれて、万代や経ん

二、様は、生絹なまぬいの染小袖

一重心で、うらめしや

あわれわが身が舟ならば

思う彼の様、乗せあげて

風夜、なるとも、我が宿に

(何れ、憂き身や)

三、 雲の、絶間の、三日月か

その面影を、みしよりも

心は消え消え、消え入るを

その身はさて何となるかを

◎ 願ねがいはなくとも

とどろんと鳴る神は

何と、その身は落ちるね

嫌なら嫌ともおしやらぬ

その身は何となるか

四、 佐渡と越後は、筋向い

橋を架けたや、舟橋を

◎ 聞けば佐渡島、離れ島

越後風で、寒ごぞる

(何れ憂き身や)

五、 尽きもせん

◎ 君が齢は、いつの代も

変わらぬ松の色にこそあれ

六、 愛宕参りに、袖も引かれた

それも、愛宕の、御ゴ利エ生ツかな

御目出たや、色の方かな

◎ 沖に釣りする、漁火か

その面影を、見しよりも

心は、消えきえ、消え入るを

その身は、さて、何となるかな

七、 ここで、よし世は終るとも

あでし在はず、御前の



差した刀の、役立つ（じゃ）程に

◎ 千代に八千代は経るとも

貴し在わず、御前の

君が治めた、国じゃ程に

（市来町教育委員会「市来町郷土誌」1982年刊）

※このほか、鹿児島県立川内中学校「西薩摩の民謡」昭和12年刊などにも紹介されている。

## 羽島南方神社太鼓踊

### ○演目

	楽	山田楽
一	モンガカリ	モンガカリ
二	イリハ	チャンチャコ
三	一番の引廻し	コンキヤン
四	コガク	ロゴランノアネ
五	ズイ	カタセキ
六	ヤベ	一番の引廻し
七	ナゲガク	コガク
八	二番の引廻し	ズイ
九	クチマネ	ヌケ
十		タンキヤン
十一		ロゴラン
十二		スベリアシ
十三		ロゴランクズシ
十四		カシラウチ
十五		ヤベ

- 十六                      ナゲガク
- 十七                      二番の引廻し
- 十八                      クチマネ

## 南方神社太鼓踊り ベカズ

### ○ 鉦と太鼓の打ち方の区別

ガン・ガゴ	鉦と太鼓が同時に打つ
ガン・ズー	太鼓だけが打つ
キヤラ・コン・キヤン・ チン・コロ	鉦だけが打つ

### ○ ニワイリ (庭入)

コカン コカン・・・キヤン キヤン キヤン キヤン ズシ キヤン キヤン

キヤ ラ ラン

(ヤーサツ) ガゴ ガゴ ガゴ ガン ガゴ ガゴ ガゴ ガン

1カラ 2カラ 3カラ 4カラ ズシ キヤン キヤン キヤン キヤン ズシ

キヤン キヤン キヤン キヤン キヤ ラ ラン キヤン

### 楽 (ガク)

#### 1 モンガカリ (門掛り)

(ヤーサツ) ガン ガン ガン ガゴ ガン ガン ガゴ ガゴ ガン ガン

ガゴ ガン ガン ズシ キヤン キヤン キヤン ズシ キヤ ラ ラン キヤン ズシ

キヤ ラ ズシ キヤ ラ

## 2 イリハ

(ヤーサツ)ズシ キヤン キヤンズシ キヤウ ラン キヤンズー ズシ キヤン キヤンズシ キヤウ ラン キヤンズシ キヤウ ズシ キヤウ ズシ キヤウ ラン キヤンズーズーズー キヤウズー キヤウ ラン キヤンズシ キヤウ ズシ キヤウ ズシ キヤウ ラン キヤン

## 3 一番の引廻し

(ヤーサツ)ズーズー キヤウズー キヤウ ラン キヤンズシ キヤウ ズシ キヤウガシ ガシガシガシガシガシガシズー キヤウズー キヤウズーズーズーキヤウ ズシ キヤウコロキヤウコロキヤウコロキヤウ ズシ  
キヤウコロキヤウコロキヤウコロキヤウ

## 4 コガク

(ヤーサツ)ガシガシガコガシ(サ一)ガシガシガコガシ  
(サ一)ズシ キヤウズシ キヤウズシ キヤウラン キヤンズーズシ キヤンキヤンズーズシ キヤンキヤンズシ キヤウズシ キヤウ  
ズシ キヤウズシ キヤウ  
ズシ キヤウラン キヤンズシ キヤンキヤンキヤウラン (ヤーサツ)  
(ヤーヨイ)1カラ 2カラ 3カラ 4カラ 5カラ 6カラ 7カラ ラン  
ガコガコガシ

## 5 ズイ

キヤンキヤウ キヤンキヤウ キヤンキヤウラン キヤン×2  
キヤントキヤント(ア〜ンイシヤ〜)チンチンココココココココ

チン チン コン コン コン コロ コン コン チン コロ コン コン チン コロ コン  
 チン コロ チン コロ チン チン コン コン タナバタド  
 (サツ) タナバタド カラ ナー ト  
 (サツ) シヨウ ロウ ドン (サツ) シヨウ ロウ ドン

## 6 ヤズ

(ヤーサツ) ズー ズシ チヤン チヤ コ ズー ズシ チヤン チヤ コ ズー ズシ  
 カン カン チン コン チヤン チヤ コ ズシ キヤラ ズシ キヤラ  
 カン カン チン コン チヤン チヤ コ

## 7 ナゲガク

(ヤーサツ) ガン ガゴ ズシ キヤラ ラン (サー) ズシ キヤラ ズシ キヤラ  
 ガー ゴー ガン (サー) ズシ キヤラ ズシ キヤラ ズシ キヤラ ラン (サツ)

## 8 二番の引廻し

(ヤーサツ) ズー ズー キヤン キヤン キヤン キヤン ズー ズー  
 キヤン キヤ キヤン キヤツ ズー ズー キヤン キヤン ズー ズー  
 キヤン キヤン ズー ズー キヤラ ズー キヤラ ラン キヤン ズー キヤラ ズー  
 キヤラ ガン ガン (サツ) ガン ガン ガ ガン ガガン

## 9 クチマネ

(ヤーサツ) ズー ズシ キヤン キヤン ズシ キヤラ ラン キヤン  
 ズー ズシ キヤン キヤン ズシ キヤラ ラン キヤン  
 ズシ キヤラ ズシ キヤラ ズシ キヤラ ラン キヤン  
 ズシ キヤラ ズシ キヤラ ズシ キヤラ ラン キヤン

○ ウチキリ (打切り)

山田楽 (ヤマダガク)

1 モンガカリ (門掛り)

(ヤーサツ) ガゴ ガゴ ガン ガゴ ガゴ ガン ガン ガン  
ロ カン ロ カン キヤン キヤン ズシ キヤラララ... ズシ キヤラララ...  
ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ズシ キヤンキヤンキヤン  
ズシ キヤン キヤン キヤン キヤン キヤ ラ ラン キヤン

2 チヤンチヤコ

(ヤーサツ) ブー ブー チヤン チヤ コ ブー チヤン チヤ コ ガン ガン ガン  
チン コロ チン コロ チン コロ カン カン カン カン コロ カン

3 ウチキリ (打切り) コンキヤン

コン キヤン コン キヤン コン キヤン キヤン ト ブー ブー ブー ブー  
(サー) ガン ガン (サー) ガン ガン (サー) ガゴ ガン ガン ズシ

4 ウチキリ (打切り) コゴランノマネ

コウ コウ ラン キヤン (サー) コウ コウ ラン キヤン  
(サー) タン トン タン トン タン (ヤーサツ) ブー ブー ブー

5 ウチキリ (打切り) カタセキ

(サー) ガン (サー) ガン (サツ) ガン ガン (サツ) ガン ガン  
(サツ) ガゴ ガン ガン ズシ

6 一番の引廻し (ガクと同じ)

## 7 コガク (ガクと同じ)

## 8 ズイ

キヤン キヤン キヤン キヤン タ ナ バ タ ドン チン コ ロ チン コ ロ  
チン チン コン コン チン コン コン キヤン キヤン タ ナ バ タ ドン  
(サツ) タ ナ バ タ ドン カラ ナ イ ト (サツ) シヨウ ロウ ドン (サツ) シヨウ ロウ ドン

## 9 スケ

(ヤーサツ) ガ ガン ガ ガン ガ ガン ガン ガ ガン ガ ガン ガ ガン ガン  
(サー) ズー ズシ チヤン チヤ コ ズー ズシ チヤン チヤ コ  
ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ラン キヤン  
ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ラン  
ズー ズー キヤ ラ ズー キヤ ラ ラン キヤン キヤン

## 10 タンキヤン

(サー) タン キヤン (サー) タン キヤン (サー) タン キヤン  
キヤン ト ガン ガン ガン ガン (サー) ガン ガン  
(サー) タン キヤン (サー) タン キヤン (サー) タン キヤン キヤン  
(サー) ガン ガン (サー) ガン ガン (サー) ガ コ ガン ガン ズシ

## 11 コゴラン

タン トン タン (サー) タン トン タン (サー) タン ト  
ン タン (サー) ズー ズー 16回繰り返す

## 12 スベリアン

(サッ) タン トン ターン ズシ キヤン キヤン キヤン ズシ キヤン キヤン キヤン  
ガン ガン ガン ガン ガ ガ ガン ガ ガ ガン

### 13 コゴランクスズシ

ガン ガン ガン ガン ズシ キヤン キヤン キヤ ラ ラン  
(ヤッサッ) ガ コ ガーん ズシ キヤ ラ ラン カン カン チン コロ チン コロ カン  
(サ一) ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ズシ キヤ ラ ラン  
コロ カラ コロ カラ コロ カラ カン  
(サッ)

### 14 カシラウチ

カミ (サ一) ガン (サ一) ガン (サ一) ガン (サッ) ガン  
ガン (サッ) ガ コ ガン  
(サッ) タン トン タン トン タン (ヤッサッ) ズー  
ズー ズー  
シモ (サ一) ガン (サ一) ガン (サ一) ガン (サッ) ガン  
ガン ガン ガン ガン  
(サッ) タント コ タン トン ターン ト  
(ヤッサッ) ズー ズー ズー

### 15 ヤベ (ガクと同じ)

### 16 ナゲガク (ガクと同じ)

### 17 一番の引廻し (ガクの同じ)

18 クチマネ (ガクと同じ)

19 ウチキリ (打切り)

## 虫追踊

### ○虫追踊唄

歌一 奥山のかすら男の子が出て問わば

さわりはつせて なしと答える

強者が居ることを知らじ そこをたちのけ実盛の虫

一 吉野桜 北野の梅 虎若様に世もまえる

若殿様の おじやるを見れば

ぼたんの花の つぼむが如し

三 沖のカモメにも問えば 我は立つ鳥 波に問え

橋の白雪 鶴の鳥が こいをくわえて橋よやなす

(市来町教育委員会『市来町郷土誌』1982 801～802ページ)

## 石当節

### 石当節の歌詞

一 祝いめでたや ウンヤシ

串木野鉦山 黄金花咲く 金が出る

二 山も続けよ ウンヤシ

鉦脈も続け 頼む親方 金続け

三 なんぼ叩いても ウンヤシ

穿座がつかぬ 石が堅いのか 手の業か

四 石当振らせて ウンヤシ



後うしろから見れば 様ようじゃなけれど 可愛かわいござる

五 手はカンテラ ウンヤシ

寸すん法ぽう繩なは腰こしに 斧きりをかたげた ほどのよき

六 鉢はち夫おとこさんたちや ウンヤシ

鉢はち山やまから鉢はち山やまへ 花はなの都みやこにや 縁えんがない

註 くさり || 鉢脈はちみやくがつながっているから「くさり」という。

穿うら 座ざ || 穴あなを掘ほること。

寸すん法ぽう繩なは || 長さをはかる繩なは。金鉢山かねはちやまをやまといった。

花はなの都みやこ || 京都とか江戸（東京）のこと

囃はし子こ二にことば（1と6の後につける）

ソーラ 一寸いっすん先さきや聞きじや 鑿うの頭びんどやせ も一つ添そえちよけ

穴あな下したがれ

ソーラ 一寸いっすん先さきや聞きじや 一寸下いっすんがれば お前まへさんと分け取とい

も一つ 添そえちよけ 穴あな下したがれ

註 どやせ || たたけ

穴あな下したがれ || 深く掘ほれ

石当節いしあてふしに合わせて歌われる歌

一 ハーエー 向むかうを通とほるは エー 鉢はち夫おとこさんじゃないか 金かねがこぼれる 袂たもとから

ハーエー 鉢はち夫おとこさんにや エー どこ見て惚ほれた 仕事しごと帰かえりの 汚よごれ顔かほ

(囃子) お前まへさんが傾かたじや 覚おぼえん傾かたじや 髪かみに火かがついてん 覚おぼえん傾かたじや

二 ハーエー 鉢はち夫おとこさんたちや エー 鉢はち山やまから鉢はち山やまへ 花はなの都みやこにや 縁えんがない

三 ハーエー 石当いしあて振ふらしてよー 後うしろから見れば 様ようじゃなけれど 可愛かわいござる

(囃子) ハラ おんじよくんは ニセけ

思つた二七なら 膝もつてずいと来い

四 ハーエー 鉦夫すればこそ なぐれもんといえど 末は見込みの ある体

(雌子) ハラ 一寸先や聞じゃ 鑿の頭どやせ

三寸下がらにや 妻子はかいじゃ

ハラ 一寸先や聞じゃ その次や金じゃ

註 様じゃなけれど かつこよくないけれど

おんじよ 年寄り

二七け 若者は来い

なぐれもん おちふれた者

かいじゃ 養えない

## 須賀の相撲踊

### ○相撲喜句

松の照島 波打つ磯にヨ 晴れの相撲終えたなら

しばしの別れ 名残りをば 惜しみながらも船の上

見送る涙 知らぬげに 笑顔で握る錨綱

島平港を後にして 潮路遥かな三陸の海 海猫飛び交う波枕

赤道のぞめば 南海の 逆巻く怒濤 波しぶき

負けずに吾ら 元気にて 大漁旗立て帰ります

どうぞ皆様 留守中は ご無事安泰いや栄え

今日の土俵で ヨーホホイ 祈りますゾエー

船は出て行く島平港 愛し思いを胸に秘め

別れて行くは西東 黒潮つずまく紀州灘

鴨飛び交う波の瀬に 今日暮れ行く南海の

青い月見りや思い出す 可愛いあの子の片えくぼ

暎ににじむ露の玉 激浪波浪もなんのその

薩摩男児の意気晴れて 入港のその時は

きつと大漁で ヨーホホイ 帰りますゾエー

此処に揃いし踊り見衆は 島平青年その中で

一番きれいな体持ち 雨風潮にたたかれて

肌は赤銅さながらに ふたん剛気の男ありて

強いようでも気はやさし その娘さんよく見とけ

男持つならこんな方 鉄の腕にいだかれて

夜は秘めごと夢まるく 結ぶ楽しさ面白さ

父さん母さん若婿に 選びやんせよ ヨーホホイ

踊り見衆をエーエーエー

島平港の 船の名呼べばヨー

恵比寿大黒 その恵受けて 宝の宝栄が

春風満帆の天春と あまねく大洋南海に

拓きて進む南進よ 笑顔で帰る笑福や

其の意気盛んな福盛丸 福で栄える福栄に

福を寿ぐ福寿丸 松は緑の松栄や 薩摩印の松源や

郷土の栄え長久に 喜び多き多賀丸と

嗚もしたつ千鳥丸

掬た船大漁の 願いを込めて此の甚句

力士一同はヨーホホイ 歌いますゾエー

夢かうつつか さてまぼるしかヨー

寝<sup>ね</sup>ても覚<sup>さ</sup>めても苦<sup>く</sup>勞<sup>らう</sup>さす

船<sup>ふね</sup>乗<sup>のり</sup>さんには どこが良<sup>よ</sup>くてほれたヨ一

仕<sup>し</sup>事<sup>じ</sup>帰<sup>かえ</sup>りの意<sup>い</sup>気<sup>き</sup>のよさ

相<sup>あ</sup>撲<sup>ぶく</sup>にや負<sup>ま</sup>けても 怪<sup>け</sup>我<sup>が</sup>さえなけりやヨ一

晩<sup>ばん</sup>は私<sup>わたし</sup>が負<sup>ま</sup>けてやる

逢<sup>あ</sup>えば瀬<sup>せ</sup>なんだか ゼニス<sup>ゼニス</sup>の沖<sup>おき</sup>で

薩<sup>さつ</sup>摩<sup>ま</sup>作<sup>し</sup>りの主<sup>しゅ</sup>の船<sup>ふね</sup> 櫓<sup>ぶし</sup>太<sup>たい</sup>鼓<sup>こ</sup>にふと目<sup>め</sup>を覚<sup>さ</sup>ましヨ一

明<sup>あ</sup>日はどの手<sup>て</sup>で投<sup>な</sup>げてやる

註 歌詞は昭和の初めの作であろうか。昭和40年前後の船名を記しておく。

大黒丸・宝栄丸・天春丸・南海丸・南進丸・笑福丸・

福盛丸・松栄丸・丸十九丸（松源）・長久丸・多賀丸・千鳥丸。

## 本浦の相撲甚句踊

### ○相撲甚句踊の歌詞

（最初の場面の三味線歌）

串<sup>くし</sup>木<sup>ぎ</sup>野<sup>の</sup>港<sup>みなと</sup>は 入<sup>い</sup>り船<sup>ふね</sup>出<sup>で</sup>船<sup>ふね</sup> かわい<sup>かわい</sup>妻<sup>つま</sup>子<sup>こ</sup>が迎<sup>むか</sup>い出<sup>で</sup>る

嬉<sup>うれ</sup>し目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>たの 若<sup>わか</sup>松<sup>まつ</sup>様<sup>さま</sup>よ

な<sup>な</sup>あ 枝<sup>えだ</sup>も栄<sup>さか</sup>える 葉<sup>は</sup>も茂<sup>さか</sup>る

串<sup>くし</sup>木<sup>ぎ</sup>野<sup>の</sup>よいとこ いつでもおじやれ

な<sup>な</sup>あ 美<sup>ひ</sup>人<sup>じん</sup>ぞろいで 愛<sup>あい</sup>嬌<sup>きょう</sup>もあるよ

### ○相撲甚句の歌詞

(一) 相撲甚句

一 そろうた そろいもした 関取衆がそろうた

秋の出穂より まだよくそろうた

二 もうや これより 切り替えて

今のはやりの 三羽三つ拍子

註 出穂 穂が出た稲

(二) 船名甚句

一 串木野港の 船の名読めばよ

松の緑の 松栄丸 浜はざんぶり 若潮が

男度胸の身をゆする

沖の 初潮 朝潮か 三栄あれば 勝栄で

近代装備の 重徳が 七つの海を征服し

荒田八幡 政吉が 大漁喜ぶ 喜漁丸

風はそよそよ 福栄丸

幸徳丸には 夢乗せて 幸栄あれや

明日の日も ぶるえ 興洋国の基よ

二 船名甚句を 続けて読めば 佐多の岬を後にして

はるかに望む 南海の 黒潮おどる 龍生丸

南十字を 豊海に 赤道越えて 大洋丸

天気がいければ 丸六で 波を枕の 海龍丸

怒濤もどんとける 天龍丸

嵐もやがて 好天し

鏡の海を共に進むは鏡進か

鮪は満船旗の波 藤崎回れば勝栄丸

朝日に光る錦哉も 夢は飛ぶ飛ぶ古里へ

愛しあの娘は松福恵比須顔

月もまるわか若潮で 理想も幸遠永久に

我が串木野の水産業

(歌詞に出る船名。昭和40年前後)

松栄丸・若潮丸・初潮丸・朝潮丸・三栄丸・勝栄丸・重徳丸・

政吉丸・喜漁丸・福栄丸・幸徳丸・幸栄丸・興洋丸・龍生丸・

豊海丸・大洋丸・丸六丸・海龍丸・天龍丸・鏡進丸・錦哉丸・松福丸

### (三) 出船甚句

眺めも清き恵比須が丘に 晴れの相撲も終えるなら

しばしの名残り別れをば 惜しみながらも船の上

見送る涙知らぬげに 笑顔で握る錨綱

五色のテープは風まかせ 別れの汽笛が身にしみる

串木野みなどを後にして 潮路はるかなインド洋

白波けたてて幾千里 波を枕の夢悲し

かもめ飛び交うその中を 昨日は東 今日西

逆巻く怒涛波しぶき この身は寒さに凍るとも

負けずに我等元気で 紅葉色づくその頃は

大漁旗立て帰ります どうぞ皆さん留守中は

御無事安泰いや栄え 今日の土俵で祈ります

今日の土俵で祈ります

註 恵比須ヶ丘 申木野漁港を見下ろす丘

いや ますます

(四) 入船甚句

夕焼<sup>ゆが</sup>け色どる南の沖よ 満船大漁の旗立てて

船足深く来る船は あれは申木野鮪船

長い航海さぞやつれ 逢いたい見たいは皆同じ

電波は飛ぶ飛ぶ古里へ

波路はるかに種子屋久か 浮き立つ島は数々の

煙たなびく硫黄が島

風上にのぼれば日向灘 朝日に輝く桜島

北にぞびえる高千穂や 南はるかに眺むれば

姿うるわし薩摩富士 野間の灯台後にして

船路は急ぐ薩摩潟 日立が丘の山々も

近くなるか海鳥は 群組ながら飛んで行く

ああ懐かしや申木野港 一歳の旅路もつれづれに

無事で帰れた嬉しさに 迎えるあの娘は

笑顔 恵比須顔 明日の大漁夢見つつ

想いは同じおしどりの

愛と情との錨綱 愛と情との錨綱

註 薩摩富士 開聞岳

錨綱 しっかり結びついているたとえ

(五) さのさ甚句

船乗りさんには どこ見て惚れた 踊る甚句の粋のよさ

申木野みなどに 船が百隻着きや 帆柱も百本本

止まるカラスも同じ百羽羽

雀がチユ カラスがカア

トンビがほだね吹きや ひんするする

註 ほだね＝火種

ひんする＝悪いことが起る

## 土川左官踊

### ○掛け合いのことば

三味線弾きが「トザイ トザイ (東西 東西)」といつて

ハンヤ節をひきながら出てくる。

親方 コゲンモ 忙シカ コツツハ コロハン

(こんなんにも 忙しいことは ありません)

マコテ コノゴラ エツクイバツカイデ

(ほんとに このころは 家作りばかりで)

アツチカラモ キテクレ コツチカラモ キテクレデ

(あちらからも来てくれ、こちらからも来てくれで)

引ッパイダコデ 体ハイクツアツテモ タツシンハン

(引つ張りだこで 体はいくつあつても 足りません)

ウツタイ モタイ ケマワツタイ

(打つたり 舞つたり 回つたりして)

盆モ正月モ ナカツツハ

(盆も正月も ないというのは)

アタイガコチヨ エツタモンゴロハン

(私のことを言つたものでございましょう)

ソイドン ムカイノシガ カセダエツチ

(それでも、昔の人が 移きなると)



ヒンヤゴロハ ナツカモンデ  
(貧乏人には、なりたくないですから)

イツペ キバイモハンナラ  
(精一杯 がんばらなければ)

アタイモ コノ道ヨ踏ンデ アシカケ50年  
(私もこの道〔左官〕をして、あしかけ50年)

モウ テゲイナゴロハ 足ヨ洗ワシナナランモンドン  
(もう大概なころは左官をやめないといけないと思います)

コラマタ シヤバ 世間ノ人タツガ  
(これはまた、娑婆・世間の人たちが)

ヤツパイ 今トツノ若ツカシヨカ  
(やっぱり今どきの若い人たちよりも)

ムカイノ 年トツタ 腕イナ スガネガ  
(昔の年を取った腕には 筋金)

イツテヨカ イイヤイモンジャンデ  
(入って よいと言われるものですから)

イツコ ヤメガナイモハン  
(一向にやめることができません)

オトキチ (弟子の名) クイノンハマシシヤ  
(乙吉、串木野の浜の人では)

ナカイドン 難儀ジャツドン 気張ツテクレネ  
(ないけれど、難儀だが がんばってくれね)

弟子 サテサテオヤツドン ひと月35日 働ケバ  
(さてさて親方殿、1か月35日働けば)

ナイモ シンパヤ イランガ  
(何も心配は要らないが)

コノドンジアイデ ペッタ ペッタ  
(この大きな足で ペッタ ペッタ)

踏<sup>ふ</sup>ンデヤツデ 塗<sup>ぬ</sup>ランヤ 塗<sup>ぬ</sup>ランヤ  
(踏んでやるから 塗りなさい 塗りなさい)

オイモ今カラ オメラ持タナナランデナア  
(おれも今から嫁を持たないといかんからなあ)

**親方** ナイ モへ オメラモラオチヤ  
(なに、もう嫁をもらうのかい)

オイガ見タ目シヤ チツタ早カログタツドネ  
(おれの見た目では、少し早いようだけどね)

ソイドン ヨカガ オイゲンソベ ケサガメガ オツデ  
(それでもよいが。おれの家のそばに、ケサガメさんがいるから)

ソノケサガメラ モロテクルツデ  
(そのケサガメさんをもらつてやるから)

キヌツテモ 石ガツノ ビンタカラ  
(一昨日も石垣の上〔頭〕から)

ヒヨッコ ヒヨッコ ツラヲ出シガトモチヤツタヤ  
(ひよこ、ひよこ顔を出すがと思つていたら)

ドシテン ワレ シチヨタモンシヤ  
(どうしても、お前に好いていたんだ)

ソノカワイ 気張ラント オメンクチヤ  
(その代わり、がんばらないと、嫁の口を)

ヤイノテ イキヤナラシド  
(養つていくことはできないぞ)

**弟子** ハテ ソントキヤ ワカツチヨツドガ  
(はて、その時は わかつているでしょうが)

ヨイモ ヒイモ 氣張ツトオ  
(夜も昼も頑張りますよ)

親方へエ、ジヤイカ、ソシナラ ソイノイツゴンデ ヤロワイ  
(へえ、そうか、それなら その意気込みで やらうや)

(三味線・太鼓で踊り出しながら)

弟子 オヤツドン テンドドンナ ニイノ ウンニ  
(親方、天遣殿〔太陽〕は西の海に)

ヒツチヤエラツド、早ヨ モドラント  
(落ちられるよ。早く戻らないと)

ダイヤモンドガ マツチヨツド  
(ダイヤモンド〔晩酌の焼酎〕が待っているよ)

親方 アラ、ジヤイカ ソシナラ モウ ヤムワイ  
(あら、そうか。それなら もうやめよう)

キユモ イツペ 氣張ツタネ  
(今日も、いっぱいがんばったね)

キユモ スツカッタデ 汗ガ出タイネ  
(今日も暑かったので、汗が出たよね)

戻ッテ、風呂ドン 入ッテ  
(戻って、風呂でも入って)

ダイヤモンドガ、ウンマカロネ  
(ダイヤモンド〔晩酌の焼酎〕が うまいだろうね)

(三味線・太鼓のハンヤ節で踊る)

### ◇ハンヤ節の囃子

(弟子へ) 大カ ドンジ足デ ソラ 踏メ 踏メ  
(大きい大きい足で、それ、踏め踏め)

イツペ 踏メ 踏メ

(一生懸命 踏め踏め)

(親方へ) ソラ 塗レ 塗レ イツペ塗レ  
(それ、塗れ塗れ、一生懸命塗れ)

キワドイ所ヲ 塗ランセ 塗ランセ  
(隅の方を塗りなさい、塗りなさい)

(弟子へ) 暑クテ タマラン キモンモ 脱ギヤレ  
(暑くてたまらん。着物を脱ぎなさい)

水ヲバ カケヤレ、固クテ タマラン  
(水を掛けなさい。固くてたまらん)

水ヲバ カケヤレ、ソラ 踏メ 踏メ  
(水を掛けなさい。それ、踏め踏め)

(親方へ) 腕ハ隆々、仕上ゲラ 見ヤンセ  
(腕はたくましい、仕上げを見なさい)

親方タイシヨテ 弟子ドンが踏ンバル  
(親方は大将で、弟子殿が踏ん張る)

ソラ 塗レ 塗レ ソラ 踏メ 踏メ  
(それ、塗れ塗れ、それ、踏め踏め)

(ハンヤ節を4回ほど踊ると、ハンヤ節に合わせて帰っていく。そのときの囃子)

サエンバタケノ サヤマメハ ヒトサヤ ハシレバ ミナハシル  
(菜園島〔庭の島〕の鞘豆は一鞘はじけると 皆はじける)

ワタンヤ オマエサンニ ツイテ ハシル  
(私はお前さんについて、走る)

## 棒踊の歌い方

### (一) 歌詞の歌い方

「ヒートホオ・・・ホーホモトホナーエ」

「サアーナハハハエ・・くく・・ワハハアエーくーく (ヤレ)  
 ヒトモトナハアハエエ・・くくくワ (ヤアソレ) ヨーホホ、  
 ホオデヘエナア、サーハ ヨーホネくくガハエ  
 くンエエく、くノホオヨホホ ハーハラ (ソイ) ハーハラ (ソイ)  
 ンハハアハ ハチーヒヒイ イイ ヒイコーホオ」

(ひともとなえわよねがはちこお＝一本苗は米が八石)

註 太字を強く読む。他は、合いの手や長く伸ばした音。

太字だけを読むと歌詞になる。

## (二) 棒踊のよく歌われる歌の歌詞

- 1 後は山で 前は大川
- 2 山太郎がねは 川の瀬に住む
- 3 焼野の雉は 山の背に住む
- 4 清めの雨が ばらいさらいと
- 5 抱き合つて寝れば 月が冴え込む
- 6 一本植えた(苗は) 八穂で八石
- 7 鎌の柄が折れた 三束遅れた
- 8 霧島松は 黄金花咲く
- 9 東雲は嫁が 名が立つ
- 10 せのじよが浜は 砂の目の数
- 11 七柱は 笹の目の数

(歌は、肥後精一『冠岳見聞録』から)

## 明治18年頃の棒踊の記録

### 『入来定殺日記』抜粋

註 『入来定殺日記』は串木野麓の元郷士の明治16年から大正元年までの日記

七月十一日旧五月二十九日晴

一下人助ハ兒玉氏次兵衛ヲ加勢ニ受、屋迄ハ肥取ナリしも、御田踊有之由ニ而、昼・  
諏訪庭ニ而、踊ナラシ有之候事。

#### 〔解説〕

使用人の助（助次郎とか助之進とかいう名前だけれど、使用人だから「助」だけで呼ぶ）は兒玉家の次兵衛の加勢を受けて、屋まで肥え（人糞）を汲んでいたけれど、「お田踊（棒踊のこと）」があるので、昼から諏訪神社（現在の南方神社）の境内で、「踊ナラシ（踊の練習）」に行った。

七月十二日旧六月朔日晴

一招魂祭ニ付、昼前参詣いたし候。尤、御田踊有之候ニ而、都合八組計りナリ。  
右参詣ヨリ帰りテ、又、長谷場氏ニ至り、堂ノ馬場ニ而、踊りシヲ見タリ。  
但下人助も踊りタリ。

#### 〔解説〕

招魂祭（戊申の役＝京都の伏見から始まった戦い）なので、昼前にお参りました。「お田踊（棒踊）」があつて、全部で八組ばかり。お参りから帰って、長谷場家に行くと、堂の馬場（現在の長谷場家の前の、串木野氏の墓へ行く通り）で、棒踊りを見た。使用人の助も踊った。

七月二十一日旧六月十日晴

一今日は、五反田招魂祭ニ付、重彦をつれ、九時比差越、十一時比祭典相済、暫時歸家、  
昼飯ヲ喫し、又、行掛、宮地源兵衛方江立寄、差越候処、無程、ヲタ踊参り、  
第一番ニ大團方限ニ而、跡山ハ千本桜小金吾権拾ひノ場。

第二番ハ馬込方限り二面、跡山ハ、シガタン七敵打。

三番ハ野下組棒踊り而已。

四番ハ内田方限り二面、跡山ハ彦山権けんナリ。

しかして、拙者ハ未夕夜二人らざる前、重彦ヲつれ帰りタリ。

但踊りニハ、正中一升、金十匁ヲ給セリ。

一今晚、大團組ノ踊り参り候ニ付、正中ト金十匁花ト々給セリ。

### 〔解説〕

五反田の招魂祭（十年の役＝西南の役を祀る。今の山神浄水場の西側にあつた）なので、息子の重彦（六歳）を連れて、九時ごろ行き、十一時ごろお祭りが終り、しばらく家に帰った。昼飯を食べ、また、行く途中、宮地源兵衛家へ寄つて招魂社へ行くど、すぐに「ヲタ踊（棒踊）」が来た。

一番目は大團地区の棒踊。跡山（アトヤマ＝おもしろい踊りや芝居）は「千本桜小金吾権拾いの場」という題の芝居であつた。

二番目は馬込地区（河内の東側）で、アトヤマは「志貫団七の敵打ち」だった。

三番目は野下（樋脇町）の棒踊だけ（アトヤマがない）

四番目は内田地区（生福）の棒踊。アトヤマは「英彦山権現」だった。

けれど、私はまだ夜になる前に重彦を連れて帰った。棒踊のそれぞれの組に、焼酎一升と十銭のハナ（祝儀）を渡した。

今晚、大團地区の棒踊が家に来て踊つたので、焼酎とハナ十銭をやつた。

## 棒踊一覧表

### 棒踊が行われている所

番	場 所	棒・列・組	いつまで	アトヤマ	開催日	開催場所	その他
1	川上(久福)小 学校	6尺だけ2列 4人組	昭和55年 復活～	×	秋	運動会	小学生全員で踊る 歌はCD
2	生福 上石野	6尺だけ 4人組		×	田植え後 十五夜 冠岳山市	祝賀で	紫頭巾を被ぶる 歌はテープ
3	生福 坂下	6尺だけ 6人組		×	祭など 依頼時	大日堂 六月灯	女性が踊る
4	下名 平江	6尺だけ 6人組		有「鈴ヶ森」「忠 臣蔵山崎街道」	9月15日	敬老会	昔田植え後、「お田踊」夜「田祈念」に
5	荒川	6尺だけ3列 6人組		×	秋	運動会 地区文化祭	川内宮里から習う、「宮里棒」という。昭和50年荒川 小3～6年が運動会で踊る。 平成25年から女性が地区文化祭で踊る。
6	下名 大原南	6尺だけ		×		住吉公園 集落を回る	冠岳岩下棒踊を受け継ぐ。歌はCD

(2014年 現在)



棒踊が休止、もしくは行われなくなった地区

番	場 所	棒・列・組	いつまで	アトヤマ	開催日	開催場所	その他
1	川上 中之平	6尺と3尺	昭和初	×		祝・行事で	
2	川上 平木場	6尺だけと 鎌と3尺	昭和初	有(冠岳から師匠)			
3	大里 弘山	6尺と3尺 1 → 2 → 3 → 1 列 (段々早く)	平成14年 (休止中)	有			喜入の人に習う。万国博に出た。お田踊と言った。
4	冠岳 宇都	6尺だけ	×		7月	冠岳神社 馬頭観音	
5	冠岳 岩下	6尺だけ 6人組	×		7月	冠岳神社 馬頭観音	大原南が引き継いでいる。
6	冠岳 川畑・松下	鎌と3尺 6人組	×	有(川内から師匠)	7月16日	冠岳神社 馬頭観音	
7	生福 福菌	6尺だけと 6人組	昭和25年	有「亀取り」			

番	場 所	棒・列・組	いつまで	アトヤマ	開催日	開催場所	その他
8	生福 小園		戦前	×			大園と同じ集落
9	生福 大園	6尺だけと 6人組	戦時中	有	6月	特に決まってい ない	6月田踊といった。 坂下・平江と同じ
10	下名 別府		大正末			盆や祝いに	別府上下と一緒にしたり、離れたり
11	下名 芹ヶ野	カナヤマ踊（錫杖と マガイ刀）	戦時中まで		7月	行事や田植え後	田植えという
12	下名 深田上		大正初まで				
13	下名 野元	6尺と3尺	昭和25年 まで	有「虎取い」		田植え後	市内を回る
14	羽島 萩元	6尺だけ	昭和59年	有（川内・湯之元の師匠）、 仇討やヤクザ踊	旧6月15日	羽島崎神社 瀬戸野馬頭観音	

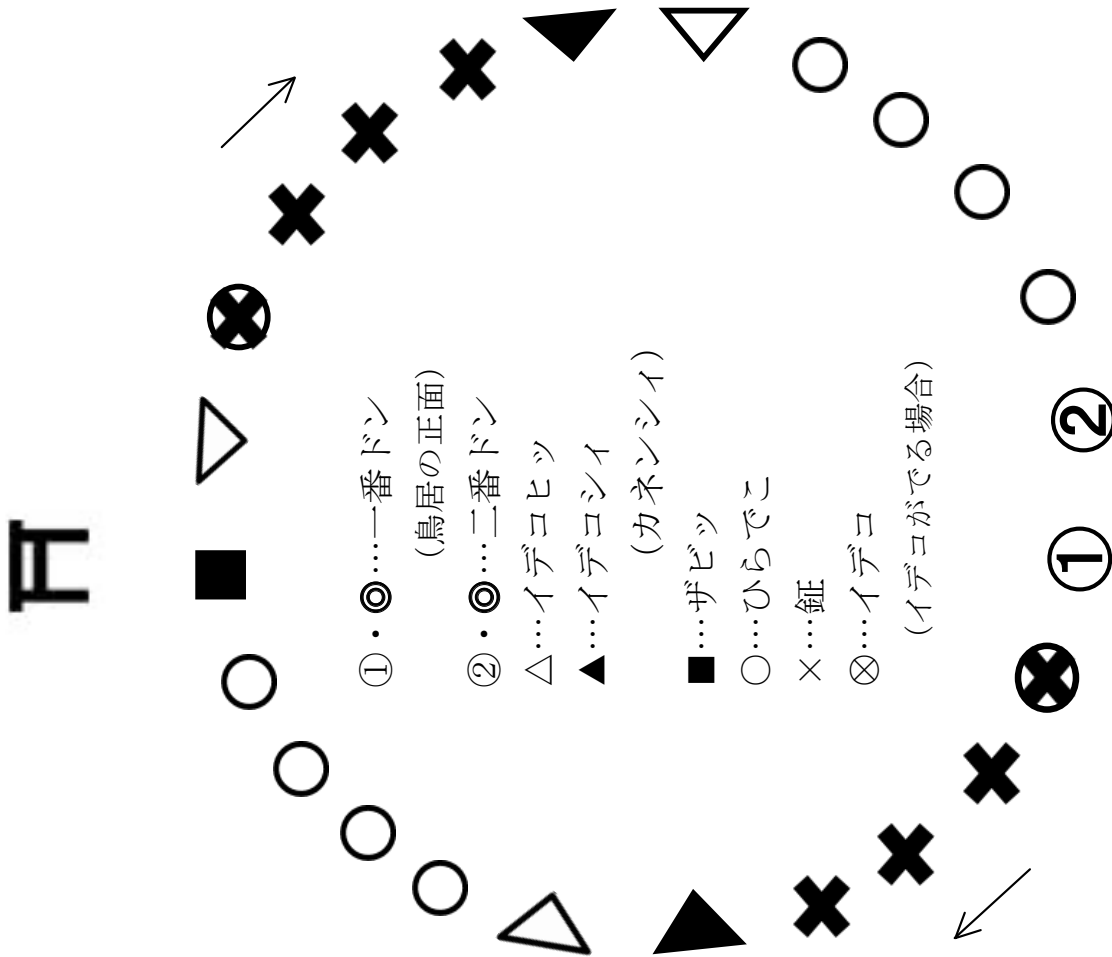
番	場 所	棒・列・組	いつまで	アトヤマ	開催日	開催場所	そ の 他
15	羽島 万福	3尺だけ	戦前		旧6月15 日	羽島崎神社	
16	羽島 平山	6尺と鎌 6人組	戦後	有「鈴ヶ森」など	旧6月15・ 18日	羽島崎神社 瀬戸野馬頭観音	
17	羽島 下山	6尺と鎌 3列 6人組	昭和23年 ごろ		旧6月15・ 18日	羽島崎神社 瀬戸野馬頭観音	
18	羽島 土川	6尺と鎌 3列 6人組			7月下旬旧 6月18日	土川神社 土川と瀬戸の観音	

参考文献 松原武実『鹿児島県地区別民俗芸能要覧 薩摩編』1986 鹿短南日本 文化研究所

# 「市来の七夕踊」

## 打込庭での神酒戴の儀

習しの方法により二つに分かれた一番集団と二番集団が、輪形を作ったときに、一番は打切り神前に向直り一歩出て、神式に則り「オー」と右足を左足前に踏出し、左、右、左と三足で一回転して、一歩出て両腕を水平に捧げ一礼してから、輪形の元の位置に戻る。



酒税法のなかった時代は、床次様所有の田からできた米で、白濁を作り、之を踊の当日早朝に漏して一番搾りを踊子に振舞ったといわれている。これは現代の酒に変わり、踊子には一杯ずつ振舞ってお祝いとしている。

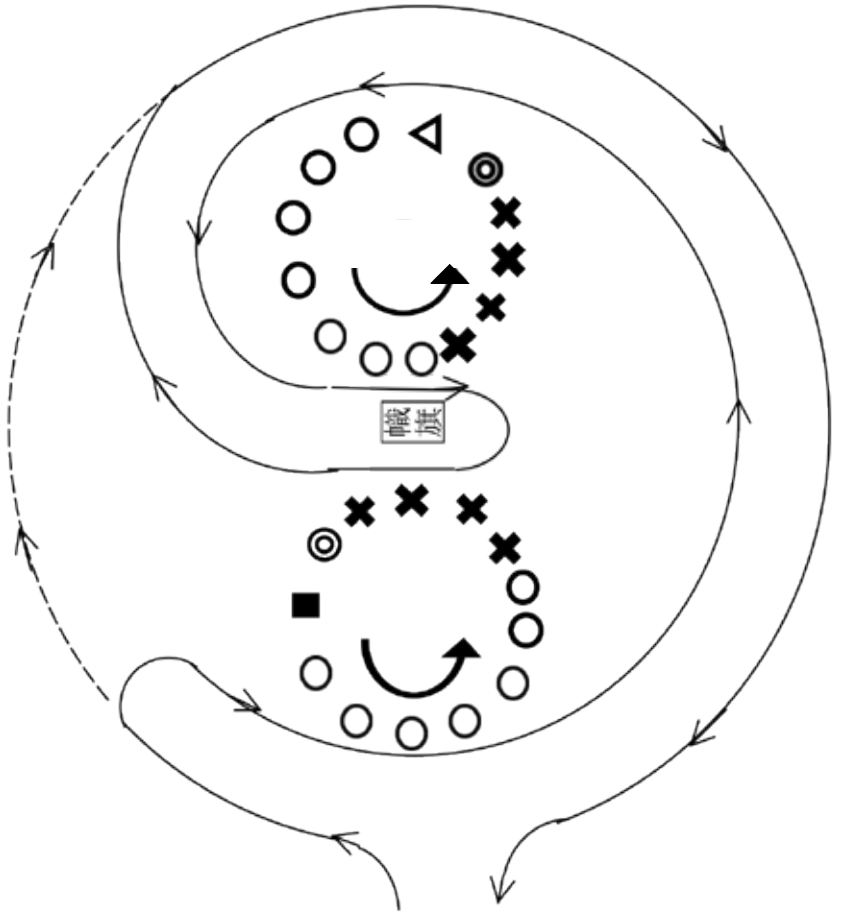
本割出

(花割)

堀ノ内  
門前  
松い山

奴は直進

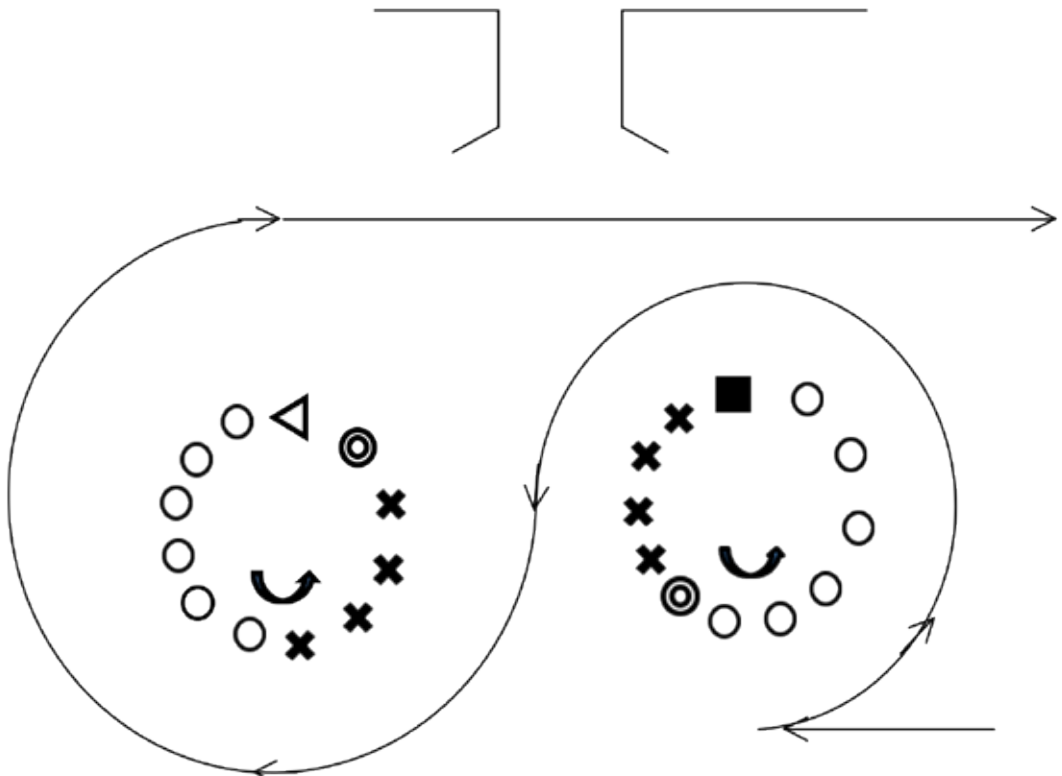
㍻



門前

片割出

㍻

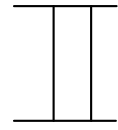
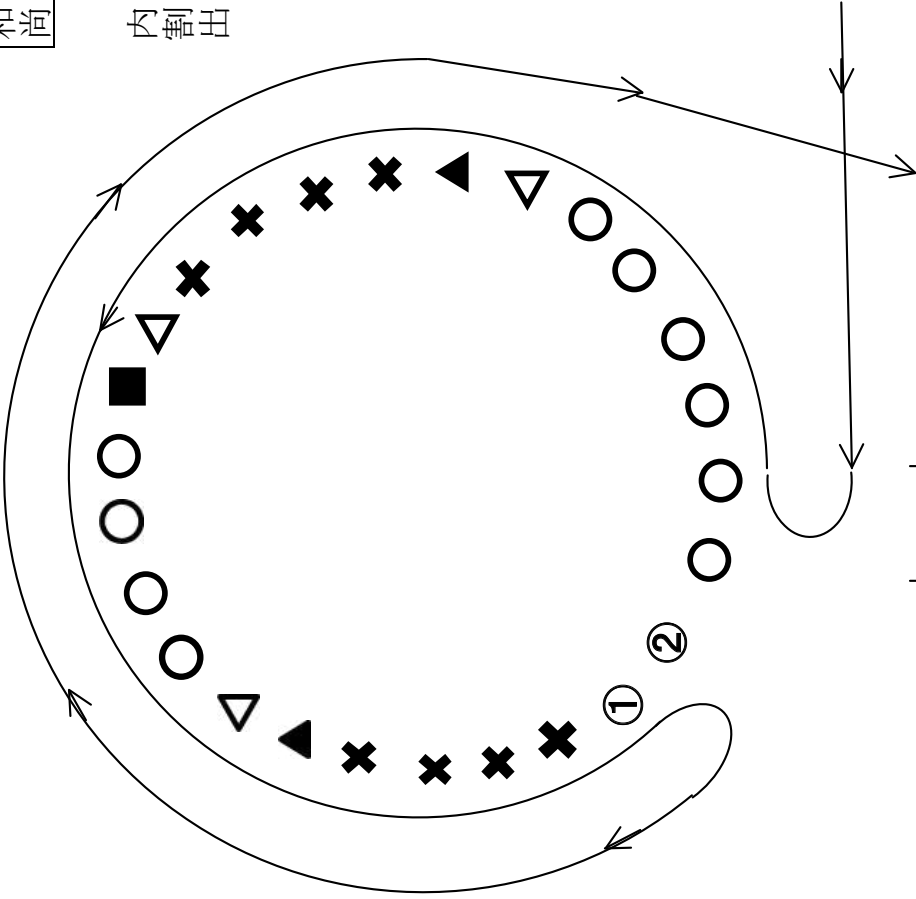


金鐘寺了堂和尚

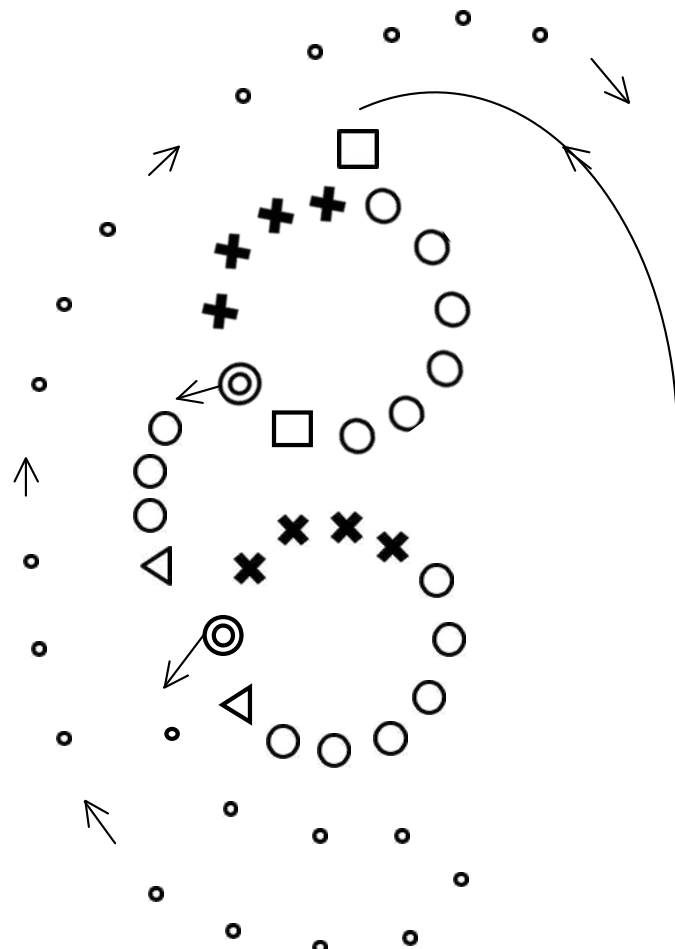
内割出

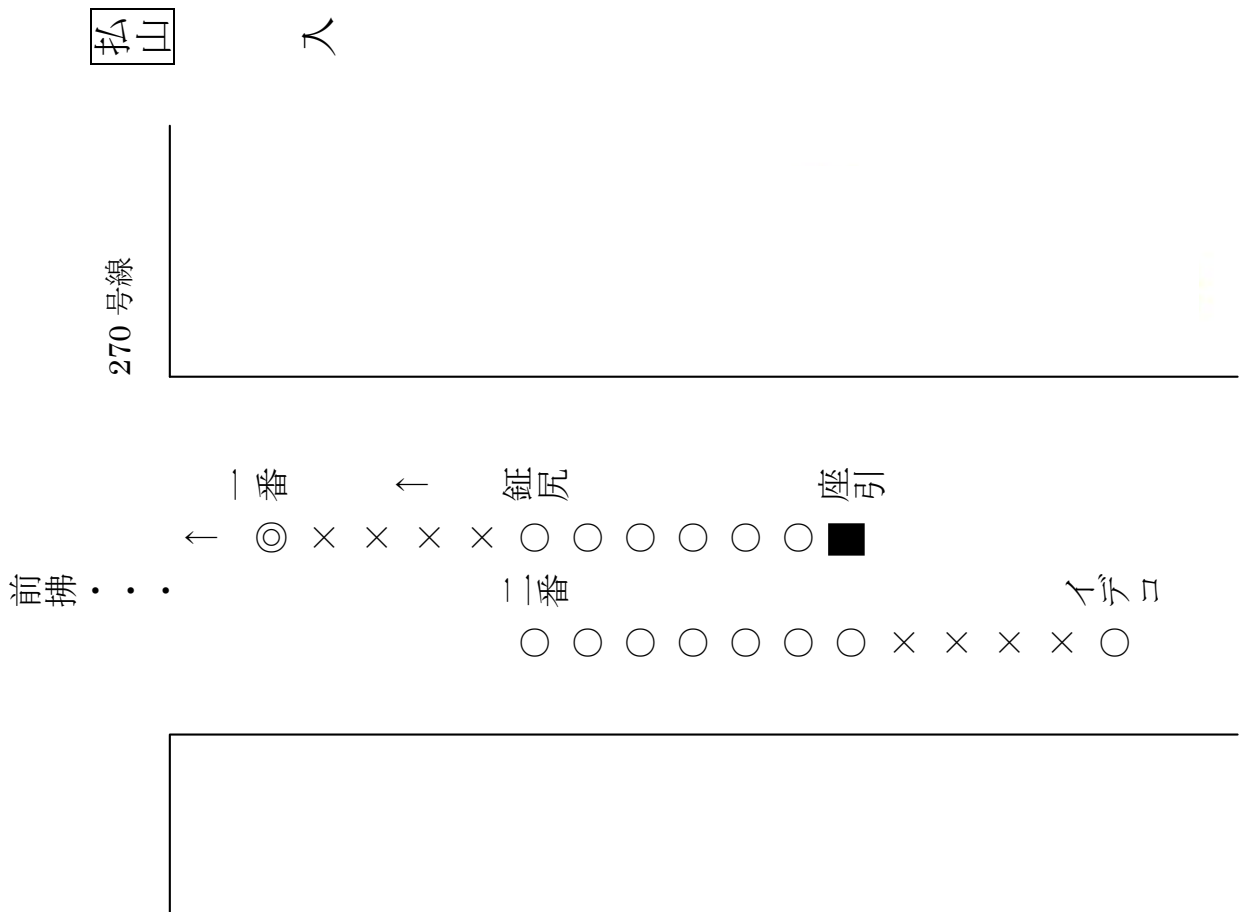
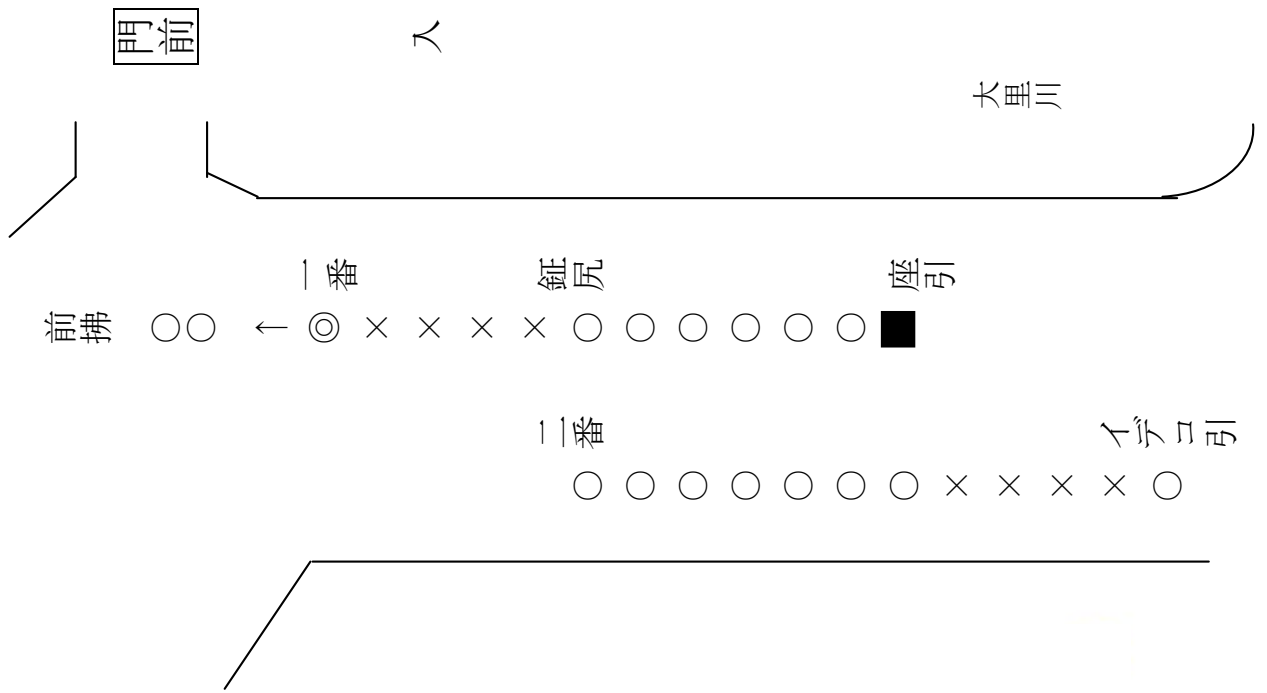
鶴ヶ岡八幡神社境内

㍻



㍻





## 一番踊の礼法 祭り

一、降神の儀 平太鼓・鉦の音のしない早朝に高い所で習の姿で打切を行なう。  
これは、旧習では十五二才が堀ノ内に神酒を受け取りに行く刻の知らせでもあつたという。

二、自宅の出発 踊の正装で自宅を出る前は自宅の神仏に向かい「オー」と右足を踏み込み、左・右・左と足を交差しながら、三足で右に一回りして両腕を水平に捧げ、神前に一礼してから、打切り・打込みの打法で家を出る。

### ◎付記

これが終わったら、庭割の誘導により自宅を出たという。

## 三、帰宅したら

昇神の儀 堀之内の庭上りが終って帰ってきたら、最後の舞である「昇神の舞」を行い、その年の七夕が終るのである。  
当然、これは自宅の神仏殿に向って行なう。

### ◎付記

この儀には一番踊りの出た部落庭割りは、降神の儀には無理も伴うので、せめて一番踊りが自宅を出る時から昇神の儀まで指導、誘導したものであつたという。



## 平成26年度 イベントカレンダー

月	日	
4	12	第13回 徐福花冠祭
	13	第57回 串木野浜競馬大会
	26	第23回 串木野まぐろフェスティバル
5		
6		
7		六月灯
	19	第44回 串木野さのさ祭り
8	2	祇園祭 (旧6月13日)
	10	七夕踊 (旧7月7日)
	24	川上踊 (8月26日)
		羽島南方神社太鼓踊 (旧7月18日)
9	28	虫追踊 (9月23日)
10	2	ほぜ祭 (旧9月9日)
	25・26	いちき串木野づくし産業まつり～ちかえて祭り～
11	23	かんむりだけ山市物産展
12	7	ふれあいフェスタ
1	7	鬼火焚き
	10	恵比須祭
	11	お伊勢講
2		
3	22	ガウンガウン祭 (旧2月2日)
		びょうびょう祭 (旧2月6日)
	29	太郎太郎祭 (旧2月4日)

【協力者】 各関係団体・市民の皆様

三輪光義 蒲地静男 大迫静吾 米丸一二 塩田甚志 古園四郎 羽根田喜助  
春里市武 川畑戸一 宇都多津子 堂蘭静子 久留寿雄 山内美恵子

【民話編 参考文献】

青崎林 1974 『川内風土記』  
阿久根市 1980 『阿久根の昔話』  
荒川在郷異郷校区民編 1971 『荒川郷土誌』  
有馬英子 2014 『かごしま・民話の世界』  
石川純一郎 1999 「河童駒引き」 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館  
市来町郷土誌編集委員会編 1982 『市来町郷土誌』  
奥田栄穂 1980 『かんむりだけ小学校百年記念』 冠岳小創立百周年記念事業実行委員会  
奥田貞三郎 1987 「冠岳余聞」 『冠岳地区史跡探訪資料』  
奥田貞三郎 1988 「別府の二才どんの韋駄天走い」 『くしきの 2号』  
鹿児島県教育会 1971 『薩隅日地理纂考』 鹿児島県地方史学会  
串木野市教育委員会 1984 『串木野郷土史 増補改訂版』  
鹿児島県立串木野高等学校 2000 『生きた地域文化の体験学習』 鹿児島県立串木野高等学校  
串木野市教育委員会 2003 『新編 串木野市文化財要覧』  
坂口武夫 1994 「串木野生福〈十王〉と〈ガラッパ〉どん」 『くしきの8号』  
川内郷土史編さん委員会編 1980 『川内市史 下巻』  
肥後精一 1970 『冠岳見聞録』  
樋脇町史編さん委員会編 1996 『樋脇町史 下』  
福田アジオ編 2000 『日本民俗大辞典』 吉川弘文館  
前田博仁 2014 「米良の神楽と狩猟習俗」 『みやざき民俗 第66号』  
村田熙編 1975 『日本の民話 22 肥後・薩摩・大隈編』 未来社／ほるぷ  
森田清美 1996 『さつま山伏』 春苑堂出版  
柳田国男 1927 『定本 柳田国男集 5』 筑摩書房  
柳田国男編 1974 『鹿児島県喜界島昔話集』 三省堂  
山田慶晴 1972 「馬が死んだ」 『鹿児島民俗 第76号』

【祭り編 参考文献】

『山川神社仏閣名所旧跡由緒物産』 天明7 (1787)  
『儀衛正日記』  
『琉球人行列図錦絵』 『琉球人来朝之図』  
『祇園山琉人立役賦帳』 明治12 (1879)  
『入来定穀日記』 (明治18年 1885)

『薩摩風土記』

しずのおだまき  
『倭文麻環』白尾国柱編

串木野市教育委員会 1982 『串木野郷土史』（補遺改訂版）

串木野市教育委員会 2003 『新編 串木野市文化財要覧』 串木野市教育委員会

鹿児島県立串木野高等学校 2000 『生きた地域文化の体験学習』 鹿児島県立串木野高等学校

市来町郷土誌編集委員会 1982 『市来町郷土誌』 市来町教育委員会

松原武実 1986 『鹿児島県地区別民俗芸能要覧 薩摩編』 鹿短南日本文化研究所

照島神社敬神婦人会 1995 『照島神社縁起』

森田清美 2000 「媽祖と民間信仰についての一考察 - 媽祖と修験 -」 『宗教民俗研究』

第 10 号 日本宗教民俗研究会

鹿児島県立串木野高等学校 1997 『生きた地域文化の体験学習 旭を体験して』

# いちき串木野市郷土史料編集の組織

## 調査の組織（平成25年度）

調査主体者	いちき串木野市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長（11月まで）	山下卓朗
		教育長（11月から）	有村孝
調査庶務	〃	文化振興課長	紙屋直道
	〃	文化係長	新町正
	〃	主任	福谷和也
	〃	史料収集調査員	西峯尚美
調査担当者	郷土史料編集委員会	郷土史料調査員	所崎平
	〃	〃	森田清美
	〃	〃	石堂次美
	〃	〃	徳重涼子

## 調査の組織（平成26年度）

調査主体者	いちき串木野市教育委員会		
調査責任者	〃	教育長	有村孝
調査庶務	〃	社会教育課長	紙屋直道
	〃	社会教育課長補佐	下野信一
	〃	主幹兼文化振興係長	新町正
	〃	主任	池之上智也
	〃	史料収集調査員	寺田緑
調査担当者	郷土史料編集委員会	郷土史料調査員	所崎平
	〃	〃	森田清美
	〃	〃	石堂次美
	〃	〃	徳重涼子

## 編集の組織（平成27年度）

編集主体者	いちき串木野市教育委員会		
編集責任者	〃	教育長	有村孝
編集庶務	〃	社会教育課長	紙屋直道
	〃	社会教育課長補佐	高瀬薫
	〃	主幹兼文化振興係長	新町正
	〃	主事	富岡宗平
	〃	史料収集調査員	寺田緑
調査担当者	郷土史料編集委員会	郷土史料調査員	所崎平

〃  
〃  
〃  
〃

〃 森 田 清 美  
〃 石 堂 次 美  
〃 徳 重 涼 子  
〃 (挿絵担当) 深 澤 章 子

---

いちき串木野市郷土史料集 1 「民話・祭り編」

---

非売品

2015年10月 刊

発行 いちき串木野市教育委員会

編集 いちき串木野市郷土史編集委員会

印刷所 株式会社 川内新生社印刷